

# 川柳塔

平成十五年三月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷九一〇号



日川協加盟

No. 910

三月号

医療法人社団

# 湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科（内科・外科）

放射線科

ホスピス

診療時間 月～金 9:00～17:00

土 9:00～13:00

電話 大阪 6771-4861(代) 〒543-0033  
(06) 大阪市天王寺区堂ヶ芝2丁目10-2  
<http://www.yukawa.or.jp> JR 大阪環状線桃谷駅徒歩3分

## 第4回 文学ルート川柳募集

文学ルート（松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市）

募集作品 文学ルート（5市）周辺の自然や衣食住・信仰・年中行事等に関する習慣・民俗行事などを題材とする川柳。（未発表のオリジナル作品に限ります）

宿題・応募先（宿題に応じてご応募ください。各2句）

|     |              |                                            |                                      |
|-----|--------------|--------------------------------------------|--------------------------------------|
| 松江市 | 「日本海」「小泉八雲」  | 松江市産業振興部 観光文化課<br>〒690-8540 松江市末次町86       | TEL(0852)55-5293<br>FAX(0852)55-5564 |
| 尾道市 | 「映画」「絵」      | 尾道市産業文化振興部 観光文化課<br>〒722-8501 尾道市久保一丁目15-1 | TEL(0848)25-7366<br>FAX(0848)25-7293 |
| 今治市 | 「水軍」「サイクリング」 | 今治市教育委員会 文化振興課<br>〒794-8511 今治市別宮町一丁目4-1   | TEL(0898)36-1608<br>FAX(0898)25-1700 |
| 松山市 | 「人力車」「湯の町」   | 松山市企画財政部 国際文化振興課<br>〒790-8571 松山市二番町四丁目7-2 | TEL(089)948-6634<br>FAX(089)943-9001 |
| 高知市 | 「桂浜」「尾長鶏」    | 高知市教育委員会 生涯学習課<br>〒780-0870 高知市本町四丁目3-30   | TEL(088)822-6394<br>FAX(088)823-1095 |

応募方法

- ・専用の応募用紙、または官製はがき、封書に書かれた作品（FAXによる応募可）。
- ・応募作品には「宿題」及び、氏名（ふりがな）、郵便番号、住所、年齢、性別、電話番号等、必要事項を明記してください。（雅号の場合は本名も明記）
- ・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。応募作品は返却しません。

応募締切 平成15年3月31日（月）（当日消印有効）

出品料 無料 選考 平成15年5・6月

発表 平成15年7月、入賞者に通知します。（表彰式は、平成15年9月を予定しています）

選考委員（第二次選者）仲川たけし・吉岡龍城・橘高薫風  
（第一次選者）昌子 萬吉（松江市）八島 白龍（尾道市）越智 青園（今治市）  
丹下美津子（松山市）竹村 温夫（高知市）

賞 大賞 1点 奨励賞 5点 佳作賞 若干

# 竹之内街道

河内 天笑

「もののはじまり なんでもさかい

三美も小唄も みなさかい

ほんにそやさそやよい堺

はあそやさかい」

古くから栄えた堺の町をたたえる「堺音頭」です。今回は官道の第一号といわれる「竹之内街道」を紹介します。

推古天皇の二二年（六一三年）、そのころ都であつた飛鳥（今の明日香村）と難波（今の大阪市）を結ぶ大道が整備されました。当時、わが国は朝鮮半島や今の中国と盛んに往き来をしていて、これらの国からは船で難波にきました。そして今の大阪城あたりに使者を迎え入れる建物があつたものと考えられています。ここで一旦旅の疲れをとつたあと難波から住吉を通り堺へ南下、堺に入り榎元町を東に折れ（現在の榎小学校近くに道標

が残っています）、金岡町、中村町、野遠町を経て松原市に入り、羽曳野市、太子町を経て二上山の南がわにある竹之内峠を越えて大和の国「飛鳥」へと続いたので。聖徳太子をはじめ、遣隋使や役人たちの行列が通る誇り高き国道一号线だったので。朝鮮半島や中国の文化はこの道を通つて飛鳥の都へ伝わったのです。

しかしその後、都は奈良へ移されました。そして暗（くらがり）峠を通る奈良街道が出来ましたので一旦飛鳥への道はすたれましたが、そののち約六〇〇年ほどして都は吉野へと移され、ふたたびこの竹之内街道が栄えたという歴史があります。また、南蛮貿易で栄えた堺の港からいろいろな物資が大和や吉野へ運ばれた様子が目に浮かぶようです。

『大阪春秋』第一〇三号に「竹之内街道を詠んだわらべ歌」と題し藤井二三氏（川柳塔誌友）が街道の村落を詠みこんだ「まりつき歌」として発表されています。（地元の一年配の人たちから聞き集められた貴重な伝承のわらべ歌です）

竹之内街道わらべ歌

雨が降る降る古市で（ふるいち）

傘を借る借る輕墓で（現・輕里）

馬に乗る乗る野々上で

馬が死ぬ死ぬ新田で（現・埴生野）

コロツと落ちた五軒家の坂で（現・伊賀町）

カネは煙山持つて郡戸（こおず）

煙草一ぶくのむ野村

丹南・松原むぎどころ

一石播いて八斗取り

せんと歩いてまだ蔵の前（船堂町・蔵前町）

足に大豆塚でけました（大豆塚町）

なお、船堂町、蔵前町、大豆塚町はそれぞれ、竹之内街道から北へ約一キロにある「長尾街道」（竹之内街道と併行して東西に走る）沿いの村落名です。



道標

堺市榎元町四丁・南海高野線「堺東」  
東南〇・五キロ

座右の句

てんと虫ここにも小さい輪島塗

(薫風)

私の句

雛あられひいなも皿もおちよほ口

源田 八千代

## 川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 竹之内街道

緑のハイキング

河内 天笑 ……(1)

川柳塔(同人吟)

田中正坊 ……(2)

自選集

河内天笑選 ……(4)

水煙抄

奥田みつ子選 ……(54)

麻生路郎物語(15)

東野 大八 ……(78)

愛染帖

波多野五葉庵選 ……(81)

誹風柳多留二四篇研究

52

茴香の花

政岡日枝子選 ……(86)

「止める」

野下之男選 ……(88)

一路集「極める」

羽津川公乃選 ……(88)

「除く」

細川稚代選 ……(89)

## 緑のハイキング

田中正坊

旧冬、十日間にわたってニュージーランドを訪れた。これまでのツアーは、カナダを除いてすべてアジアとヨーロッパの国々で、赤道を越えて南半球の国へ行くのは初めてだった。ニュージーランドは、日本とは赤道を挟んでちょうど対称的な位置にあり、こちらの冬は向うでは夏にあたる。

国土の大半は北島と南島の二大島で、今回行ったのは南島だけであつたが、ここには全長七〇キロに及ぶサザンアルプスがあり、その中央に最高峰のマウントクック(三、七五四メートル)が聳え、周辺一帯が国立公園で、世界自然遺産に指定されている。

今回のツアーは、名所・旧跡の観光よりも大自然に触れることを目的としており、三日目には、小雨降る中をピニールコートに身を包んで、マウントクック・ビレッジの山道を吊り橋も渡って、往復五キロを歩いた。万年雪をいただく山頂は、その麓まで行きながら雲に覆われて見られなかった。

一日おいて五日目は、フィヨルド国立公園内にあるルートバントラックの一部であるキ

初歩教室「座る」……………三宅保州…(90)

秀句鑑賞「同人吟」……………宮西弥生…(92)

水煙抄……………高橋岳水…(94)

■エッセー 落丁の算数……………森 茜…(95)

弘津柳慶氏を悼む……………石川侃流洞…(96)

岩原喬水さん逝く……………両川洋々…(97)

畏友・越智一水君を悼む……………渡邊伊津志…(98)

追悼 越智一水さん……………和田 宏…(99)

二月本社句会……………(100)

各地柳壇(佳句地十選/岸本孝子)……………(104)

柳界展望……………(119)

三月各地句会案内……………(120)

■編集後記……………楓葉・朱夏…(122)

座右の句

雪女やがては春の風と死ぬ

私の句

賞味期限切れた女も春を待つ

(洋々)

田 賀 八千代

ーサミットの展望ハイキング。山岳ガイドの先導で水河峰やU字谷の変化に富んだ景観を楽しみながら、約一〇をキロ歩いた。キーサミットの頂上は高層湿原台地となっており、ダーラン山脈を中心とする三六〇度のパノラマを眺めながら、ガイドが沸かしてくれたコーヒーとサンドイッチの昼食をとった。

そして翌日は、「世界で最も美しい散歩道」と言われているミルフォードトラックの一部であるグレイドハウス・ハイキングに参加した。この一〇キロにわたるルートは、沢に添う平坦な道でブナの原生林に覆われている。所々にある大きな倒木に苔や羊歯が茂って養分を吸い取り、弱い木には茸の一種であるサルノコシカケが寄生するなど、森林は弱肉強食の世界であることを物語っている。

ブナには赤ブナ・銀ブナ・山ブナがあり、この森には樹齢八〇〇年、幹の高さ四〇メートルの巨木がある。ガイドの話によると、ブナは材質が悪く、材木としての価値が低いいため、伐採されずに原生林になったということで、我が国の東北地方にある白神山も国内最大のブナ原生林として知られている。

この三日間の行程は、登山には程遠いが、ハイキングと呼ぶにはあまりにもハードであった。しかし、落伍せずに完歩できたことは原生林の緑のシャワーとあいまって、老体をリフレッシュする得難い体験となった。



## 河内天笑選

弘前市 高瀬霜石

割り箸がきれいに割れて伸直り  
通帳にはつんとゼロが寝たきりに

練習の成果は足の裏にある

吐きだせぬまんまで終わる喉仏

妻暫時風雪波浪注意報

自堕落を毎日棚に上げて寝る

富田林市 中井アキ

一年の計が年々派手になる

老々介護 視野の限りに雨が降る

添え書きがひと言あつて温かい

芹なずな済んで私のカレンダー

ひかえ目なネクタイが持つ自尊心

たつぷりと眠って心休ませる

鳥取市 福永ひかり

青い星なくなるほどに核がある

美味い店教えてくれる客の列

生きている時間を刻みだした癌

百円館に行けば知ってる顔に会い

ナツメロが若い者には新しい

消費税上げる話をして慣らす

羽曳野市 三好専平

地球上どこまでつづく負の連鎖

ゴジラまで日本を捨ててゆきました

笑ったら損するような人が増え

ゆとり教育作るゆとりのない現場

ガンよりも抗ガン剤で死んでゆき

半額がびつしり詰まる冷蔵庫

愛知県 早川盛夫

ラーメンの汁も残さず寒の入り

忙しいうち貧しさも苦にならず

一日の流れのなかの喫茶店

日本中どこへ行っても年寄りだ

元気です朝のみそ汁夜の酒

縦縞が五本列島冬籠もり

出雲市 園山 多賀子

余生にはルビは振らないありのまま

眼鏡拭き明日咲く舊見極める

温かい言葉拡大コピーする

許すことばかり多くて海の碧

私を何時も宥める紙礫

逆光に私の影がおどろおどろ

香川県 川崎 ひかり

身の文の幸せでよし福寿草

好きになる事には理由などいらぬ

もったいないもつたいたいと2キロふえ

人ひとり許せず闇の中にいる

千人が口を開けば千の愚痴

ありがとうただそれだけの遺言書

黒石市 相馬 一花

若いねといつも鏡に問い掛ける

原色を着てターザンになるつもり

穏やかに話して逆に舐められる

本音聴くために浴びせる高級酒

借金の催促できぬ間柄

七十になって突然五十肩

鳥取市 岸本 宏章

年寄は金持それは嘘だろう

三食に昼寝も付いて愚痴が出る

どの白を溶いても描けぬ銀世界

念を押すことは一回だけでよい

宝くじいつも拝んで買っている

正直に生きているからよく迷う

静岡県 藺田 獭 沓

心地よき空腹午後の陽を仰ぐ

寅さんがひよっこり来そう無人駅

うすい陽を集めずんぐり福寿草

長い夜の枕叩いて夢誘う

流木のドラマ満身傷だらけ

八十年たてば侘しき誕生日

松山市 古手川

光

パチンコに負けてストレスもつと増え

かさこそと落葉に後をつけられる

取りに来ぬ人には当るジャンボくじ

ばたん鍋ついでに参る鞍馬寺

この川を上ると父母の眠る郷

正月はやっぱり郷の初日の出

枚方市 海老池

洋

雪の音さく病室の午前二時

神に借り仏に返すこのいのち

宿借りという生き方もあるのです

物忘れ惚けたらあかん山葵漬け

インプラント差し歯ブリッジ総入れ歯

長考の過ぎて悪手の出てしまい

松江市 銭山昌枝

目的がいろいろあつて孫が来る  
しあわせを零さぬように従いて来た  
わたくしの命に目盛付いている  
節約に徹する嫁の目が尖る  
駄菓子屋の前でしばらく立ち止まる

松江市 三島 淞丘

一芸を得て人生の味を知る  
悔しいが母娘の絆には勝てぬ  
だらしなく涙腺緩む歳になり  
目覚めれば妻も寝ている春炬燵  
足の爪切るも至難な業となり

松江市 津川 紫晃

手の内は百も承知で裏の裏  
なにもかも平等にして陽が沈む  
冬の天 鞭の痛さをもてあそぶ  
大晦日投げたボールがかえらない  
罪ひとつ忘れるためにみかんむく

島根県 森 茂美

駆け足で雲が流れる年の暮れ  
人影もまばらに故郷のお正月  
職安の門に日の丸立っている  
初詣で孫にリストラないように  
再入院妻がせつせと髪染める

出雲市 佐藤 治代

いつまでの命だろうか米を研ぐ  
予定表ぎつしり埋めて翔んでいる  
俺よりも先に死ぬなと耳の底  
うつすらと燃えてときめく七十歳  
罪深い手で梵鐘を強く撞く

出雲市 板垣 夢醉

足六十心四十でマッチせず  
真っ白い大根食つて嘘を吐く  
口喧嘩したいが独り酒を注ぐ  
柄よりも温い布団が心地よい  
立ち話もうお帰りと雪が降る

出雲市 青山 久子

生かされて忘れ上手な毬になる  
神様にとどく橋げた積んでいる  
まだ傘寿花の傘寿と眉を描く  
酒提げて笑い袋がやってきた  
セメントで塗られ小川がそつ気ない

出雲市 小白金 房子

黒豆の艶じつくりと新春を煮る  
おかげ様満願近き春の風  
病窓を出れば商魂新春の街  
神仏を敬う老いの白い数珠  
泣けるだけ泣いたら女立ち上がる

出雲市 伊藤 玲子

カレンダーに君を束縛する印  
福袋目当てに蟻のぞろぞろと  
パソコンの虜になって鍋焦がす  
淋しさへ月が優しい顔をする  
フライパン長い話に煙を出す

出雲市 吉岡 きみえ

ほうれん草のみどりに迷いふっきた  
春だなあ春はわたしを弾ませる  
手のひらのみかんころお正月  
身に合った分だけ回ってくるお金  
決別の受話器重たい音で置く

出雲市 小玉 満江

松風を心して聞くお元日  
一つずつ赤信号の出る体  
見た顔だ名前が出ない曲り角  
望郷よ夢で唄った安来節  
猫の馬鹿九号線で衝突死

出雲市 城 多喜

車窓からビッグな虹が遠ざかる  
まだ汗をかける幸せ残ってる  
わたくしの空間埋める本を読む  
痛いところ突いてくるのは親友だ  
逆風が頬つべ時どき刺しに来る

出雲市 岸 桂子

部屋に灯のない淋しさを知っている  
花散って昨日の事は昨日まで  
忘れ傘わたしを待っているだろう  
医者嫌いアロエジュースを飲んでる  
響かない人とお酒を呑んでいる

岡山市 川端 柳子

くる年を肴に除夜の鐘をきく  
新年の幕おごそかに無理遣りに  
着ぶくれてコタツの守りはして居ない  
デンワベル大阪弁の受け答え  
売れた顔忘れた頃の死亡欄

岡山市 井上 柳五郎

初詣で鎮守の森へ古い二人  
四代が揃って年始祝い膳  
はや曾孫笑顔を見せる四ヶ月  
年輪を一本ふやす賀状書き  
鶴に松初日の軸で床は新春

倉敷市 井上 富子

手袋を繕う古稀の鼻眼鏡  
この人にとことん惚れてきた命  
本題にはいと欠伸する狸  
気の置けぬ仲間と飛んだバスポート  
新鮮な感度で綴る日記帳

岡山県 小林 妻子

伝統がまだまだ息吹く雑煮餅  
酎に酔い武蔵に酔うて見るドラマ  
不景気な子等も新車で帰省する  
金釘流の賀状ちらちら夢がある  
詫びながら跨ぐ故郷の古敷居

岡山県 矢内 寿恵子

ぶらんこの一ゆれ毎にある昔  
打てばまだ響くつもりの自負がある  
花なれば狂い咲いてもとがめまい  
風向きを見てシナリオを書き変える  
百歳の長さ短さ旅日記

岡山県 大石 あすなろ

ピリオドは打ったが風が火種吹く  
リハビリの足につめたい冬の風  
疲れきった脳にたつぷり水をやる  
封切れば老母のぬくみが転げ出る  
三猿と決めてもみたが疲れます

竹原市 小島 蘭 幸

机を拭いて明日も丁寧に生きる  
おみくじの吉と乗り越してしまふ  
不思議な縁で昼から酒を飲んでいる  
ていねいに生きるしなやかに生きる  
鏡の中に五十五歳の私がいる

竹原市 三宅 不朽

七十四歳を堪えてみる鉄棒  
いい人と言われたくない窮屈だ  
お好み焼きの話もまじる初詣で  
ゴミ袋に悲しい記事が振じ込まれ  
水平線なものもないのに憧れる

竹原市 森井 菁居

滑り出し上々うっかり気を許す  
ふしあわせ疑い深く生まれつく  
胃袋に聞くと飲み過ぎだとぬかす  
山水に勝るものなし掌ですくう  
満腹になつて口数多くなる

竹原市 岩本 笑子

しんかしんかと頷くように雪は降る  
長男の門出だ乾杯の音頭とる  
律儀さの姿で水仙咲きこぼれ  
正月に咲く気になったフリージア  
もう空に風など無いが初詣で

広島県 福島 万年

宿題は無し入学までの仮釈放  
カフェよりも抹茶が旨い爺と婆  
先生の魔法の杖で子が光る  
桜咲く黒枠写真撮っておく  
寂しくて月に向かって吠えている

広島県 藤 解 静 風

経済も政治も明日を見失う

凡庸へ等身大の欲が棲み

善人になろうシャワーを浴びてくる

弥陀の掌にみんな預けて軽くなる

ご自愛を交わしデートの日をおわる

熊本県 永 田 俊 子

人不信 雀が来ないお正月

腹芸の上手な鬼の鬼ごっこ

代議士の反り身屈め身夢哀れ

妥協せず回った無冠の父の独楽

これからは神にまかせる時刻表

熊本県 高 野 宵 草

カッコいい夫は着せ替えお人形

袖ひいてアピールしてるバラの棘

本心を語れる人と酔いすすむ

女性だけ喋り電車はゴトゴトゴト

天皇のテレビへ明治正座する

唐津市 市 丸 晴 翠

逸る心捌ききれない足と腰

本音出し登り始める八十路坂

流鏑馬の的は娘の恋敵

木枯しに健気な沈丁花の蕾

裁ち台と鯨尺とに母が居る

唐津市 山 口 高 明

放漫の付けを庶民が背負わされ

ポンコツじゃ無いぞ立派なクラシック

体温を計って妻は待ち構え

瘤つきのバツいち女性逞しい

腹心の部下と勝手に思い込む

唐津市 久 保 正 剣

毒カレー死刑に物証ない不思議

お一人さま一つ限りに騙される

牛舌のシチューが好きでパンにする

ゴム印で赤い羊が来る賀状

まだ死ぬぬいのちに貰う舌下錠

香川県 神 保 坊 太 郎

神さまを梯子している初詣で

正月は神様もなる不眠症

肥えすぎてカラスは山に戻れない

盗人の財布の中も見た論吉

永生きの秘訣問われる歳になり

香川県 清 川 玲 子

新年をウールマークで着膨れる

寡黙なる父の一言効いてくる

薬では効かぬ病の娘が一人

高い高いする児に夢の一かけら

年毎に高値になつてお年玉

香川県 瀧井 勝

天を突く気合凛々寒稽古  
塵の山人間無駄の多いこと  
祝福の呪縛を受ける婚儀の日  
糖尿肥満折込みでくる脅迫状  
平穩に慣れて暮らしは隙だらけ

愛媛県 中居 善信

ただ誰と言う訳でなし人を恋う  
見てならぬ夢を何度も見て老いる  
色素変成網膜妻は闇の中  
ただ一人枯野のなかを逝った父  
萩の咲く辺りに母は送りたし

高知市 北川 竹萌

身の回り数字ばかりが取り囲む  
花の種いっぱい吊るし寝正月  
隣から白山茶花がこちら向き  
句が生まれ推敲タバコ深く吸う  
三ヶ日三食に爛許される

弘前市 福士 慕情

春あらし絵馬のぶつかる音がする  
最後まで残ると碌なことが無い  
河川改修魚の住めぬ川造り  
犯人を応援したくなるドラマ  
刑務所と職安の混む平和国

弘前市 高橋 岳水

天気図は縦縞北の春はまだ  
合併をしても変らぬ過疎の空  
手さぐりで来た道だから自負がある  
人間のエゴをあばいて潮が引く  
変化球かわして今の俺がある

弘前市 今 愁女

白酒を清酒にかえて雛の客  
外孫の初雛えさに爺が酔う  
群羊も走れば迅い春の風  
浮雲のほかは映らぬ春の水  
春風をひかりに変えて猫柳

弘前市 宮崎 ヒサ子

今年また吊った破魔矢にぶら下がる  
正月の会話何かと遺言めく  
楽しかった一日雪も小休止  
もう一度話を戻し聞いてやる  
潮が引く二人ぼっちの香を焚く

弘前市 相馬 銀波

逆風に明日の僕が試される  
雑念に埋まると黙る筆になる  
リバイバル演歌に染まるままねむる  
沢庵の音が夫婦のハーモニー  
結論が出そうグラスを持ち直す

弘前市 蒔 苗 果 林

東京都 岸 野 あやめ

夜の音を包み大雪降り積る

手製地図まずスーパ―と美容室（東京の生活）

雪注ぎ年越しお風呂和らげる

すれちがうゴメンナサイも東京弁

津軽にも愛宕神社の除夜の鐘

毎日のようにポストにある用事

佳い年のしるし元旦朝陽焼け

孫が来て姪来て新居あたたかし

ブルドーザー門松凌ぐ雪の山

マンションに缶詰で居て二キロ痩せ

弘前市 一 戸 ツ ネ

東京都 後 藤 早 智

誇大妄想枯木の庭をジャングルに

原点に戻るおせちの三ヶ日

目を閉じてブラックホールの中に座す

百態の羊と語り明かす幸

もろもろの邪悪を攫う除夜の鐘

飛び入りの異国の客と屠蘇談義

マーカーット魚眼レンズの稼動中

お年賜祖父に嬉しく差し上げる

招き猫ウインクしてる縄のれん

まだ坂を登る気にいる未年

青森県 西 谷 大 吾

国分寺市 酒 井 輝

この街で生きる決意の雪を踏む

光り物つけずに妻が美しい

地吹雪を父は必死に突き進む

ポストまで歩ける幸に気付かない

荒縄で吊られた鱈の眼が凍る

里の子になつて泥田の温み知る

おんおんと津軽の雪は哭いて降る

おやすみのそれから長い母の夜

軒つらら解けて津軽が甦える

横文字を唄い会話のできぬ歌手

東京都 播 本 充 子

横浜市 清 水 潮 華

大穴が出るかも知れぬ南風

命の灯快気祝へ駆けつける

楽しいが決して楽でない主役

スイッチを切替え急ぐ初仕事

頑固爺イも意地悪ばあさんも花見

穴の開く予定友情埋めてくれ

初心者にわかってもらう汗をかく

手助けを頼む笑顔に馴れてくる

達人が苦勞話で笑わせる

地理音痴言えば脳まで疑われ

横浜市 小野 句多留

多機能にうんざりしてる老いの指

網取りにモンゴルの意地燃える四股

肉筆で加える賀状は読み返す

昨年の残りを詰める福袋

総入歯過程知ってる夫婦独楽

横浜市 保田 絹子

しみじみと千変万化富士仰ぐ

苦しさも不況も知らぬお年玉

達人の語る哲学マイウエイ

望郷に駆られ尋ねる文学路

褒められて自信をつけたはにかみ屋

横浜市 菊地 政勝

新年はジャンボくじから夢取られ

上げないで俺の煙草と発泡酒

雨洩りの家をローンが追いかける

換気扇家のさんまを言いふらす

貸しはがしして銀行が生き残る

横浜市 田中 笑子

日帰りの旅に満足母の笑み

順番にならぬ巢立ちに親悩む

段々と親に似てくる癖の数

北風に舞って落葉は歌い出す

紅葉をみんなに見せて木々眠る

富山市 島 ひかる

初夢のナスに戒められている

ストレスを発散除雪しています

一年ぶり雛人形にある笑顔

生きてゆく力となった愛一途

幾年月ドラマが続く拉致家族

富山市 舟渡 杏花

思い違いをまだときめいてるおばあさん

掛値ない首の一つが売れ残る

注目の傘がひっそりたたまれる

ときめきがひとりの部屋で乱舞する

そしゃくしたはずのことばが逆戻る

滋賀県 中 宗明

友見舞い元気な我が身ありがたい

通勤のルートに飲み屋二三軒

目の前に現金積まれ印を押し

パーティーの誘いマナーに気が重い

風邪熱と多寡を括って余病呼ぶ

京都市 高島 啓子

秀才で鳴らした人の二度の職

音立てて生きていたのは四十代

調停へ靴音高く女性来る

コンビニのおでん他人と思えない

平凡な私小説なら書けそう

京都市 都 倉 求 芽

北の鏡に映る日本の戦時中  
あの雲は竜の墓場か冬の空  
いくつになっても浮世の風というものは  
霜やけが今年の冬を打診する  
散歩には少しさびしい小銭入れ

京都府 丹後屋 肇

ユーモアが利いて空気が入れ替わる  
枯落葉しばらく僕の肩を貸し  
幸せな気分誘う髪型の型  
狂暴な遺伝子もある牡羊座  
五円玉賽銭箱に重い音

京都府 稲 葉 冬 葉

本当にほんとうですか月旅行  
ご油断召さるな過去は生きている  
ただいま おかえり それぞれ部屋に散る  
確かに生きている六度目の未  
妻病んでさて男はندوق生さる

大阪市 津 村 志 華 子

菰を着て少しはにかむ寒ばたん  
四方山の話がはずむ掘炬燵  
一合の酒ほどほどの酔いごち  
満願を果たす鞍馬のささめ雪  
今日もあしたも弥陀に任せている命

大阪市 町 田 達 子

雪崩の恐さを炬燵の中で聞いている  
若き日の息子にはらはらせられた  
三ヶ日過ぎて列島氷漬け  
母のこと無性に恋し墓詣り  
寒風の中墓前で不孝詫びている

大阪市 板 東 倫 子

七草粥春の香りと彩りと  
辛口の批判の底にあるぬくみ  
不況下に突立つ高層ビルの群  
気まぐれな鬼が戦をすと言ふ  
百十歳めつちや可愛いおばあちゃん

大阪市 前 たもつ

喘息発作点滴注射三日間(年末入院す)  
近未来先取りし乗る車椅子  
幻覚症状きつと点滴後遺症  
病院食うっかり誉める妻の前  
薬害か賀状書く手がまだ震え

大阪市 神 夏 磯 典 子

だんだんと子供にかえるのが淋し  
飽食の果ての体に鍼お灸  
キヤラメルはいつも離さず持っている  
生命保険断わられてから元氣  
他人だから少々の事割り切れる

大阪府 伊藤 博仁

あつけらん忘れましたに弾が出ず  
番犬をじゃこで手なづけ届け物  
おこわ買うメモは私の誕生日  
犬に靴履かせて散歩平和ばけ  
空桶に歌を一杯詰めに行く

大阪府 鶴田 遠野

自分史に悲喜こもごもの数え唄  
言い訳は呑み込み妻の愚痴を聞く  
老母囲む家族写真で年が明け  
娘の挙式我が家の論吉居なくなり  
両替をいやがる孫のお年玉

大阪府 中田 あい子

お年玉手にした孫ははやバイバイ  
あの子よい返事でいつも得をする  
カニサボテン桃色が咲く寒の朝  
年輪を重ねた芸を顔見世で  
テロのあと片付けついてニューヨーク

大阪府 西出 楓 楽

ウォーキング北風小僧道連れに  
コーヒート酒にうるさい自由業  
芝居観てまっすぐ帰るあほらしさ  
六十路まだ捨て身の恋をするつもり  
バレンタイン喜劇悲劇が始まるぞ

大阪府 古今堂 蕉子

日だまりに絵のように居る母と猫  
一泊の北海道は疲れ旅  
裕次郎館やっぱり君はすごい奴  
背のびして集合写真に参加する  
何してもうまいかない今日でした

大阪府 渡部 さと美

生きのびた命ゆっくり水をのむ(昨年夏家が全焼)  
落ちたなら這い上がるのみ元はだか  
仮住まい深く一礼して離れ  
がんばれの孫の絵手紙ふるい立ち  
こけた身に川柳という心柱

大阪府 榎本 舞夢

神様に今年も愚痴をもらします  
祝宴をきりと締める菊の花  
上り降り手摺りを掴む歳となり  
いい声の持主なのに音痴です  
好きなものの最後に残し食べている

大阪府 川久保 睦子

約束をしてない花が咲きました  
枯葉舞う風の喝采浴びながら  
男の嘘またかと馬鹿になつて聞く  
朱を少し足して春風まつている  
ルージュ引き亡夫に元氣見せに行く

大阪市 中澤伽羅

和泉市 岡井やすお

元旦に咲いてくれない福寿草  
円満な人を囲んでまあいい輪  
リビングになって正座が遠くなり  
音のした方へみんなの顔が向き  
癌告知下手な芝居はできません

大阪市 玉置英子

母の訃を聞いている目に寒椿  
アメ横のニュース不況はどここの国  
七草粥あとは普通の毎日に  
不景気に上げる気配の消費税  
えべっさんうちもよろしゅう頼みます

茨木市 藤井正雄

親指でグーと肉じゃが母の味  
二階歯科三階耳鼻科通院中  
日向ほこパズル解けずに眠り出す  
駅員に薬局を聞く旅の風邪  
字余りな妻に舌足らずの夫

泉佐野市 山本蛙城

北からの核の脅しに寝正月  
ゴミ出してゴミ処理場はあっち行け  
ある事情刑務所誘致する町も  
欠伸してこんな良縁聞いていず  
ビゲン塗りどうしようもない薄い髪

ご近所を睨んで遠い国とキス  
このままじゃ二つに割れるこの地球  
生きている限り税金追って来る  
日本語を物にしたくば相撲部屋  
日本にもぎゅつと言わせる一手欲し

河内長野市 井上喜醉

新年の茶の間さわやかウイーンフィル  
国中の数字を積んだ予算案  
名物のそば滑り込むのど仏  
不満でもないやいや払う消費税  
医者と縁切れぬ間は大丈夫

河内長野市 水谷正子

友達が皆若返る新年会  
出さぬ所六日に年賀なぐり込み  
寒い日は福沢さんも出てゆかず  
植え替えた水仙咲いた小さい幸  
七草はそこら歩いて採ってくる

河内長野市 加島由一

監督が毛布で包み込むゴール  
幸せは松竹梅の竹くらい  
一銭も出さず任すと言われても  
手をとると握りかえされ怖くなり  
核と子で援助交際せまられる

河内長野市 村上直樹

幾たびの苦難超えてや楚々と梅

沈丁花乳の香がする母がいる

ほどほどが薬味と知った生きたる知恵

神様にご免と詫びて食べ残す

足るを知る豊かさあれば明日も晴れ

河内長野市 山岡富美子

涅槃まで描き続ける未完の絵

好きな子のえくぼがでかいクレヨン画

すんなりと御免と言われ負けました

お茶の間で武蔵と旅をする門出

デジタルの風に乗りたいたい古時計

堺市 山本半銭

烏龍茶で乾杯をして盛り上げる

底冷えに耐えたら芽吹く樹もあるう

口に出す心配くらい多寡がしれ

女と猫同じ気儘と気位と

値下げまで待つて大トロゲツトする

岸和田市(故) 高須賀金太

美しい空とり戻そノンフロン

田中さんボケに巧まざるユーモア

しあわせは鰻をつかむより難儀

春やなあお相撲さんが歩いてる

水平線あすを見据えている眼

岸和田市 さよ子

いくつもの恋が育った花時計

ご近所のニュースは口で運ばれる

お手伝いしながらぬすむプロの技

小回りの良さ適当に使われる

悲しいなうっかりミスが多くなる

交野市 森本弘風

加齢です医者が上手を言うてくれ

専用車女の性を見せている

長い足アグラが楽と孫娘

おみくじは今年も吉の初詣で

お正月いつものメニユー子等待つ

堺市 矢倉五月

年明けてメガネの度数ひとつ増す

悟られず聞き流す技上手くなり

飼犬のお蔭で出来たお友達

五割引買わねば損をするように

自転車転け方さえも年を取り

堺市 和田つづや

川柳も碁もカラオケも呆け防止

前歴で言い訳聞いて下さらぬ

生活に追われたままで夢は夢

金のある人に敬語が出てしまう

にんげんが好きで悪人にはなれず

堺市村上玄也

吹田市穴吹尚士

性格の悪さ血液型のせい  
一本の電話が嵐巻き起す  
妹が先に嫁いで知る孤独  
指輪をはめられ自由を奪われる  
定年後妻に白旗立てている

堺市志田千代

外国でも笑いのとれる太郎冠者  
ブレゼント一筆啓上だけでよい  
やさしさの借りを背負うて生きている  
NOが言えわたし私に戻れた日  
初デートから割り勘を通して

四条畷市吉岡修

うんとこさ生きて年金邪魔をする  
神様はきつとこの顔手抜きした  
愛だけのブレゼントではだめらしい  
防犯のカメラヘボーズして照れる  
大国が壊して小国から支援

吹田市山本希久子

2003年スローギアに切り換える  
お月さま一人の兄が死にました  
橋を渡って気分転換するつもり  
平凡な顔で記憶に残らない  
冬の陽にすかす人間の裏側

使わずに惜しい気もするエアバッグ  
にこやかにバトカー息を吐けと言う  
今年また拝み甲斐ない天満宮  
もうそろそろ課長と妻が力む春  
妻の座に自信がでんと座つて

吹田市野下之男

服着ても着んでも富士は日本一  
毎日を泣き笑いする体重計  
欠けてからしみじみ思う歯のご恩  
デフレには付ける薬が無いらしい  
タマちゃんも人気の怖さ思い知る

高石市浅野房子

札束で頼つた叩きたいが無い  
残照を背にトボトボと下り坂  
頑張つて今更何を頑張るか  
オカリナに誘われ踊る私はコブラ  
立て板に水のペースで押し切られ

高槻市傍島克治

雨男 雨の風情を褒めたがり  
鬼瓦見ない振りする猫の恋  
マンネリでよしこの波風のない暮らし  
辻褄が合えば合ったで怪しまれ  
煩惱がまだしがみつく喜寿の初春

高槻市 井上 照子

豊中市 山門 タミ

年金の飛んで消えゆく年の暮れ  
初恋の彼も一人と風便り

畜生に劣る愚かなテロ地獄

就職の出来ぬ孫の背張りがない

柏手を打って欲ばり祈願する

高槻市 左右田 泰雄

喜寿過ぎてしみじみ花のある暮らし

ビー玉の遊びを孫に伝授する

風邪ひいてぐつと背中が丸くなる

真相を明かさぬままに幕が引け

一つ音たてて静もる石の庭

高槻市 西谷 治三郎

おしゃれして見てもやっぱり喜寿の顔

集団で就職できた頃が華

古い服手ばなすでなく着るでなく

金かけて食い瘦せるのに金かける

嫉まれ洗脳されて喜寿となる

豊中市 安藤 寿美子

年賀状だけのつき合いそれもし

あてにする孫はスキーに行っちゃい

メールではいつも明るい話する

帰宅して仰天鍵をかけてない

再就職した父親を案じる娘

また来るネ握手する手はなれない  
指折った待ち人帰る空虚さよ

同時着ミカンラッシュに持て余し

酸素との道連れ出来た夫の旅

ベッドからベッドへ通う糸電話

富田林市 藤田 泰子

羊にも角があるのを御存じか

ヒヤシンス夢ある部屋にしてくれる

ペット屋で見つけた森の哲学者

目が合って子兎一羽買ってくる

真っ直ぐは好きボブラも男気も

富田林市 片岡 智恵子

欲もてばいいホルモンが増すという

憤懣を話す相手のいない午後

価値観の全く違う老いふたり

面影は遠いほど澄む子守歌

鼻持ちのならぬおとこと置いた距離

富田林市 大橋 鐘造

さよならを上手に言える不仕合せ

うれしいな私の座る場所がある

下心見たく誘いに乗ってみる

幸せな時間と思う無駄話

齒に衣着せぬ情けが身に沁みる

藤井寺市 高田 美代子

えべっさんへ二礼二拍手して帰り

戻れない位置に男の駅がある

だんだんと冬がこたえる風邪薬

リタイヤを考えている小休止

口も手も出さぬと決めているダルマ

藤井寺市 鳴谷 瑠美子

譲つたらバスの鳴らしたクラクション

薄化粧恋人の意になうなり

しなっても笹は自身を失わぬ

わたしから離れぬ月もひとりぼち

寒椿雪を背負うて耐えている

藤井寺市 太田 扶美代

自己主張丸太の棒の形する

観光でパールハーバー見るなんて

六十の意気込みパソコンを開く

貧乏の想い出底なし沼のよう

マフラーを編んでるうちに恋は逃げ

羽曳野市 酒井 一壺

割り勘ですつと続いている仲間

どの会もみな割り勘と社の掟

拝まれてしおしお味方引き受ける

失敗をすぐ運にする無責任

お医者さん裸ばかりを診て暮らし

羽曳野市 徳山 みつこ

風の向き黙って読んでいる羊

薬の中であやかに住む寒牡丹

割り勘でツルリと入るうどんなすき

バリアフリー最後に開くのは心

持たぬ国にもふりかかる核のツケ

羽曳野市 吉川 寿美

松過ぎてボツボツ主婦の顔戻る

心地よく耳をくすぐるおべんちゃら

あれほどに気丈な母が二度童子

賽の河原で卒寿の母の足袋裸足

三十七の黒石なぜに死に急ぐ(従兄弟急死)

羽曳野市 川口 信子

目に見えぬ線がくつきりある同居

自立する米寿の母の万歩計

聞く耳をもてば良かったなと悔いる

戻れない若さへせて丸く生き

誰もこぬ玄関だけど春の花

東大阪市 谷口 義

音無しの構えで歳をとってゆく

隠してるわけではないが黙ってる

可愛気のある男には敵わない

むだなこと何もなかった実南天

梅の咲く季節は風邪を引いてます

東大阪市 北村 賢子

寝屋川市 森

茜

わたくしをすっかり捨ててカニ食べる

小さくていい幸せヘジャンプする

肉親に頼らず生きるホームレス

百均のカルカン猫のお正月

やりくりをしてひまわりのような母

東大阪市 笠井 欣子

思い込め神の近くに絵馬かける

鍵穴もハートの鍵も狙われる

病院に作ってほしい老人科

安住の地あり冬空晴れ渡る

新年の抱負体重減らすこと

寝屋川市 江口 度

ワンタツチの傘が嫌いな春の雨

無駄な金持たずに発った妻の旅

観衆の息をひとつにする人気

いやな看板ばかり目につく犬散歩

コーヒーを思うと妻が持つてくる

寝屋川市 平松 かすみ

片言のボーイフレンド居て楽し

夫婦です食べたい頃がわかり合い

ジェスチャーで通じるひとと住んでいる

留守番へ好物作るサークル日

驚いた資源の無駄を孫が言う

ナチュラルに時代おくれに生きてます

スベアキーもう落とさない首に吊る

枯れ木立抜けマラソンは続くなり

すんなりと武装解除はむつかしい

四十七キロへまさかの体脂肪

寝屋川市 堀江 光子

この辺で息継ぎ足そう十二月

猫の仔を貰うてからのおつき合い

用心の重ね着をしてルミナリエ

座に交じり手酌にはない味に酔う

控え目な苦労話も苦労人

松原市 小池 しげお

名医だとおもう白衣がよく似合う

賞状がとっても好きな応接間

下心知っているのについて行き

貯金箱少し貯ると割りにくい

化粧していない看護師さんが好き

松原市 國見 蘭香

ぞくつときた即風邪薬大晦日

水鳥が首をすくめて無表情

けちくさい母さんの子だしようがない

遊び心やつと育った六十路

円満へ一寸の虫だまらせる

箕面市 岩津 ようじ

首体操ボキボキと骨の音  
温暖化どころではない今朝零下  
子はスキー親ガラス拭き年の暮れ  
腰と膝喜寿と傘寿の嘆き合い  
饒舌が消えた傘寿のクラス会

箕面市 出口 セツ子

良い親の免許講習おまへんか  
入れない傷を心につ息子  
干涉と愛の境界線が無い  
魂を投げると重たがる息子  
愛し方愛され方が解らない

八尾市 宮崎 シマ子

新しい靴も鞆も欲しい春  
春雨に芽吹くあの夢この夢も  
鬼の目にも涙妻の目にも涙  
生涯の伴侶を直感で決める  
居酒屋の休みに合わす休肝日

八尾市 宮西 弥生

駈け足で女ひとりの人生譜  
歩いたら歩いたぶんの視野光る  
ぎりぎりの年金までに死んでやる  
あした吹く風に乗ります昼寝する  
眼の前のひとも何かのご縁かな

八尾市 吉村 一風

頑張っているかと友ももう八十路  
追われることも追うこともなし師走風  
働けるよろこびを聴く縄のれん  
雪しんしん妻に酌がれて旅の宿  
方便と言うても嘘と目がしゃべり

八尾市 高杉 千歩

新老人へスタート喜寿の春  
真ん中を歩くと決めた春帽子  
呆け防止思い出すまで諦めず  
母さんが死ぬとは誰も思わない  
二千円札迷惑そうな目でもらい

八尾市 生嶋 ますみ

チャンネルのどこにも影のない不況  
人様の籠に目がいくレジの前  
傷心へ微笑みくれるさざん花よ  
何もかも良く出来る人たてておく  
毎日のリズムに乗ってする介護

八尾市 村上 ミツ子

未だ夢の入り口にいる六十五  
信じ合い許し合えるという家族  
何欲しいと聞かれて元氣所望する  
不整脈の姑は卒寿にあと一つ  
誰も来ずどこへも行かず三が日

八尾市 井 尻 民

姿見に今日のおしゃれを見てもらい  
冬触れの長雨ひとりニニロツソ  
早よ着んと派手になるわと帯をしめ  
穏やかな時間は神の贈りもの  
遠くから見守るだけの母の愛

八尾市 神 原 まさと

暴漢が老いの気迫の杖に負け  
お賽銭拾った分は別に入れ  
母さんのおでこは体温計になる  
バイキングホテルの朝は食べ過ぎる  
暖房を入れぬと知恵も回らない

八尾市 山 本 宏 至

このピンチしのげばきつと来るチャンス  
伊勢帰り赤福を買うナンバ駅  
喪の人に思わず知らずお目出度う  
初夢を見ずぐっすりと眠る幸  
あつけらかん友の話に毒はない

大阪府 初 山 隆 盛

袴をつけた賀状が畏まる  
春風が鞆の浜焼き呼びにくる  
灯に当てていけすの鯛を派手にする  
歳を取る見本のような人がある  
ぼったくりネオンの町にテロが出る

大阪府 米 澤 俣 子

初日の出共に元気を感謝する  
この先も飽きることない白い飯  
白梅の凜と美人の佇まい  
痛いところやんわり突いてくれる友  
願いごと多くて神に嫌われる

大阪府 澤 田 和 重

やきもちを焼いて可愛い妻になる  
坊さんが御布施忘れていきはった  
恵まれてカラスが森に帰れない  
小便の高さ競ったのは昔  
雰囲気で越してはならぬ線を越す

神戸市 山 口 美 穂

新年の鏡へ本当の歳を告げ  
年明けてあれよあれよで小正月  
金に縁なかった人が札になる  
お日様よろしくこぼれ種の芽生え  
統廃合 銀行名がややこしい

芦屋市 黒 田 能 子

陰日なた少しはあって面白い  
返答に困ってるのにせまられる  
窓口で番号だけの名で呼ばれ  
淋しくて羊も人も群れている  
より好みされてチラシを配られる

尼崎市 松下 比ろ志

尼崎市 長浜 澄子

初春の香りも入れて屠蘇を酌む

祖父祖母の顔思い出すお年玉

初詣で鈴振る時は無に還る

雀の声も軽やかに聞く三が日

夕焼けの空は祈りの色である

尼崎市 春城 武庫坊

三原色全てが消えた冬景色

割れるまで夢を見ているシャボン玉

図書館で生きた力を借りてくる

減らす気の脂肪へすぐに箸がゆく

サッカー アメフト 京都栄冠三ヶ日

尼崎市 春城 年代

初夢の心に残るなにもなし

三ヶ日済んで普段の宣伝カー

寒に入る猫背のことも気にかけず

賞罰なしの人生もよし八十路来て

ビール之苦さが好きだと女一人前

尼崎市 田辺 鹿太

老いてゆく幸せもある日向ぼこ

利口にも莫迦にもなれる認印

ジンクスが邪魔をするから迂回する

社長以下皆が気さくで社がこける

思ひ出はふられる度に作られる

ボサノバに染まるレトロの喫茶店

待ち呆けキリマンジャロがほろ苦い

老いたりを痛感グルメフルコース

いい歳の前兆らしい小雪舞う

ラッキーチャンスきつと来るはずチチンブイ

三田市 久保田 千代

新年へ夢の積木を積んでみる

まだまだと思う秘訣で若返り

一揺れが家族の絆みな千切り

八度目のその日見直す家具の位置

余震続く昨夜のことは謝ろう

三田市 北野 哲男

日の丸は役所とスタンド家にな

氷上のキリキリ舞いに沸く拍手

ポーナスの端数で当った宝くじ

息子には過ぎた嫁です一歩退く

初七日の前に届いた無料パス

宝塚市 嵯峨根 保子

陽だまりのぼんやりとても良い時間

身の丈をうかうか越してツケがくる

IT革命ほとけの国のするいくさ

フルムーン渋くかがやく手もあるさ

マンションへ虚空をつかむ雪が降る

西宮市 牧 渕 富喜子

近く姑の裾の乱れをただ正す  
支えてるつもりが支えられていた  
水仙のシャキッと立ってふた七日  
テレビ経由で海の幸里の幸  
はき慣れた靴で新年歩み出す

西宮市 長谷川 淳

居酒屋というスタンドで給油する  
シナリオにないフィナーレがやって来る  
癪にさわるほどよく当てる気象台  
もう五年生きねばならぬ日記帳  
来るバスを時計代りに村の人

西宮市 山 本 義 子

不義理したほうが体調良ろしかり  
目薬を愛用してる都市砂漠  
ポケットにアンパン持っている強み  
内緒だが湯音をたてて寛ぎぬ  
立ったまま飲む牛乳のうまさかな

西宮市 門 谷 たず子

頼られてたよって生きる冬の章  
いつまでの酒酌みかわす持ち時間  
この頃は鏡が素直に笑わない  
かるがものペアを浮べて川やさし  
やさしい妻でいたい今年の初詣で

奈良市 天 正 千 梢

夫婦とは愛しきものよ積木積む  
盗んでも罪にはならぬ芸をとり  
仲麻呂の涙か三笠の月くもり  
好きな物みれば胃袋ふたつあり  
年賀状今年は喪中多すぎた

生駒市 飛 永 ふりこ

二歳にて原体験が母の棺  
手作りの味と器が客を寄せ  
ババシャツに風邪が寄り道してこまる  
観覧車下界ざわめくおもちゃ箱  
はんなりと芯に強さを包んでる

橿原市 安 土 理 恵

裏切りの小指かくして神参り  
抜けぬシミ女ざかりを締めた帯  
金平糖嫉妬が角になったとさ  
酔いたくて鬼と深酒してしまふ  
烈火にはなさじと誓う火種あり

橿原市 居 谷 真理子

男には聖なるものに処女と母  
地吹雪の国の恋路は熱からう  
目の細い男と食べるうどんすき  
小男で負けず嫌いで創業者  
便利さが少し淋しい電子辞書

香芝市 大内朝子

春の陽へ優しい氣持涌いてくる  
ちぎり絵ははやたんぽぽやれんげ草  
オクタープ上がる返事の出る誘い  
酒飲むとおんな忘れる癖がある  
懲りもせず恥をかきつつ生きのびる

奈良県 渡辺富子

価値観のずれた息子と屋台酒  
十階でロボット犬と老母が住む  
ひとり旅秘仏開扉に出合う幸  
白黒をはっきりできぬ目の濁り  
裏切りへ一矢報いて夕映える

和歌山市 木本朱夏

燃えた日の記憶が重い忘れ傘  
一昔まえは私も星だった  
うどんだしの昆布の加減も寒の入り  
諦めることも悟った羊の目  
いつか空を飛べたらなんて羊の子

和歌山市 桜井千秀

初荷は六日柳誌出稿ほつという  
えべっさん一年振りのお賽銭  
賀状の札これで最終小正月  
二十日にはラップを外す鏡餅  
エネルギー放出散歩お付き合

和歌山市 福本英子

元旦に生きているかとおくる電話  
独りでも平等にくるお元日  
飾らない母が一番美しい  
千匹の羊邪魔して眠らせぬ  
ラージヒル大倉の空独り占め

和歌山市 田中みね

スタートは笑顔で決める初鏡  
変れば変わるものと妻の風呂上がり  
おだやかに話せませんか怒り肩  
リストラを思えば左遷など軽い  
少子化を食い止めたいが六十一

和歌山市 上地登美代

傾いたままで夫婦の四季回る  
犬かきしか出来ず世間に溺れそう  
冬の山越せば輝く陽に出会う  
寒椿まつ赤に咲いて散る決意  
ユーモアの海があるからみな元氣

和歌山市 青枝鉄治

神様がランク下げよと言った絵馬  
土下座する男へ票はもう入れぬ  
政治家の嘘へエンマも驚かず  
代読の祝辞へ耳が謀反する  
甘くみたカード墓まで追うてくる

和歌山市 吉村 さち子

新年の抱負去年を焼き直す  
おしゃれして氏神様へご挨拶  
重箱の蓋持ち上げる栗おこわ  
商魂がふところ狙う福袋  
振り向けば絵になる過去がよみがえる

和歌山市 古久保 和子

メガネメガネ日に二三度は呼んでいる  
自販機がペロリと返す札の皺  
連風の遠近法は宇宙まで  
裸木の月を絡めて取るつもり  
たった二駅ローカル線の旅気分

和歌山市 細川 稚代

三ヶ日やっぱり母は皿洗う  
わけあって心の鍵を閉じたまま  
束の間の日和へふとんたく音  
大切にされすぎました弱かった  
故里に待つて下さる人が居る

和歌山市 楠見 章子

お世辞だと知りつつ鬼もほころびる  
若松もわたしも天に背伸びして  
羽根のある春の帽子を探さねば  
ババシャツの厚さではかる戻り寒  
菜の花を活けて輝きだした部屋

和歌山市 福井 桂香

燃え上がる意地もみせますシクラメン  
核の傘畳めば見えてくる未来  
宇宙から見れば人類はピエロ  
人工衛星を見下ろしている二日月  
配達の手元も狂う春嵐

和歌山市 西山 幸

元旦へ肅々と立つ日章旗  
柏手を打つ私のおもて裏  
着ぶくれて先頭からは遠くなり  
しあわせも平凡という枠の中  
日に三度食べてまじめに生きている

和歌山市 榎原 公子

江戸時代から百姓の家系とか  
慶応の墓苔むして喜左衛門  
男子誕生今三代が元氣です  
長命がおぞましくなる冬日和  
人間でありたいぎりぎりの介護

和歌山市 堂上 泰女  
(泰子改め)

沈む日が月のようにです黄砂来る  
Eメール母子を結ぶ蜘蛛の糸  
咲こうとて咲ききれずいる冬の薔薇  
人生は塞翁が馬でも努力  
遠距離の恋携帯が弾ませる

海 南 市 谷 口 義 男

節約をするのが趣味のような妻  
活かすのも死ぬのも金の使い方  
酌み交す酒が弾んでゐる本音  
故郷捨てエリート夢を追って行く  
逃げ得を見逃している法の網

和 歌 山 県 中 後 清 史

欠点を埋めると褪せてゆく個性  
縁結び蓼食う虫も居てくれる  
入り組んだ人間模様へ神の贅  
日向はこしながら庭の草むしり  
一日を終えて仮面を脱ぐ夕餉

鳥 取 市 有 沢 せつ子

年賀状互いに疎遠詫びている  
お雑煮がまだ腹にある昼ごはん  
出無精を窓際にしてバスの旅  
聴診器老いの淋しさ聞いてあげ  
川柳塔読み終え活を入れられる

鳥 取 市 夏 目 一 粹

にんげんはおもしろいから辞められぬ  
人生はどこまで行けど白い紙  
北という方角いつも嫌われる  
老いるほど妻がライバルかも知れぬ  
実行をしてはいけないこともある

鳥 取 市 西 村 黙 光

時々規律を守る休肝日  
休肝日上手に逃げる素寒貧  
ストレスが弾けそうだよ休肝日  
コーヒーもタバコも美味だ休肝日  
休肝日は散歩だけだよネオン街

鳥 取 市 録 沢 風 花

帰省せぬ子等にメールでおめでとう  
吉とでたおみくじ賽銭また弾む  
残照の道へ模索がまだ続く  
わたくしの脳波も時にチェックする  
雪しんしん過去の微罪は帳消しに

鳥 取 市 徳 田 ひろこ

母ごろもすっぱり脱いで華になる  
潮風に晒して恋のきず洗う  
強がつてみてもボンコッだと憶う  
ストローの先を離れたシャボン玉  
せめぎ合う根っこが鉢をまた増やす

鳥 取 市 岸 本 孝 子

一同で何はともあれ屠蘇を酌む  
孫よりも親が待つてゐるお年玉  
いろいろと食べてやっぱり白いめし  
風邪ひくとみんなやさしくしてくれる  
迷ったら母の教えを思い出す

鳥取市 植田 一京

反省文並べ自分史出来あがり

転ばぬよう辞書をしっかりと見ておこう

あの世へは錯覚のままゆくつもり

明日咲く花でみんなに覗かれる

近道をしてはチャンスとすれ違い

鳥取市 倉益 一瑠

叩き上げの指は妥協を許さない

ボンコツの夫婦に喜劇まだ続く

ハングリーのカラスわたしによう似とる

わたくしをモンローにする春の風

初日の出 供に昇った粹な君(喬水さん逝去)

鳥取市 近藤 佳子

わたしには厳しすぎますからっ風

数えうた唄いつないでゆく絆

梅さくらあやめと夢を大切に

柏汁をすすると母の顔だぶる

再手術うけん心身ととのえて

鳥取市 美田 旋風

虫のいい話は神もそっぽ向く

寢床まで寄り添うすぎ焼きの匂い

相槌は打つが賛成していない

怪我に泣く力士国技も泣いている

井の中の蛙甘言には弱い

鳥取市 武田 帆雀

振り出しに戻り新年おめでとう

猪を追う牧羊犬という血筋

ベテランのセールス客に喋らせる

エプロンの背の紐タラリ妻老いる

初詣で巫女になってた隣の娘

倉吉市 松本 よしえ

ふる里の星ネオンより美しい

レシビには無い一つまみ母の味

村の味覚えた狸肥りすぎ

一番も二番もこけたついニヤリ

行く時は閻魔さんにも鼻ぐすり

倉吉市 最上 和枝

蛸舞う川で河鹿のソコを聞く

右の五指かすかな鬱を握っている

泡立った抹茶の底にある憂い

バラの花我が身のトゲに気がつかぬ

たんぼの風に託した明と暗

倉吉市 野口 節子

町内に星の数ほど医者がある

生きて行くための薬を数種類

三世代束ねて姑の撥さばき

冗談を発酵させる壺がある

不断着のままで好いよと言ってくれ

倉吉市 猪 川 由美子

価値観が違い自分を活かせない  
迫る老い認めたくなく逡巡す  
本性がだんだん見えて疎まれる  
弱点が見えて親近感を持ち  
砂糖気より塩から力を貰い受け

倉吉市 米 田 幸 子

こね回すうちに形になってきた  
あなどつていたらでつかい落し穴  
犬死にをするなど亡父に諫められ  
隅ずみに目を光らせる嫁いびり  
応援の一番目立つとこに母

米子市 白 根 ふ み

六度目の干支に何とか漕ぎつける  
パソコンの賀状何とか馴れてゆく  
ゴミを出すとても大事な予定日よ  
淡水化中止言い訳など聞かぬ  
清流の里に居付いて職がなし

米子市 政 岡 日 枝 子

郵便受けがつめたく留守の音を出す  
輪の中の情けに溺れたりはせぬ  
留守だから電話がひとり喋ってる  
目頭の涙に嘘はないだろう  
話題の中に亡母の匂いも入れておく

米子市 林 瑞 枝

七色のこころの虹へ澄んだ空  
夕焼けの果て喝采の影ふたつ  
神のお守り信ず銀貨の届く音  
足跡をたどる帽子をそつと置く  
ゆるりゆるり水都松江の船の旅

米子市 木 村 富美子

うれしくて目出度くて母泣き上戸  
負けて泣く勝つても涙青春譜  
長らえて涙袋がまた一つ  
迷わずにわたしを春の野に放す  
大切な絆を守る矢を放す

米子市 光 井 玲 子

少しずつ尺度をかえて老いふたり  
ちょこ一杯で百薬の長とする  
歳月や阿吽の呼吸乱れがち  
追憶の小箱の鍵をあけました  
呆けそうだ心の中に矢を放つ

米子市 野 坂 な み

陽に干した枕と夜毎話する  
身の締まる喝が欲しくて仁王門  
仏間兼居間で留守番こわくない  
叱られても矢つ張りママの膝にゆく  
文明が進む危険をたずさえて

米子市 澤田千春

鳥取県 黒田くに子

鼻先をかすめ車は風となる

母のひざメロンのような味がする  
不揃いのりんごです皆大事な子

浜は絵を自由自在に替えてゆく

分けへだてする気は無いが子だくさん  
ねぎらいの言葉を選んで母見舞う

ほどほどのときめきつれて待ちばうけ

誕生日ひとと一人のミニケーキ

人恋し駅のうどんは狐入り

(二月十七日生れ)

鳥取県 さえきやえ

踏まれてもタンポポいい芽出している

淡雪を天からもらう掌に頬に

鳥取県 西原艶子

シクラメン忘れ得ぬ人つれてくる

レシートの数字で磨く記憶力

合併で歴史ある名がまた消える

褒められた嬉しさファイトまた炎える

杖となり道を教えてくれる辞書

愛しさを写す貴重なカメラアイ

残り火で花の生涯見とどける

写真ではいつもいっしょにいるふたり

鳥取県 裕寛子

ハンドルさばきモミジマークが照れている

外は雪なのに桜のはなしする

鳥取県 田村きみ子

カーナビのいらぬ愛車に身を任せ

反論はしない羊で肥満体

ブレーキにコツがあるのよ我が愛車

まんじゅうが好きな男で飽きてきた

ヒヤツとすることもたまにはご愛嬌

ゆるやかなカーブで少し肩寄せる

広すぎて駐めた車が見つからぬ

ホコホコの女でいたい花の喜寿

鳥取県 羽津川公乃

幸せがここにもあった笑い癖

ふる里にこころ安らぐ池がある

鳥取県 鳥羽直市

七草の揃わぬ粥に雪しきり

コンビニが単身赴任呼び寄せる

よい目覚め鏡に媼顔を出す

左手を添えた握手にだまされる

マンションか戸建か迷うマイホーム

できもせぬ事うっかりと返事する

ロボットにカード番号まだ内緒

甘くみた風邪に今夜も攻められる

鳥取県 鳥羽 玲子

松江市 小川 注湖

好奇心これから若さふくらませ  
挨拶をしそこねたこと気にかかり  
甘言にのって不義理をしてしまふ  
みな食べてくれてうれしい妻の役  
お互いの短所埋め合う悲しい日

鳥取県 石谷 美恵子

随筆の訴えわれに鼓動する  
妻機嫌携帯の声弾んでる  
妻旅行自由のようで落着かぬ  
背番号覚える気などありません

松江市 佐野木 みえ

コネ効かぬ海で漁師は勝負する  
盛りあがるカラオケ小さく居る音痴  
かつこよく転ぶ練習ばかりする  
風よりも寒いと思う無関心  
冥土まで隠し通したのは女

鳥取県 原 みさを

松江市 安食 友子

盛者必衰 国も会社も人間も  
巻きもどせば日本もかつてそうだった  
荒縄で猪肉括って飲みに来る

柔肌を試してくれた静電気  
コンビでもやがてアデューがくる迷い  
しゃつきりと墓石を磨く愛しむよに  
ただ一途渡しただけの結び文

松江市 川本 畔

金色夜叉も神戸の揺れも一月十七日  
逢わねばならぬ人には逢えた棺覆う

鳥取県 土橋 はるお

坂の上とても大きなものに会う  
足向けぬように布団が敷いてある  
本当だろうか透かしてみらるラベル  
写楽の絵ネタにお酒を酌みかわす

出雲市 久谷 まこと

やわらかな言葉の中にある秘密  
わたしより頭の低いひとがいる  
足取りが弾んで来ます初詣  
出がらしの本を時々読んでみる  
老人も勉強会と言つて出る

しあわせを配る神さま仏さま  
しあわせをやはり貰えた仕舞い風呂  
振り向けば涙した事よく覚え  
息抜きをしたいが外野うるさくて

出雲市 岡

あきら

賞受けた日のカラオケはのつて来る  
当るもんかと言いつつ買った宝篋  
顔 かお かお 羊が連れて来た賀状  
快適に暮しまししょうと処方箋

出雲市 石倉 芙佐子

幽玄の命と思う紙人形  
紙人形夜の静寂をひっそりと  
おろんおろん風が哭いてる山の駅  
ナイーブで狐の毛皮巻いてます

出雲市 富田 蘭水

おみくじがこんなに売れるどうしてか  
回る寿司幸せそうに皿にのる  
見上げると不思議あわ雪寄ってくる  
肩書きを捨てると欲が生き生きと

島根県 榊原 秀子

除夜の鐘いつもと違う鐘の音  
雪かいて我が家の位置をたしかめる  
松の雪落して亡父の影を追う  
探し物そろそろ返事してほしい

島根県 伊藤 寿美

もう病夫に火縄の匂いせぬのなり  
急がねば月がどんどん痩せていく  
旅の絵に幸せだった日が残り  
取り敢えず掌に書いておく大事なこと

島根県 多々納 テル子

ノーベル賞日本列島笑顔沸く  
太陽の機嫌待ってる洗濯機  
大欠伸エンジンかけている紅茶  
まだ元氣馬と羊が口喧嘩

岡山県 富坂 志重

この家も婆さまが居る干大根  
薬さす眼より大きく口をあけ  
わずかでも握った幸せはなさない  
クリスマスうちのサンタは着払い

岡山県 福原 悦子

新年の平和を願う屠蘇の味  
壁にある歴史の重み古い寺  
この坂で喜怒哀楽の七十路  
笑顔にも妥協許さぬナースの掌

岡山県 山本 玉恵

抜けがらになつても守る女道  
風荒れる善意の傘の真上でも  
抱きしめてやりたい小さな束ね髪  
咲く花も散る花も見えて居る詩人

広島市 森田 文

新年の挨拶ランを抱いてくる  
時は移り事は終りて七草粥  
三重四重の人垣ランナー応援す  
小半日和紙を選ってる人形師

竹原市 古谷節夫

超大国テロの恐怖は忘れまい  
雪の音かすかに聞いている夜明け  
胃カメラに過去現在を暴かれる  
どん底で出合った風と連れになる

竹原市 石原淑子

名残り雪正座して読む歎異抄  
ろう梅の蓄育てて葉は散りぬ  
信じれば錯覚もまた夫婦愛  
雛寿司に乾杯孫の前祝

竹原市 正畑半覚

親の目を背中に子羊が跳ねる  
脱がされて羊寒くはないかなあ  
群羊の走りに見えてくる絆  
一匹二匹三匹四匹羊雲

竹原市 時広一路

冷凍で今日を済ませたうどん好き  
膝ちよつと我慢してくれ歩道橋  
見込まれた腕が支えているグラフ  
みなまるくならう地球も丸いから

宇部市 平田実男

悪女っぱいほうへ傾くヤジロペー  
人間が好きです女性もつと好き  
古希の坂五七五が杖になる  
爺ちゃんは打出の小槌かも知れぬ

美祿市 安平次弘道

嗅ぎ分けていても証拠になりません  
責任があるから嫌なことも言い  
結論を出すには少し手間がいり  
妥協する指がいつしかやせていた

熊本県 岩切康子

談笑の間に消えていた雪景色  
福寿草春の招きに従順に  
再度来る事もなからう地に植樹  
百回の動き湯槽で脚鍛え

唐津市 井上勝視

備わったお手振り見事愛子さま  
電話して絆揃えるのし袋  
袴を脱げばいい人ばかりです  
自分史に素直に書けぬ罪と罰

唐津市 宗水笑

年頭の所信去年の焼き直し  
寒がりが路地にとび出す雪景色  
淋しいんだ暴走族のたこ踊り  
大国の正義戦さをしたい顔

唐津市 樋口輝夫

上座とは知らず新米あぐら掻く  
常識を育ててほしいカリキュラム  
正論を吐いて苦しい二日酔  
大声で言うから正論だと思ふ

香川県 成重放任

喜寿迎えつぎは米寿と望みもち  
草の根を分けて掘んだ老いの春  
雑草のような躰が見当らぬ  
思いやる心福祉の花開く

松山市 宮尾みのり

手に余る猿へ観光地もピンチ  
物余りすぎて心が瘦せてくる  
折れる時機失して膝を抱えこむ  
まだ少し残る命をいとおしむ

松山市 丹下美津子

独楽鼠のように過ごした三ヶ日  
孫膝にオホホウフフと心風ぐ  
グループの中で若さを貰います  
テレビから里はすつぱり雪景色

松山市 高橋宏臣

凡人が諺集を積んでくる  
鮮やかな変り身迷うこともなく  
サイン無視相棒よそ見ばかりする  
拾われぬこと嘆いてる一円貨

高知県 赤川菊野

川柳があるから独り生きられる  
長生きの生命線は嘘っぱち  
増築はしたが息子は帰らない  
旅好きも黄泉の旅へはおことわり

高知県 小澤幸泉

熟慮して十年日記買い求め  
以下余白きようもここまで書いてきた  
きまぐれでよいとささやき風去りぬ  
貸衣装娘二十歳にまだ遠い

砂川市 大橋政良

末席で伸びてくる芽をチェックする  
根回しの背後でわらう奴がいる  
気休めの薬と言われ腹が立ち  
あきらめたはずの未練がうずきます

十和田市 阿部進

豊かさに馴れて質素に戻れない  
不景気の世相に勝てず老舗消え  
けちんばがそしらぬ振りでためている  
古希夫婦さしで飲むのも久し振り

弘前市 櫻庭順風

故郷で入隊の幸囃み締める  
送金の出来ぬ生活が気にかかる  
出征に不安と安堵絡みあい  
町内の歓呼の声に送られて

弘前市 岡本花匠

春の香を包む和菓子の客が来る  
相愛の歩幅律儀に助け合う  
凍ばれ雪息もしらじら春を待つ  
津軽風よび込む春へ満を持す

弘前市 須郷井蛙

言うことは言った負けてもホツとする

叱られてばかり一日老いの坂

ドクターに許しをもらう小旅行

肝臓にすまぬすまぬと吸い続け

弘前市 小寺花峯

しばれる夜街灯に舞う雪蜚

ちびりちびり時を刻んだ酒の量

閑古鳥乗って寿し皿回つて来

夢を見ている計算がちと狂い

さいたま市 八田敏

急な坂自転車もろ共転げ落ち

災難が待ち受けている日々と知る

健康法自転車事故でみんなワイ

墓仏壇あわてて手配事故のあと

富士宮市 渥美弧秀

歯科 眼科気になりながら過疎暮し

ジャスミンの湯舟に歯痛少し失せ

玄関の壁も一役展示場

明るい顔に惹かれて拝む石地藏

亀岡市 井上森生

お金よりも深い心を貯える

メールには近況詠んだ句で返事

眉間から精気よ入れ鼻呼吸

奥方はときに狐を住まわせる

大阪市 津守なぎさ

軽い腰一人暮らしへ水ぬるむ

路の臺忘れられずに吉野山

子の遊びリモコン操作路地がある

梅の花咲いてポツポツクラス会

大阪市 安達はじめ

子の日記野球した日は字がおどろ

大安にもらった妻も古稀をすぎ

冗談が過ぎて本音がはけてくる

テロ受けてアメリカ景気霧の中

大阪市 浦田綏子

原点に戻ると言って昼寝する

雛飾りテディベアもリカちゃんも

ガイドブックちよつと外してみたくなり

予報とは外れるものを雪うさぎ

大阪市 中村叡子

安堵する参賀風景旗の波

気に入りのカレンダー先はリビンクに

紅白を中島みゆき盛上げる

宗教が今度は人をクロインする

大阪市 清水絹子

争いの火種くすぶる星条旗

除夜の鐘無事な夫婦の酔いごちち

円満を絵にしたお顔愛子さま

円満な家の子と知るご挨拶

大阪市 鈴木 トヨ子

息子から年玉届くお正月

寒風やさぬきうどんのうまいこと

介護保健かけ捨てつづく健康よ

宝くじ束の間の夢三〇〇円

大阪市 本間 満津子

南天の箸つやつやともう米寿

会話なし大人ばかり静かすぎ

日本がええお雑煮が好き米が好き

大切なこと父の背中に書いてある

大阪市 小泉 ひさ乃

嫁ぐ娘へ初春の祈りが深くなる

夫婦の輪カラスも時に白くなる

少しづつ軽くしてゆく私の荷

ノーベル賞祝うカメラが追いまわす

大阪市 熊代 菜月

年寄りの冷水だった世話をやき

朝日さす小さな庭の梅もどき

笑顔からきれいな花が咲きました

年金で間に合うほどの義理はたす

大阪市 小糸 昭子

帰という字一字で一年まとめられ

外に出てしゃべる楽しみ車椅子

カミオカンデ説明されても分らない

野良猫の一番欲しい愛少し

大阪市 寺井 東雲

紀州名物なれずしでおもてなし

父の背な好きな品物指で差す

苦しみを乗り越えチャンス待っている

美人でも花との比較止めてほし

大阪市 松尾 柳右子

居眠りも上手になった六十路坂

性格が正反対の兄弟だ

孫の問い返事に迷いみかん剥く

迷いなく五十年たつ同じ職

大阪市 川原 章久

おでん煮る練炭が今売ってない

逃げられぬ顔につかまる縄のれん

やあやあと握手したけど名を忘れ

金の要る話補聴器よく故障

大阪市 津守 柳伸

梅便り待てず手入れをする和服

南禅寺甘酒茶屋もおつなもの

シクラメン心豊かにする薔

出来ちゃった婚がブームで大手振る

大阪市 星野 きらり

朝まだきしじまの中のお正月

満ち足りて落葉ゆつくり地にかえり

カムバック楽し大きな古時計

デパ地下で試食したのが膳の上

大阪市 川端 一步

大阪市 榎本 日の出

辛口のペンもほろ酔うお正月  
元旦やフTONの角でけつまずき  
初春や自殺の記事が片隅に  
小さい善かさね大きい徳ひろう

大阪市 杉澤 汀

病む妻をふんわり包め春霞  
金婚に向ける足並揃わない  
食器洗う七十七の初年兵  
生きざまも死にざまもみた喜寿の暮

大阪市 西川 更紗

松の内過ぎればすぐに超音波  
年金と相談してのお年玉  
笑顔好し真似てみたいとハヒフヘホ  
食べすぎた餅のお蔭で二段腹

大阪市 大川 桃花

見上げるが詰めようとせぬシートの娘  
食べさせる親が大きな口を開け  
写メールの背景になりVサイン  
冬子と言う名前で冬が嫌と言う

大阪市 奥村 五月

不景気も音は変らぬ除夜の鐘  
母連れて暮れの忙しい墓まいり  
スーパ一の煮しめで独り除夜の鐘  
点滴を眺め病舎のお正月

最高のみやげと思う笑い声  
お喋りでたつぷり学ぶ友が居り  
ピンク着て喜んでゐる旅仕度  
大金に無視されてるが平気です

池田市 岡本 吉太郎

新築の扉開ければ重重し  
北の核の武装に庶民驚かず  
地震来て思い出すなあ八年前  
スタート台上れば孫が指図する

池田市 栗田 久子

風そより春の序曲を奏で出す  
ゆるやかに時が流れるぜいたくさ  
川音を聞いて目覚めるネコヤナギ  
地に落ちて二度の命か紅椿

和泉市 西岡 洛酔

真つ直ぐに歩くに悪魔袖を引き  
写経する心に明日が透けて見え  
雑草のある日大輪夢に見る  
一筆箋思案投げ首今日を過ぎ

和泉市 中川 楓

二から四に八へと増えた箸袋  
流れゆく時は楽しみ子や孫と  
嘘のない我が影のふとあるがまま  
紅梅の歳を重ねた花の艶

大阪狭山市 矢野 梓

人の背を拝んで帰る初詣で  
半世紀タイムスリップ賀状読む  
三が日過ぎて茶漬けが欲しくなり  
川柳をカンフル剤にして生きる

交野市 山川 日出子

初恋の写真金庫の奥にある  
羊毛の服入ってた福袋

女子高生汽車で折鶴ガムの紙  
七十歳クイズ作って孫を待つ

河内長野市 植村 喜代

何もしないと言っても十二月

正月は嬉し子供はお年玉

愛子様の仕草で暮れる雅子様  
そして春みんなに会いたくなってくる

岸和田市 井伊 東吉

待ちわびる年賀配達バイク音

愛犬も家族と共に初詣で

洋風のお節喜ぶ核家族

閉塞の世にハリーポッター夢誘う

岸和田市 岩佐 ダン吉

地球儀の裏まで仕切る星条旗  
報復と自爆が絶え間ない地球  
強いもん勝ちの列島冬になる  
飽食の島三万の自死がある

岸和田市 木村 正剛

晩酌がよく回りそう発泡酒(増税 4包)

本心は吞んで吸ってよ酒煙草

止められぬほどの値上げが憎らしい

御上には小槌ほくには必需品

岸和田市 原 苑子

ウォーキング強い老後にするつもり

羊羹の厚さで計る愛情度

難波発座席を占める551

婆ちゃんの笑顔うれしいお手伝い

岸和田市 藪野 けい子

リストラを上司の給料下げて阻止

作業服光もたらすノーベル賞

きついなあ父に似てると言うお世辞

手伝いに口のうるさい人が来る

堺市 西村 りつえ

百歳まで恋追いかけて行く元氣

ぶきつちよに大吉くれた初詣

三面鏡時々奥で母の声

ネーミング日本語消えて派手なログ

堺市 源田 八千代

テロいくさ不穏なままに年明ける

鏡餅目鼻つければ愛子さま

大草原駆けた力士の活きの良さ

出稽古で苦手力士の技ぬすむ

堺市 齋藤 さくら

初詣わすれて舞妓追いかける  
別世界ありそなお茶屋河原町  
ストレスを癒すロボット欲しくなる  
見慣れたら電車の化粧おもしろい

堺市 神原 文

数の子の時節が来たぞファイト湧き  
世代交替年始の客はジーンズで  
束縛をし合い安心する夫婦  
好感を持つてくれたか髭いじる

吹田市 太田 昭

群羊につかず離れず老い二人  
不発弾抱えた男石を蹴る  
言うまいと塞いだ手から洩れる愚痴  
消しゴムで消せない嘘を繰り返す

吹田市 大谷 篤子

苦労性天気予報も信じない  
花生けて紅茶の好きな友を待つ  
磨きすぎ人生なんて味気ない  
メダカ達絵本の中で泳いでる

吹田市 早川 棲世

自由フランスでパン屋の子はパン屋  
国境があつて増殖する遺恨  
移民しようかひと月三千円で食え  
人類がせめぐ地球の皺の上

吹田市 瀬戸 まさよ

今年芽が出ますようにとくわい食べ  
れんこんの糸ひくようにわが未練  
転ぶなよ餅つめるなよ子の電話  
回り寿司魚の名前知らぬまま

吹田市 岩屋 美明

ときどきは僕を日向で裏返す  
温室の花は知らない鳥の歌  
縄電車母だけ降りた花の寺  
子離れも終わり夫婦の自由席

大東市 児玉 蛙

さりげなく咲いたバラにも自己主張  
やすらぎが欲しく時々故郷へ  
蹟いて知った友情神の慈悲  
言い過ぎて後で悟った負けいくさ

大東市 南原 正和

今日もまたさつと気が合い縄のれん  
この墓に入れる入れぬで仏泣く  
携帯を持つ便利さが煩わしい  
ひとり酒屋台のれんで年を越し

高槻市 江原 秀夫

湯豆腐が踊る政治の奥座敷  
思惑を胸にかごめの輪で踊る  
寒がり暑がり枕並べて半世紀  
我が家ではやんちゃなテロが人気者

高槻市 生田 義一

しみじみと来し方偲ぶ晦日の夜

賀状来た友の癖字が踊ってる

ばあちゃんのモデルになつて孫ポーズ

皆んな留守止められた酒盗み飲み

高槻市 乙倉 武史

新天地ゴジラ松井は正念場

成人式脱皮してない子も混り

遠回りした人生の嘆き節

それとなくその気にさせる褒め上手

豊中市 樫谷 郁子

会話から期待裏切る声をする

ピカピカの期待が走るランドセル

京料理行儀がよくて雅びやか

震度七夢かうつつか醒めやらす

豊中市 吉田 あずき

春迎え新しい鈴振ってみる

一人居の肩に自由も重いもの

人よりも熱い心の盲導犬

今年こそ春を素通りさせはせぬ

豊中市 岸田 知香子

幅きかしにらみきかして店の顔

親無くも戦くぐった己ほめ

はけ防止編棒膝に日向ぼこ

誕生日初春の文楽娘にひかれ

豊中市 江見 見清

飲むうちに表の顔が消えてくる

抽象画の解説さえもわからない

妻の留守囃む音だけでする食事

戦地へのナビで出かけた自衛艦

寝屋川市 富山 ルイ子

裁量の苦勞がいやで子にゆだね

くつろいでやつと輪に入り喋れそう

喋る口一対一になれば持つ

饒舌が過ぎて墓穴を掘つた悔い

寝屋川市 太田 とし子

満ち足りて不幸になった舌の先

寄せ植の花も私も雑居ビル

雑煮もち喉をこしたら梅が咲き

青春切符時間遅れて笑う旅

寝屋川市 坂上 高栄

祝箸一膳増えた居候

七度の年輪角も丸くなる

永住と決め左遷地の住心地

大切な地球平和の灯を点す

寝屋川市 酒井 勇太朗

父資金母は労力娘の転居

悪の枢軸窮鼠が猫を囃む例え

二日目で男の料理ギブアップ

年頭に誓い暮には自己嫌悪

羽曳野市 安芸田 泰子

あの人を誘うときつと雨になる  
調子いい話だきつと裏がある  
あれこれと思ひ過して狭く生き  
三が日過ぎて錠剤数えてる

東大阪市 安永 春

日本中鐘が鳴ります百八つ  
三が日終りゆつくり初詣  
商売繁昌笹はあの娘に決めて買う  
過ぎて行く日ごとの速度思ひ知る

東大阪市 指宿 千枝子

ばあちゃんに母になりきる三が日  
新年を重ねて古希も若返り  
妻の役解かれてからのボヘミアン  
柚子石榴たわわに実り空家らし

枚方市 安達 忠央

役所での威厳も家でつうじない  
孫に歯がはえて我が家の大ニュース  
夕焼けに映えてみんなが仏顔  
しみじみと入れ歯に旨いかぶら蒸し

枚方市 森本 節子

寿命のびまためぐりきた未どし(八十四歳迎え)  
孫のいれたコーヒ片手に牌をうつ  
高齢の羊が家を守ってる  
コンピニのおでんですます今日の昼

枚方市 鈴木 政子

口内炎好きなお餅も食べられず  
病院の梯子病名五つ持ってます  
脚だけ達者一日五キロ歩いてる  
一方的に化粧品薦める受話器の声

枚方市 二宮 山久

パソコン学習出かける妻の手弁当  
年金の暮らしへ慣らす酒の量  
飲むほどにグラスが進む同級会  
ポロシャツでハローワークへ出勤す

枚方市 宮川 珠笑

写真屋にからだの歪み直される  
安売りをされる卵と知らず生む  
土知らぬ野菜素足を知らぬ子ら  
噛みもせず美味い顔するレポーター

枚方市 寺川 弘一

昼寝をしても夜になったら眠くなる  
交番はちよつと覗いて通る場所  
老後のお金とても足りぬがもう遅い  
周りの人も皆死んでる百年後

藤井寺市 楠 昭子

雪深い山ふところに眠る夢  
山男はだめとあれほど言つたのに  
雪の下春が動いてふきのとう  
少し視点変えると肩が軽くなり

藤井寺市 中島志洋

お彼岸の出入に亀も寝てられず

春うらら河馬思い切り大欠伸

お賽銭少なかったか不合格

乙姫を探し続けて未だ独り

守口市 井上桂作

秘書までもスキヤンダルには事欠かず

公団は談合こりず己まで

若人の茶髪もいつか気にならず

ふくれ面孫にだけはと愛想よく

八尾市 長谷川春蘭

九十過ぎ杖に頼らぬ恵方道

計を聞きし友の賀状のとどきけり

障子張り影あらたまる今宵かな

帰省子に家族の合わすスケジュール

八尾市 内海幸生

亡妻連れて思い出辿るひとり旅

輪の外で物知り静かに日向ぼこ

左遷する友へ領き目で送る

裸婦像をじっと見ている美術館

神戸市 木村貴代子

門松は消えしめ縄も少数派

屠蘇祝い私ビールがいいと言う

年毎にフアイトの湧かぬバーゲン場

暦から命の日々が消えてゆく

神戸市 池田善守

三が日あけて怖ごわ体重計

金婚式忘れることと許すこと

自分流幸せみつけ一人旅

ご馳走をよりうまくする空きっ腹

相生市 中塚礎石

お向いの屋根を見つめて思索する

補聴器が聞きもらしたか神の声

絵手紙の満開の花こぼれ落ち

噛みしめる奥歯がなくてなお悔し

尼崎市 軸丸勝巳

寝正月ひとり働く冷蔵庫

初売りが早く正月落ちつけぬ

カレンダー句会と書けばフリーパス

下駄箱の名誉一足下駄を置く

尼崎市 山田耕治

マイホーム邸と呼ばれるはずかしさ

生きていく患しさを楽しまん

同窓会同じ歳なる面白さ

無筆なる祖母参観に来てくれる

伊丹市 山崎君子

花ごよみ花花花の温い部屋

ひつじ年青い鳥にも逢えそうだ

次々と平和をこわす国哀し

花言葉知ってた彼の年賀状

川西市 西内 朋月

西宮市 菊池 トミエ

ほろ酔いに万年床が待っている

抵抗が弱い酒税と煙草税

十年は着る気で買ったバーバリ

捨てられた子猫にやさしビール樽

川西市 米原 雪子

快晴に押され散歩の靴弾む

曾孫にも勝てないものが増えてゆく

受験期を終えた世代の穏やかさ

不況の世皆真剣に生きている

西宮市 西口 いわゑ

うっかりの自分を笑う日の多し

しあわせをつかむ夫の手も借りて

澄みきった天にわたしを放り投げ

地球上ドミノ倒しの音がする

西宮市 坪井 孝一

打楽器が弾んでそうだ春なんだ

初恋をパットブーンが連れて来た

社交ダンスまた来ましたかカルチャーへ

おとうさん最近ベダル踏んでない

西宮市 秋元 てる

いい笑顔向けられたので言いそびれ

独り善がりの賢母鳥がわらってる

菊を干す或る日の母がしたように

待っているだけの余生に飽きが来た

寂聴の笑顔で説教ほろり聴く

実南天小鳥の分も置いてある

無宗教結婚式を教会で

渡り鳥日本の川がお気に入り

西宮市 井上 松煙

歯の治療延ばし延ばして年暮れる

初詣で寒いと止める信仰心

七草を祝う二人に春の雪

腹までも白いと思う歯の白さ

西宮市 刈田 泰司

雲行きをじっと見ている悔いている

八月の雲は哀しい過去を持つ

猫のひげ二人の仲を嗅ぎつける

猫舌の妻にたこ焼き吹く夫

西宮市 緒方 美津子

孫の守り逃げ口上の見つからず

拭かせないテレビにつけた児の手形

いい音で豆食む夫にくたらし

無駄話いつさい出来ぬ今日の葬

西宮市 亀岡 哲子

四柱推命 暦の中へ迷い込む

同じ日に生れた友と繰る暦

純白とは言わぬが白く生きてきた

身体に良いあれやこれやが食べ切れぬ

姫路市 古川 奮 水

額裏の埃一年愚痴言わず

たこ焼もたい焼も買い初詣で

銭湯で同期に出合い缶ビール

アドリブで予定をこなす名演技

兵庫県 大谷 幸次郎

屠蘇うれし夢がつぎつぎ湧いてくる

赤い実の好きな小鳥が雪散らす

母の背で大人の世界垣間見る

達筆の賀状が胸を張って来る

奈良市 米田 恭 昌

初夢は星野猛虎に紙吹雪

口きかず指を丸めた子の無心

昼間見た杉さま老母を寝させない

乗りにのるカラオケ入れ歯ずれてくる

大和郡山市 坊 農 柳 弘

民話聞く白川郷のなごり雪

じつくりと愛を煮込んでゐる土鍋

二次会で本音がぼろり猪口を伏せ

鯖街道若狭の水を大和まで

和歌山市 武 本 碧

壁の耳美味しい話しかと聞く

居心地が良くて出られぬ母の傘

保護色でいい夢見てるカメレオン

晩学の末広がりを信じよう

和歌山市 宮 本 三喜夫

ボツボツと消費税率上げ基調

政治家は国民の事そつちのけ

生き残り時勢に勝てず合併す

旅にきて土産物でもひと苦労

和歌山市 玉 置 当 代

神仏に先ずは平和を願う初春

初日の出拝む今年もまたふたり

愛子さまの笑顔に鬱も救われる

世の中が進む私はのんびり屋

和歌山市 松 尾 和 香

お年玉に年金飛んだ三が日

夢を追ひ羊翔んでる六十路坂

純真に生きた人生一人旅

新月に祈る君へのラブコール

和歌山市 松 原 寿 子

来るべき時きたのか毬が掌を離れ

さわやかな貌で想いを寄せて見る

突風に心のあかり攫われる

裏技のおかげボンコツ生き還る

海南市 三 宅 保 州

公衆電話もリストラされているらしい

タレントの名前覚えたコマーシャル

名医かもしれない薬をくれぬ医者

入院の妻からゴミの日の注意

鳥取市 宮 脇 道 子

水空氣清浄しても世は乱れ

神仏祈つて戦絶えぬ謎

お正月淋しさだけの置土産

努力やめ素敵に生きる時が来た

鳥取市 山 宮 愛 恵

因幡伯耆のお山も友もやわらかい

落葉踏むたびにぬくもり這い上がる

山小屋のノートへ刻と名を記す

馴染の名見つけてホッとするノート

鳥取市 加 藤 茶 人

下ネタに親はハラハラ子はハハハ

太鼓腹酔うと意外な泣き上戸

どう死ぬか男やもめのひとり言

方便の嘘もまじえて妻値切る

鳥取市 春 木 圭 一 郎

あるものを活かし幸運呼び寄せる

ひとはひと自分らしさに幸が来る

幸運を信じ過去にはこだわらぬ

悪いことあればいいことあるさざし

鳥取市 杉 本 孝 男

箸置けば食べてない皿下げにくる

万華鏡覗けば青春は真つ盛り

独り身の窓におむつが干してある

リストラの呻き行き交う路地の角

鳥取市 富 山 檳榔樹

ちっぽけな善が後押す車椅子

人間の流転見て来たわだちです

筆不精宅急便で顔つなぐ

春が来て大地が萌える鼓動する

鳥取市 中 村 金 祥

この歳になれば訃報が気にかかる

他人事のように告知を聞いている

平均の寿命過ぎれば後は楽

這い上がる力はしかと溜めている

鳥取市 山 本 益 子

空打ちの宝くじにも懲りず買う

地球から見れば人間ややこしい

野仏へ仲良く分ける土産物

ふるさとの味方の風に自負してる

鳥取市 福 田 登 美

介護バス見送る吾にくるやがて

喜寿迎え余生の紅を引き直す

ふきのとう雪の中から春告げる

書道展読めぬ運筆目でなぞる

鳥取市 田 村 邦 昭

新札で今年の吉を呼んでみる

若き日のネオンの悔いが消されない

ふる里にふる里ことは温かい

年金の薄い財布に妻の知恵

倉吉市 山中康子

食べさせて着せて羊の本能か  
一服の抹茶で晴れた気の迷い  
合併に町がさみしく燃えている  
冬小屋の暖炉なものにも勝る

倉吉市 牧野芳光

万感の思いに古里は青き  
尾髄骨に頑張っている進化論  
ブライドを捨てたら虹を掴めそう  
黄色い傘振り振り帰る冬休み

倉吉市 山本玲子

福耳を屠蘇に酔わせておめでとう  
裏日本シケの海には波の花  
人がいだけのわたしはどの部類  
無記名の百円玉が椅子の下

米子市 本吉宗光

一億人の幸せ首相考えず  
手をつけぬ正月用買った酒  
温暖化百年先の地球学  
生きてれば金婚式だ妻偲ぶ

米子市 木村春枝

孫の演技つい涙腺をうるませる  
見てくれは悪いが甘いリングです  
雑魚群れて命を守る知恵を持つ  
まな板に噛みつきそうな魚の眼

米子市 永井三津子

苦勞ばかりさせた子供が幸をくれ  
時どきは病気の振りし子に甘え  
運命なら朽ちた橋でも渡らねば  
使い捨てライターのように捨てられる

米子市 中井ゆき

涙腺が勝手気儘に動きだす  
留守番を犬がサポートしてくれる  
雪しんしんみんな逢いたい顔ばかり  
降るでなく降らぬでもない雪落ちる

米子市 青戸田鶴

富士山が少しいびつなカレンダー  
冬水仙気づかれないで群れている  
二人いてうつつとうしいと思う日々  
旅の本くれば心が落着いた

米子市 神庭詩郎

願い事かなわず絵馬が風化する  
リストラの少し手前に居る出向  
方言がまだ生きている過疎に住む  
糖尿のカロリー指導受けに行き

鳥取県 岩崎みさ江

後戻り利かぬ命とあみだくじ  
身の丈に合わせて生きて恙なし  
あたたかい森に毛虫も鳥も棲む  
輝こうとは思わない泥仏

旅帰り神戸眺めたルミナリエ

鳥取県 土橋睦子

日本海の発電風車全開す

冬薔薇垣根をわけて咲いてくれ

前向きに生きる脱皮を考える

鳥取県 奥谷彩子

母の手を笑い転げた青リンゴ

病んで病んで生命静かになお燃やす

辛口ジョーク柔な心に止め刺す

口惜しさを生きる力にしたたかに

鳥取県 国森武子

二度とない人生なのに拉致なんて

拉致された人と思えば胸いたむ

世界中何故おだやかに暮らせない

二十四年拉致すら知らず暮らしてた

鳥取県 近藤春恵

トラブルが起きたか今宵月が出ぬ

不器用な手だパソコンになじめない

ボンコツになつても嫁に頼られる

ボンコツになつても女捨てません

鳥取県 前田一枝

靴脱げばすなおに砂丘もえて居る

麦ふみの思い出残す足の裏

暗やみで思わぬ人の手にすがる

末席にそっと参加し義理はたす

芹の粥老いのくらしの事始め

鳥取県 林露杖

病棟の窓辺に映えるシクラメン

惚けるならお先に惚けた方の勝ち

生き恥も耐えて生きねばならぬ老い

鳥取県 太田幸枝

物売りが季節運んだその昔

あくせくと生きて日本遊び下手

つかまえた運がつると抜け落ちる

紅白のテレビを切って初詣

鳥取県 西川和子

刈り込んで床に飾れる株にする

それぞれの味で二人の余生かな

これだけは妥協出来ない味加減

堂々とするしを背に群に入る

鳥取県 谷口次男

北のつく怖い国からくる噂

探偵も国も調査はええ加減

降る雪やあの三億はどうなった

メモ帳か落書帳かミミズ這う

鳥取県 西冲彰雄

元氣かい生きて居るかと来る賀状

携帯を持たされていよく監視され

買う気なぞないがチラシは念入りに

腹の中誰にもあるよ黒いとこ

鳥取県 石 尾 かつ乃

ご破算にして初春の第一歩  
成人式 大人の顔になる背広  
何となく心浮き浮きする弥生  
絶景に見とれてバスに乗りおくれ

鳥取県 村 上 信 子

挿木した芽が膨らんだ生きている  
病む老母を庭に連れだすいい日和  
地が動く怖い記憶は消えずいる  
福耳に儲けばなしはよく聞こえ

鳥取県 吉 田 孔美子

画仙紙に逸る命毛しつかりと  
果物で命を継ぎ管を抜く  
ステージに産地光らす果実たち  
果物の根だ石一つ置かせない

鳥取県 平 井 栄 翁

うす髪を隠す余生のベレー帽  
恥かいて覚えた事は忘れない  
先見えぬ世相腹立つ寝正月  
弁解をすれば疑惑が深くなる

鳥取県 乾 喜与志

老いるほど山の気高さ見えてきた  
良い話聞かされ蓮の花が咲き  
わたくしに用事ないのは宝くじ  
朝夕に花生け替える花つくる

鳥取県 山 本 正 光

五線譜にない歌で座を盛り上げる  
隣国は不気味なことも平気らし  
良い方に解釈しよう休肝日  
散らかして気ままに飲んで隠居部屋

鳥取県 上 田 俊 路

元旦に賀状と訃報くれた友  
老いの荷はまだしなやかに背負いたい  
着ぶくれのテレビ体操でもやろう  
鎧脱げば身が軽すぎて落着かぬ

鳥取県 下 田 茂登子

切れかけた縄一本にまだ未練  
年明けて先の読めない嫁の腹  
自己暗示かけてはならぬウツでない  
ボンコツになっても母は子を守る

## 第34回川上三太郎賞作品募集

雑 詠 五句（未発表作品） 大野風柳審査

○集句は記名選 ○五句一組の総合力で賞を決定

○秀句をまとめ特選3句・秀逸7句・佳作50句

表彰は6月29日（日）柳都川柳大会席上

川上三太郎賞1名・準賞3名・奨励賞5名

投句締切4月30日着 千円（小為替）発表誌五百円加算

〒956-8691 新津局私書箱15号 柳都川柳社 宛

# 自選集

妻 病 む

よろよろと日々妻恋の弱法師  
妻病むに昼のふぐ食う男なり  
天井の海老とか細き男かな  
病人と介護の入歯 密談す  
父ありき生々世々に母ありき

橘 高 薫 風

工 藤 吟 笑

黒 川 紫 香

義理固い人の賀状は隙がない  
星空を見上げ別れの言葉する  
故郷はいいな戯れる蝶が翔ぶ  
まだ生きていますと返事しておこう  
マンガ読む二階へ昼を告げに来る

原点に戻り極める2003  
赤いネクタイ聞けば孫からプレゼント  
神様のいたずら過ぎる花粉症  
IT革命やすりで削る錆びた脳  
死を知らぬ畑の葱へ雪が舞う(権代康女さん急死)

小 西 雄 々

小 林 由 多 香

斉 藤 昶

くじ引で決めたいような縁ふたつ  
なりたくてなった会長頼りない  
すぐ読めるように頁を折っておく  
今年来ぬ賀状がちよつと気にかかる  
感動のなみだ隣も拭いている  
力にはなれぬが共にする涙  
働いて働きぬいて来た道だ  
この土が深めてくれる生きる道  
もう過去に戻れはしないシャボン玉  
踏まれても踏まれても雪降り積もる

田口虹汀

松露万十 唐津の貌で前に出る

小さくて程良い味で賞味され

松浦漬も唐津の味を提げている

卒寿過ぎると唐津土産のようなもん

主幹に抜かれてやつと一人前になる

竹内紫鏑

戦史展静かランチの高階も

ハニホヘトイロが歌える老いの喉

オッスオッスと会釈も略し男子寮

履き物が逃がした江戸の静電気

停めかたで免許を拒むシミュレーター

田中正坊

砂時計 私の余命ふと思う

当然のように蛇口から水が出る

はらからの命もらって生きている

冬木立 子に遺すもの何もなし

五寸釘 女を騙したら怖い

玉置重人

うっかりと亡った人のよいお口

たまさかの外食でするリフレッシュ

結論を急ぐ魂胆読んでいる

まだまだともうが錯綜する八十路

ふりむけば時間がまるくしてくれる

恒松町紅

愚痴話笑って受けるゆで玉子

酒の縁もらい八十路の坂登る

幸せは笑いが交じる夫婦箸

一代が輝いている棟瓦

多かつたなどと手酌のひとり言

遠山可住

流行が丘の街から降りて来る

リハビリへ甘え許さぬ目が光り

ざまあみろ俺に心の友がある

うぬぼれてなさるマイクに馴れてはる

お出かけへ財布ハンカチ眼鏡よし

土橋螢

出迎えの上手な雪が舞っている

大いなる春へと続く白い道

お浄土へ行くと気楽な旅に出る

心臓が起きろ起きよと急きたてる

端溪の硯を洗い筆始め

西田柳宏子

すらすらと言える抱負は嘘っぽい

犯人を追う人ごみが邪魔になり

挑むだけ挑み失敗気にもせず

思う壺自然にこぼれてくる笑顔

変人で通り無類のお人好し

西村 早苗

藤井 明朗

湯の加減ちょうど良かった高いお茶  
空想の徐々にひろがる昼の雨  
禁酒して徳利に似合う花を入れ  
止まり木で肩の先から溶けるウツ  
尻尾だけ残し鯛焼き犬にやる

仁部 四郎

藤村 女

三四郎と迷い羊を追って行く  
一頭をおろそかにせぬ羊飼いの  
群羊の謀反を予測しておこう  
公正を旨としている牧羊犬  
牧神の午睡をだれが保障する

野村 太茂津

舟木 与根一

怒るなと言うが拉致には血が滾る  
焦るなと言うが米寿の春が来る  
負けるなと言うが加齢には勝てぬ  
腐るなと言うが体調気も減入る  
どの花も切れぬカチカチ花鋏

波多野 五楽庵

芳地 狸村

電話から吹雪の音が洩れてくる  
母の夢遊びせんとや泣き明かす  
豆腐屋の匂いがまじる雪の小路  
冬の絵にもどるしかないかたつむり  
抱いて下さい地獄へなりと参ります

金運より長寿頂くしあわせと思う  
二〇〇三年複雑な世界外交つづく  
未年少し景気の芽がひらく  
今年また珍客を花の春  
曾孫と同居きつとやってくる夢  
よく喋るオーム隣に越して来る  
電話口微かに入れ知恵もれて来る  
悟るには全く空が広過ぎる  
笹舟に私が乗ってる川之歌  
どの塔も歴史の匂いしてる寺  
顔芸が下手でお見舞切り上げる  
子供にはほんにやさしい福は内  
素うどんのようで親子うまが合い  
老人も一役買って孫を連れ  
老人を連れて遊んでいる五歳  
天壇の瑠璃色瓦にある誇り（天壇公園）  
天壇の歴史を刻む祈年殿  
祈年殿バックにカメラ忙しい  
長廊に将棋たのしむお年より  
お願いが通ずる祈りの天心石

最高の酒の封切るお元日

三ヶ日幸幸の酒の瓶

三ヶ日五体が酒につかり込む

百薬の長と百歳めざしてる

まだ酒がうまい今年も頑張るぞ

叛かれた失意をほどく悲しさよ

春の彩孤独の中で芽を伸ばし

観覧車乗ればはんなり稚氣が湧く

汗を出す仕事人生しみじみと

老いの身も忘れて碧空翔けたがり

ともかくも家紋の椀でお正月

どの椀の底にも咲いている椿

女紋は椿 表は九枚笹

塗り椀の重さは大屋根の重み

羊さんを味方に雪の屋根の下

非凡に見せる自画像へ演技する

湯上がりの素肌女を取り戻す

寒鴉いやに不況の声で鳴く

体温を保てるほどの本を積む

峰打ちのあとの台詞はあたたかい

宮口笛生

森下愛論

八木千代

八十田洞庵

まだ生きるいのち洗濯しておこう

エンストをしそうなハート持て余す

手相など気にせぬ妻でありがたい

余生まだ生きるシナリオ書き直す

太陽へ罪を犯した手をかざす

強気な妻に僕後押しをされてます

あんたの嘘わかってますわと妻笑う

有頂天何かを忘れて来た感じ

思い違いと気付く夜道の月の冴え

お元氣ですねぇと言われて無理もする

松取れて三日坊主が顔を出し

我が町の銀座淋しい空店舗

お年玉ありがと孫が酌いでくれ

犬かきで渡る世間の助け合い

どの部屋にも時計があつて皆違い

恋人よ枯山水に水をやり

啓蟄の虫と語らん梅一輪

梅活けて男の部屋にある余寒

三月の風と楽しく恋をして

金婚へ走り続ける夫婦坂

両川洋々

阿萬萬的

石川侃流洞

板尾岳人

榎 本 吐 来

テレビ 新聞カタカナ文字が威張ってる

四六時中自問自答を重ねつつ

集會に挑む老婆のフアイトが痛ましい

年金が支えてくれる痴呆症

ワンカップ明日へ繋ぐエネルギー

奥 田 みつ子

初明かり威儀を正した松の影

黒すぎる鴉の影も吾が影も

雪しんしん憎しみを消す愛も消す

熱い言葉胸にあたため生きている

鬱の目を明るく変える春の声

河 井 庸 佑

目の前の欲に眩んだ自己嫌悪

谷下りこんなにも角の取れた石

見過ごせぬ擦り寄る犬に湧く情け

祖母の供歩幅合わせて寒牡丹

春の日に揺り起こされたこぼれ種

川 島 諷云児

照れ症か偏屈なのか人嫌い

度忘れが日毎に多くなる不安

ふるりの記憶の糸は切れたまま

今年こそうまく咲かそう花ごよみ

なんでやろため息ばかり出る今夜

木 村 あきら

啓蟄で地球の全て動き出す

一枚の舌をだいに生きてゆく

冷飯も食って男になつてゆく

竜宮が見えるかしらと浜へ出る

エンジン快調ハードル少し高くする

河 内 天 笑

節分やのろまな鬼が二匹住む

介抱する方もろれつがまわつてず

下手くそなお経と思う棺の中

夢プラス勇気で五年先を見る

いつ恋をしても遅すぎはしない

## 第12回播磨文芸川柳大会

川柳大会当日投句の部

と き 3月16日(日) 午前11時開場

ところ 姫路文学館講堂(北館3F)

姫路市山野井町84

TEL 0792-93-8228

FAX 0792-98-2533

課 題 各題2句

「素顔」(京 都) 小林 幸子 選

「残る」(相 生) 中塚 礎石 選

「背広」(加古川) 泉 比呂史 選

「忘れる」(西 宮) 小松原 爽介 選

お 話 講師「播火」代表

(姫 路) 柳谷 郁子 氏

会 費 1000円 欠席投句拝辞 席題なし

締 切 午後1時 開会 午後1時10分

賞・表彰 各題秀句3句に盾及び賞状 他多数

備 考 会場には食堂がありませんので

昼食は済ませてお越しく下さい。

主 催 姫路文学館

# 水煙砂

奥田みつ子選

香川県 原 賢

遠慮せず生きてやります長寿国  
芽吹く春冬の話はもうよそう  
四つ捨て五つ拾うて妥協する  
万一があるから夢を買いつづけ  
手料理を誉めれば妻の得意顔  
てのひらで踊らされてる夫の影

横浜市 秋 元 和 可

初日受け蠟梅凜と改まり  
泥沼に生まれ真白なひつじ草  
浮き沈みあつて周りが見えてくる  
忙しい過去に魂置き忘れ  
人生のカード刻々減る度数  
写経の手亡母に会うまでひたすらに

今治市 塩 路 よしみ

侘び寂びを愛した父の長火鉢  
生きたところはここに虹を追いつづけ

明日の絵は明るい彩を足して春  
不器用なわたしも渡る丸木橋  
ホツチキスが怖いと紙の私語を聞く  
梵鐘の余韻の中にこころ澄み

京都府 前 上 英 一

自己主張する鉛筆の芯尖る  
病んでなお追う夢がある薬包紙  
美しさ競う花にも自己主張  
競争に敗れてからの人間味  
割り切つてからのレールは曲らない  
春うらら風船売りも眠たそう

横浜市 川 島 良 子

本能と理性ぶつかる闇の中  
簡単に壊れるほどの柔じやない  
明日という迷路の中を生きていく  
シナリオの通りにいかぬ今日のウツ  
何歳になつても親は子を案じ

鳥取県 澤 裕子

雑音に慣れて主婦の座ゆるぎない  
情熱は無いが種火は持つている  
親の背でモラルしつかり見て育つ  
増税でうず巻く年が始動する  
ポリウムを上げて泣きたい時もある

羽曳野市 森 下一知

風に当て陽に当て味が丸くなる  
突き当たる壁が大きくしてくれる  
カタカナ語使って答けむに巻く  
しがらみの酒がカルテに表れる  
どんぐりが風を掴んだ有頂点

大阪市 升 成 好

結願にとばせてみたい絵馬の夢  
ほろ苦い悔いのいくつかあって古希  
目が笑いすぐ足を出す孫の嘘  
横町の名がびつたりの法善寺  
路地裏の恋も喧嘩も見てる猫

横浜市 近 藤 道 子

公園で男女のコント聞かされる  
シャンパンの栓をとばしてパースデー  
罨かなと思うときめく風に逢う  
振り向いて下さい神に鈴を振る  
この平和いつまで信じられますか

倉吉市 酒 井 美 美 子

古稀迎え老いの哲学幕を開け  
幕引きは大往生としたいもの  
油断して浅瀬に足を掬われる  
愛の鞭 解り合えたか目に涙  
流れ星心の痛みずっと消え

和歌山市 喜 田 准 一

売り言葉軽く流して春の風  
時刻表ない人生の途中下車  
ひと声の重み背中を押しに来る  
こだわった愛想笑いがぎこちない  
角立てぬように使ったカタカナ語

河内長野市 石 堂 潤 子

楽らくのレールを捨てた子の巣立ち  
考え過ぎと言うがあなたは傍観者  
ジェラシーが心貧しき事言わす  
私のバイブル笑顔詰めてある  
お隣のピアノ夜更かし好きらしい

倉吉市 森 川 あらた

瘦せているけれど図太く生きている  
占いの良いことだけを信じよう  
願うごとひとつ叶えば良しとする  
ここから笑うと顔は丸くなる  
物知りじゃないので辞典手放せぬ

札幌市 三浦 強一

テロ戦夜明けの歌が聞こえない  
ライバルのジョークにいつも刺がある  
二日酔い昨夜をたどる点と線  
忍一字育む母の無位無冠  
自画像に画き足してゆく笑い皺

日立市 加藤 権悟

人間にかえる独りの縄を縛う  
善人の掌からこぼれる下手な嘘  
投げかえす無念つぶてのない歩道  
そのことの疵には触れぬおもいやり  
歟のうつ大地に汗がころげ落ち

東京都 井上 つよし

除夜の鐘 雑魚達しく生き残り  
無位無冠雑魚だと顔に書いてある  
越年が出来る積もりで書く賀状  
一寸の虫の主張も聞いてやり  
満腹の羊慌てず迷わない

東京都 清原 悦子

切り捨てた話を拾う夢の中  
一日の最後笑顔がいらいしい  
悪戯なその目が好きで苦勞する  
ふる里で道に迷った開発地  
居るだけでいいと言われた仲なのに

岐阜市 平野 あずま

国産のロケット夢が実を結ぶ  
失敗を超えた不撓の知恵と汗  
国境のない空自由の風にのる  
宇宙から地球見つめる日を願う  
プロジェクト担った過去がわが誇り

静岡市 中西 雅

旅の宿覧の澄む音胸に浸む  
学生の言葉にとっても追いつけぬ  
理想論まくしたててる青りんご  
匠の技盗めと弟子を叱咤する  
夫婦雲肩よせ合うて相談か

綾部市 藤田 芳郎

慰めにならないけれどなぐさめる  
無口な医者がカルテびっしり書いている  
一善を積んで極楽予約する  
喝入れに行く下駄が買う柿のたね  
正座して鎮火するのを待っている

泉佐野市 稲葉 洋

CMが無理矢理春をつれてくる  
年金の身が焦れてる春の音  
春が来た祝儀袋が忙しい  
何となく弥生の風に酔うハート  
弁えた過去の常識ずれる今

柏原市 永 浜 加津子

藤井寺市 若 松 雅 枝

吹雪の夜いとしい女を連れて逝く  
死化粧美しすぎてまた涙

価値観を見直していく老い支度  
少年の一念な思ひ独楽跳ねる

孫娘春色をして一人旅

岸和田市 亀 井 皎 月

落款を押して格好つく色紙

賞味期限切れているのが意地を張る

歳月で消せない過去が威張ってる

ゲートルを巻いた昭和の戦中記

故里を出て都会目指した青春譜

羽曳野市 濱 口 フ ジ

働いて温泉めぐり笑みが出る

湯につかり臉をとじて浸る幸

楽しみの予定を記すカレンダー

小包を開ける気持は玉手箱

初めてのタクアン作り石運び

東大阪市 田 中 美弥子

二十四時間同じ酸素を吸う夫婦

お互いが好きな歩幅で合っている

振り向くと愛憎の川堰を切る

罪ひとつの試練受けている

髪染めて少し遠くへ翔んでみる

白足袋を履けば背筋がシャンと伸び

米寿にもまだ七彩の夢がある

エプロンの白さが光る春の膳

マネキンに誘われ春の彩を買う

大根を漬けて喜寿にもあるフアイト

八尾市 松 葉 君 江

わんぱくの夢ふくらますオリオン座

手抜きした料理光らすサクランボ

七十年歩きつかれた土ふまず

人間のドラマ見ている駅のハト

荒波にもまれて視野を広くする

神戸市 山 口 光 久

下駄を買う外人さんが居て楽し(神戸三宮)

曖昧を許さぬ父の深い皺

夕明り明日はよい事ある予兆

ほんやりと過去が現れ戒める

電話から飛び出す声の美人像

篠山市 谷 田 多美子

まほろしとお揃いで着るチャンチャンコ

一つ覚え二つ忘れて一人部屋

思い出は好い事ばかり寒月夜

一条の煙の行方亡夫の影

明日は雪 丹波の空は重くたれ

奈良市 乾 春雄

こだわりを捨てて平和の風に乗る  
挫折から新たな道を探り出す  
整理の手止めて想い出回り出す  
シャボン玉飛ばす小さなユートピア  
空缶をコロコロ風は演出家

和歌山市 土屋 起世子

愛される理由があつて椿咲く  
結び目を点検してる縄電車  
宝石の色に大根炊きあがる  
握り飯丸くならない低気圧  
溶かされて固めて愛のチョコレート

和歌山県 村中悦男

耳動く人情話のする方へ  
野仏のズキンの朱に映える雪  
約束のない一日が暮れていく  
四季送りまた四季送り春迎う  
目に見えぬ世間気にする妻がいる

和歌山県 森下順子

連れ立つていつも椿へ来る目白  
仏花替えて小さな旅に出る  
時々忘れず結び目確かめる  
冬木立あわてることが何もない  
そのうちに赤が似合つて来る六十路

鳥取市 永原昌鼓

茶柱の予感が冴えたい知らせ  
破れてもまだまだ捨てぬ老いの夢  
不器用で曲がつた道が歩けない  
戦争も飢えも忘れた国が病み  
主婦のプロ目ざして手足忙しい

米子市 足立 由美子

力こぶ歳相応に老いてきた  
輝きが失せないように磨いてる  
結論へあれやこれやとまだ迷う  
年始めもう来年を考える  
一日を元気に終える倅でよい

鳥取県 奥田保子

ここだけの話を飛ばすのは雀  
妻の言うひとことグサリ煙草断つ  
おかしさをじつとこらえるのも辛い  
あわてても仕方がないと腹を決め  
何もかも上手くゆくのも気味悪い

鳥取県 竹信照彦

目標は脳の隙間を埋めること  
水割りをチビチビ舐めてする思索  
詩吟にも安来節にも段がある  
老けるなど尻叩かれて区長役  
合併の狂騒曲が鳴り止まぬ

鳥取県 竹 森 富久江

あしたする口癖ばかり夢ばかり  
病床が明日の元氣告げ始め  
楚々と生き孫ふたりにも恵まれる  
歳月のおかげ果実が熟れてくる  
年輪をかぞえて高い樹をおもう

鳥取県 吉 田 弘 子

冬山から学ぶ枯木の底力  
預金帳私の寿命割ってみる  
地球より重い命を説き伏せる  
それなりの迷いを持って老いの章  
でこぼこの長い道程だった古希

松江市 松 浦 登志子

暖かい風を待つてる道祖神  
嫌なことはつきり言つて鏡ふく  
年越して私とみかん甘くなる  
春の庭見えてきそうな小さな芽  
家中に取っ手をつけて祝長寿

出雲市 荒 木 英 子

ほのぼのといひ日になりたい年の明け  
板ぞりで遊ぶ元氣な子供たち  
授った大事な命守りたい  
飛躍して余生楽しくパソコンで  
髪染めて母の歳までジャンプする

出雲市 川 島 和歌子

除夜の鐘余韻残して春告げる  
皺の手も生きた証のお正月  
あやまちを繰り返しつづ年明ける  
目一ぱい生きているから忙しい  
時々休んでぶらり旅に出る

鳥根県 武 島 ちよえ

倅せを引き寄せたくて熊手買う  
背と腹の意見が酒で妥協する  
つまずいて転んではまた起き上がり  
招かれてお茶の梯子もまた楽し  
勘違いここは笑つてごまかした

倉敷市 撰 喜 子

今夜また羊とびかう寝間の中  
書初めを孫と墨すり書く至福  
霜柱踏む足音に心澄む  
神かけて誓った愛のはずなのに  
後ろにも目があるように子を叱る

岡山県 国 米 きくゑ

幸せな夢を継ぎ足す祝い箸  
不況時に明るさ点す愛子様  
瞳を閉じて広がる夢の設計図  
鈍感な女で風に愛される  
命生みいのち育くむ土の愛

府中市 馬場利子

愛媛県 黒田茂代

点滴と力比べとなる病魔  
季節なく出回る花が喋りすぎ  
肩がこる話に夢が弾まない  
また一つ命の重み除夜の鐘  
夢の続きみたくて風へ眼をつむる

宇部市 高山清子

矛先をかわす巧みな接統詞  
軽口が思わぬ波紋よびおこす  
傘寿過ぎまだ捨てられぬ見栄と意地  
相槌を待ってる老いの独り言  
横書きに馴染めぬままに老いていき

今治市 野村清美

初夢に羊が柵を越えて来る  
わだかまり水に流して顔洗う  
淋しさをまぎらすうどん音で食べ  
杵搦きの餅の粘りに教えられ  
転んでも笑顔で起きる姫だるま

愛媛県 花岡順子

生き方をいつも心に問うている  
方言を聞くと初心に戻れそう  
挫折から石橋叩く癖を持つ  
わがままを言ったと思う自己嫌悪  
空っぽの心に砂の音がする

冬の陽へ燃え出しそうな唐辛子  
陶器になりきってる寒の池の鯉  
身の疲れ弛みつ放しにして癒やす  
死とは生 輪廻思想にある癒やし  
キッチンに立てば機嫌のいい妻で

高知市 小川てるみ

ここだけにしたい話が走り出す  
ポーカーフェイス保つ修業がまだ足りず  
厳しさを教えてくれる向かい風  
飾らない言葉の中にある誠意  
美辞麗句並べた今日の自己嫌悪

高知県 桑名孝雄

傘寿まで辿り着こうとクラス会  
ああ余生トンビが空を舞うように  
晩酌がつくから中の上だろか  
拝啓に不況不安と続きます  
デフレ策論吉が遊んでくれぬから

高知県 百田幸

それぞれに思惑のあり日曜日  
甘柿も私も少し熟れすぎて  
諦めか悟りか妻はだまりこみ  
読める字が書けずに辞書とにらめっこ  
ほどほどの幸で満足しています

今治市 渡邊 伊津志

釉薬と火が醸し出す土の精  
絵の具溶く筆に尽きない夢がある  
声に出し自分を褒めている主張  
お互いに期待で縛り合う絆

河内長野市 大西 文次

長寿税払えと今に言うて来る  
哲学の道も歩けば腹がへる  
すげかえた首があつちを向いたまま  
赤ちゃんが寝る イ変調子守歌

箕面市 北川 ヤギエ

人生の色々あつて社会鍋  
ビザバイに愛のチーズをトッピング  
古希迎えラリー上手になる夫婦  
わだかまり酒一杯が取り除く

吹田市 須磨 活恵

またひとつ齢を祝う屠蘇の箸  
眠れない夜が私に話かけ  
つまずいてしみじみ知った人間味  
雑魚でよし雑魚には雑魚の詩があり

大阪狭山市 羽田野 洋介

幸せは並で充分老い二人  
魂が独りで歩く酔い心地  
わが家だぞ誰が遠慮をするものか  
十人が十色であつた良き時代

大阪市 尾崎 黄紅

年齢不詳恋の歌詠み続け  
近い子は疎くて遠い子は聡い  
見て見ない振りしたことを見られたり  
墓朽ちて大正昭和遠くなり

寝屋川市 岡本 勲

挫折した素顔の奥にみる闘志  
誤解とく酒で誤解がなおつたり  
イエスマン毎日マグマ溜めている  
愛なのか友情なのかもつれ糸

富山市 松見 たえ

父の目に光る涙の角かくし  
指切りの小指末だにあつたかい  
価値観がピタリと合つた酒の友  
占うと迷いだんだん深くなり

鳥取市 森 美智代

新年の意気込み白い日記帳  
黒豆もふつから未年迎え  
群を出た羊に空が広すぎる  
姉のこと笑えなくなる物忘れ

八尾市 中島 春江

福笹におかめもゆれて前をゆく  
旧正月郷の地酒を携えて  
晚酌に味噌田楽の串の焦げ  
熱燗に大風呂敷の法螺を聞く

青森県 福士 トキ

老いらくの恋か回診楽しみに  
クリスマス退院祝いありがとう  
郵便受け小ざれいにして賀状待つ  
長らえて賀状手にした幸せを

秋田県 湊 修水

よく肥えた羊ハガキに乗ってくる  
不況風どこのことかの顔ばかり  
ブッシュさん撃ちてしまんケンカ好き  
痛みだけ律儀に民へおしつける

野田市 那賀島 雅子

空つ風心の髪が深くなる  
婆さんと呼ばれ腹立つ余力あり  
口下手で胸の奥ではよく喋る  
沢山の夢見せられた古暦

東京都 やまぐち 珠美

湯豆腐のかすかに揺れて夫婦る  
年末の雲ゆつたりと冬を曳く  
身じろぎへ傾きながら黙秘の眼  
容量を知ってしまった日の不覚

横浜市 金 森 徳 三

ニコチンの誘いまぎらす渋いお茶  
不況風どこ吹く風のお年玉  
ゴミの日に年末年始捨てて来る  
元旦やまた一年の鈴鳴らす

横浜市 巖田 かず枝

錆び釘が一役買っているおせち  
パソコンに頼むほどではない家計  
カタログに老母が誘惑されている  
口べたの優しい人を連れて来た

横浜市 長島 亜希子

お年寄輪に入れダンス クリスマス  
シナリオのように子供は演じない  
庁舎まで売りに出される不況の世  
箱ものをもて余して無計画

横浜市 芦田 鈴美

ヘルシーと聞けば試してみたくなり  
三ヶ日我が家にも来たルミナリエ  
肩書きをたくさん付けて淋しそう  
コーヒーの好きな羊で寝かさない

横浜市 平 達也

あれあれと言って言葉は出てこない  
心技一如掲げて泣かす医療ミス  
受けた恩返せず詫びる人ばかり  
悔んでも悔みきれない灯り消す

草津市 久保 和友

北朝鮮の話はしない掘炬燵  
日向ぼこなの座禅してる私  
生涯の友とお寺でめぐり逢い  
ありがと一言言えた喜寿の友

京都市 清水英旺

医者に行き風邪をもらつてきたようだ  
氷点下十度の寒さ初体験(北海道を旅して 2句)  
ご苦労さん雪かき老いの息激し  
不景気の世のあだ花か福袋

大阪市 三浦千津子

能力の違いは触れぬ趣味の会  
宙返り打ってトライの笑顔よし  
日脚のび四国遍路の小賑わい  
立志伝廃屋偲ぶ人偲ぶ

大阪市 岩崎公誠

着地点熱いのちで終りたい  
ネクタイを結ぶと自信湧いてくる  
栄光の裏側に棲む飢えた俺  
自分史を削り削つて中身なく

大阪市 伴洋子

損得へ走つて明日を見失う  
難色の妻を懐柔するヴィトン  
寒椿落ちて雪野に色添える  
残月の恥じらい空に透けている

大阪市 寺井弘子

年賀状だけの便りもあたたかい  
青春像古アルバムの中で生き  
ノーベル賞無欲の人が輝いて  
拉致家族笑顔が揃う春は何時

大阪市 池上清治

バス代を借りた気がする無料バス  
高千穂の神楽に神話甦る  
歯並びも商売道具アナウンサー  
得意気な自慢話に要る我慢

大阪市 中村忠敬

大相撲日本国技の旗おろせ  
モンゴルの国技となるか大相撲  
力より技に拍手の国技館  
根っからの昔気質の職人芸

和泉市 横山捷也

反論の知恵が浮かんだ帰り道  
今日生きて明日はのぞかぬ事に  
出世したライバルばかり同窓会  
ナツパ服着て重役を蹴った意地

泉佐野市 備後三代子

少子世に双子のひまご誕生す  
良い事もあるを念じて掃き納め  
八十路坂信号待ちの小休止  
家建てて息子家族に見直され

交野市 田岡九好

ここからは知らぬ道だが踏み出そう  
マンネリも一つの経路と思ひ切る  
煙草止め肩身が広い会議室  
日溜りの猫の額の寂光土

岸和田市 雪本 珠子

豊中市 藤井 則彦

バスタブに湯の華入れて旅気分  
いたわりを身にしみて聞く万歩計

お茶漬けを勧め上手な京の人

日だまりで寄り添っている野良の猫

吹田市 木下 敏子

控え目な母の生き方真似て生き  
湯につかり五体満足噛みしめる

紅さしてまだまだ落ちぬ寒椿

散り際の山茶花赤く燃えている

吹田市 二宮 栄子

お正月輪の中心に亡夫が居る

三世代揃いはねたい年女

福笹が肩にゆれてる初恵比須

息子等去んで一人ぼっちの日にもどる

高槻市 執行 稲子

強気だが歳には勝てぬ杖の先

ふわふわの温もり詰まる暦だな

ぬくぬくの落着き貰うカブチーノ

双生児腹痛までも似る不思議

高槻市 田中 初恵

自己主張しない案山子がフルタイム

観音もたまには柳眉逆立てる

向う疵受けた恋猫けしかける

老眼になって世間が見えてきた

踏切がいらいと鳴っている

かさこそと老いが染み入る散歩道

弁論で鳴らした割に物静か

老い二人臨時ニュースに箸を止め

富田林市 稲川 恵勇

片腕のはずだったのに飛び越され

透かされて顔しかめてる諭吉どん

面倒をいとわぬ母の力こぶ

五割引妙な買い気をそそられる

羽曳野市 福田 悦子

母逝きて一人ぼっちの春淋しい

子のために百度の石を踏んだ母

車いすに生きる勇気をもらい受け

覚悟しても母の別れはつらすぎる

羽曳野市 永田 章司

朝粥が身体の調子問うている

懐の痛む話の席は抜け

パソコンが賀状作りに汗をかき

地方自治国政よりもビジョンあり

東大阪市 今岡 貞人

風景を変える政治の風を待つ

影だけが私の余生追ってくる

老いてなお朝のリズムは狂わない

最高の芸術ですよ妻のしわ

枚方市 二宮 紫鳳

もみじの掌引いてのどかな初詣  
童唄孫を相手に癒される  
マタニティー娘の横顔は愛に満ち  
平和です孫が主役の三ヶ日

藤井寺市 伊藤 アヤ子

金粉のおとそ家族をまとめてる  
かじかんだ両手を合わす初詣  
計画は三日坊主で終わらない  
初氷はじけ噴水三学期

藤井寺市 西村 栄一

北の窓あけてウツをば追い出そう  
お帰りの笑顔に今日が満ちている  
旅行から帰ると青空が続く  
花作り花と心が通じあい

藤井寺市 俣野 登志子

されど家事自己満足と言われても  
隙間風繕いながら二輪草  
道の駅土の匂いと土地訛り  
母の味母の歳でもまだ出ない

藤井寺市 吉田 喜代子

初詣で祈るものとして特にな  
古里に残した恋のほろにがさ  
頑固さが良くも悪くも八十路坂  
呼鈴が鳴った気のした日の計報

箕面市 寺井 柳童

嫌ってた父同様に子を育て  
たすき継ぐ赤い気焔に沸く大路  
悲しみに耐えて仏と語り合う  
見たくないもので見える術後の目

八尾市 西川 義明

賞の無い菊の鉢にも水をやる  
金箔の酒とは嬉し寝正月  
ばあちゃんの歩幅にあわす初詣  
店構え昔のままに味守る

八尾市 平川 幸枝

除夜の鐘去った煩惱一つふえ  
眠れずに羊と息を合わせてる  
探しもの亡夫に頼めば出るメガネ  
無事という大きな幸の干支の春

八尾市 與田 明

初詣祈願するのは孫のこと  
頑張れと言うな言われる身が辛い  
冬しんしん妻の記憶の戻る時  
雷が踊ると山は雪になる

八尾市 田中 トシエ

居酒屋で透明になるひとり酒  
新日記私の心にらんでる  
そっとしてあげなと言って放つとかれ  
納得がいかず曲ったままの釘

八尾市 驚見 章

本職になった素人のどじまん  
ハワイアン流れ昼食別世界  
名曲を遠くに聞きて涙する  
紅葉してふるさとの山信貴生駒

大阪府 前田 忠子

パスポート十年取っておく元気  
田舎町ベントジャガーも目に慣れる  
ブランドの犬が行きかう散歩道  
精一杯生きて未練は残すまじ

大阪府 小栢 こずえ

メルヘンへ誘うように旅の雪  
もの忘れ自分にじぶん腹が立つ  
とんど焼凍てつく空に活を入れ  
里の味送り自分も満たされる

神戸市 岡川 無限

ありがたい味方拍手が鳴り止まぬ  
騙されてやろう言い訳じつと聞く  
宝島めざす旅路に妻という  
不器用な男抜け道など知らぬ

神戸市 田中 章子

神仏に悩み丸投げして生きる  
五七五朝から脳の活性化  
省略語マクドデパ地下ならわかる  
無理にでも歌を唄えば軽くなる

神戸市 山田 婦美子

仕来たりの仮面をつけて一つ屋根  
我慢して溜めた不足の捨てどころ  
先読みが出来ず人生ケセラセラ  
母さんと呼べばどなたと母の問う

神戸市 伊勢田 毅

平成の野菜に旬は死語となり  
素うどんで梅を見ている老い二人  
合点をすれば影武者従いてくる  
定年後何故か帽子が好きになる

尼崎市 河津 正治

婚礼の荷物を値踏みするスズメ  
子の成長親の苦勞も忘れさせ  
卓袱台に今日も元気な対茶碗  
控え目に命押してる車椅子

尼崎市 桑原 東園

乾杯をワインカラーのマニキュアで  
力走をしたつもりだがいつもボリ  
ラブレター燃やす煙に酔っている  
年賀状柳友の句に励まされ

伊丹市 延寿庵 野 靄

残照へいのちを洗う阿弥陀彫る  
とりあえず拍手しておく負け試合  
七草粥いただくいのちありがたう  
不器用な手でチェックする農日記

パトロールのように決めてる万歩計  
川西市 井本 清山

裏庭にジャガ芋植える春彼岸

リクルート喪服のようなスーツ買う

ためらって一歩進める水溜まり

三田市 石原 歳子

東洋の魔女今は優しいお母さん

栄養が豊富ときけば直ぐに買う

艶やかな栃の新芽は漆塗り

くしゃみして延々続く立ち話

宝塚市 飯西 ミサヲ

会えない日愛を育てる日にしては

待った甲斐やがて信号青くなる

市場通り氏神様にご挨拶

回顧する失敗の数ほるかなり

兵庫県 黒崎 美紗子

年玉へ温いふところあてにされ

福袋かかえ人出に酔っている

久しぶり帰省の子らのたくましさ

よい雨に積んでた本を読みふける

生駒市 小西 稔

飛ぶように売れた初市福袋

宇宙より情報のせて飛ぶ電波

自己過信人のことばに耳かさぬ

古い本惜しいと捨てずゴミの山

粉雪にはしゃぐ南国なればこそ  
和歌山市 内田 結実

仏の手支えに登る紀三井寺

ご無沙汰を詫びると温い風の寺

気の早い桜情報紀三井寺

和歌山市 根田 美子

最初はグー正月ゲーム孫ひ孫

お年玉ママがにこにこ勘定す

姑に花札習うお正月

風邪に負け何が宝か思い知る

和歌山県 辻内 次根

今日よりは明日へ視点を変えてみる

段取りの話に入る丸火鉢

辞書を引くそんな初心を忘れてる

はつとして暮れる峠を振り返る

鳥取市 大坪 天涯

なにもかも好きになるのはむつかしい

気まぐれな野良犬でいて綺麗な瞳

もみじ手と握手あくちゅと爺の位置

いさかいの土地分けあって友でいる

鳥取市 横田 春名

外は雪家族揃って酒を酌む

ごめんネを心の奥にまたしまふ

私には鈍い光がよく似合う

諍いはさざ波なんだ上手く飛ぶ

鳥取市 岡田 信恵

ほのぼのと人柄しのぶ友の顔  
偶然か必然かまためぐり逢う  
のんびりと手足を伸ばす三箇日  
お正月手作りおせち自分流

鳥取市 近藤 秋星

初春や今年はどんなドラマ描く  
虫たちもひっそりとして春を待ち  
オール5と親戚中に触れ歩き  
うろうろとしているうちに小正月

倉吉市 青砥 菊枝

老いてなおブライドだけは捨て切れぬ  
童謡の歌詞はしつかり覚えてる  
触れるのはよそうわたしも同じ傷  
控え目で明治の母は強く生き

倉吉市 大下 智子

ハイヒール迷わずはいた若い頃  
十七字町の灯となり句碑も出来  
喜寿の筆字が心持ち物語る  
白壁を守り続けて町づくり

米子市 猪森 スミエ

叱られる覚悟で尻尾下げている  
大山の乳房から出るうまい水  
疑問符をつけたまんまで越す峠  
保険屋の話術ふらふら迷わされ

鳥取県 前坂 なお美

まだ未練あつて冥土に渡れない  
真情美のこころを詠めと諭される  
色っぱいはずと自信をもっている  
弱点を曝す勇氣も持っている

鳥取県 福西 茶子

ホコホコのおとんで包む反抗期  
羊毛か羽毛で揉める民主主義  
サラリーの日だけ上場株のボク  
幸せな家族を載せて賀状くる

鳥取県 細田 裕子

未年ふんわりホット君といふ  
五十路坂夢のサイズがSになり  
風邪ひくと日頃のつけが疼きたす  
貢いだ子遠い都会の空の下

鳥取県 西垣 美知子

物不足の頃にはあつた人間味  
リハビリの再起妻の手ありがとう  
不況風見栄の袋をぐつとしめ  
聞き流すことも覚えて登り坂

鳥取県 平木 公子

小さな羊でいつも群の中  
順送り親はせつせと子に貢ぐ  
苦しみは行間にある日記帳  
新しい内はお鍋もよく磨く

国文祭終り文化の芽が伸びる  
華やいだ成人まじり祝辞聞く  
花のプロ涙の努力語らない  
弱点を握り相手に道譲る

鳥取県 岡村孝明

迷うなら飛んでみるのも一つの手  
光る玉一つ持たたい胸の中  
実印を長男だけに見せておく  
羊でも飾って温い風を呼ぶ

鳥取県 山岡久枝

咳をして存在示す夫がいる  
新年会柳友の顔にこやかに  
健康で明けた新年弾み出す  
シクラメン玄関先のご挨拶

鳥取県 岩崎和子

お金だけ貯めてお医者へ持って行き  
片付けが下手で古着を溜めている  
人前で気負っていても根は弱い  
娘婿親孝行と旅の供

鳥取県 橋谷静江

時々は心に晴着させておく  
残り歯がいとおしくなり磨いてる  
生活のリズム狂わす孫の笛  
初詣お願い事がありすぎる

松江市 山根邦代

真綿色ほんのり光るシクラメン  
雪こんこ白菜甘くなつてゆく  
松の内明け光りだすカラスの眼  
へそくりと折り合いつけてプラン練る

松江市 松本知恵子

今年こそ咲かせる鉢が二つ三つ  
お日さまの零すダイヤか雪野原  
逆上りむかしできたと言ったとて  
またしても夢で終った宝くじ

鳥根県 菅田かつ子

初詣仁王と暫しにらめっこ  
屠蘇きげん無口のはずがなめらかに  
九回の裏だ足跡つけておく  
短文詩なめてかかったその誤算

鳥根県 福岡博利

お亡父さん雪積りますもう四年  
年金は年金なりのお正月  
一人居てコーヒーとうに冷えて居り  
今年こそ暦見ながら期待かけ

鳥根県 松本聖子

フリージアの香りは独語かも知れぬ  
イエローカード心のしわとしみに出す  
酒を呑むコーヒーを飲む日本の字  
赤い糸もつれ三面記事になる

岡山市 大森純子

香川県 伊勢 八重子

丸く棲み時に忘れたふりもして  
口ごもる度にぼろぼろ嘘が落ち  
飢餓の子に分けてやりたい白い飯  
赤ちゃんの笑顔に寄ってくる笑顔

松山市 山之内 八重美

ぼろり出た涙ヘドラマ一つ秘め  
師の影を踏まぬ昔をなつかしむ  
お砂踏み邪心を払う長い列  
短日に話し残して娘は帰る

愛媛県 安野 案山子

食って寝てあつと言う間の三箇日  
純朴なノーベル賞に癒される  
バチンコの席に無心の父が居る  
四球も振り逃げもした僕らの道

愛媛県 宮本 末子

八十路過ぎ欠いた礼儀に来る賀状  
見て聞いて学ぶ未の年女  
何時来ても里は良いとこ薪の風呂  
チャンスだと思えば無駄でないピンチ

高知市 伊野部 和江

正月は家族が揃うだけで良い  
幼子と両手を合やす初詣で  
イルミネーション不景氣忘れ飾る家  
良い男だまって傷み耐えている

高知県 貞岡 佐紀子

流星を見たい気もする午前二時  
価値観の違う夫婦も孫は別  
笑いじわ増えて度胸がついてくる  
固くなった心をはがす苔の露

北九州市 岡田 幸生

嘘の無い汗を見ていた社の人事  
病妻の顎が料理の指図する  
甘党の男を軽く見た誤算  
言い訳になるから貝になる男

唐津市 坂本 兵八郎

羊腸の先が見えない初日の出  
子が巣立ち結び直した赤い糸  
宮仕え済んで私の顔がない  
涙涸れ笑みも時々一周忌

唐津市 岩崎 實

孫曾孫数え兄弟みな老ゆる  
初詣でお神酒ぜんざいふるまわれ  
色紙にて抱負を語る時の人  
やり直し繰り返し返してうちにでき

アルゼンチン 松井 美稚子

盛り合せ言葉なくして愛を置く  
途中下車行か戻るか走馬灯  
老梅も匂ってみせる人生譜  
一日の速さに乗れぬ恐竜画

和泉市 小坂 凡英

兵庫県 安達 厚

木枯らしへ凜としている木守柿  
バレスチナ神よ仏よ何してる  
孫達に七十年だよ誇る古稀

川崎市 浦野 昭志

遠い日の麦踏み想う霜柱  
笑っても不安は顔に出てしまう  
信心を笑う倅も初詣で

尼崎市 林 昭三

ノックする重役室の扉の重み  
残業に駅から月がついて来る  
しんしんとこれも音だろ雪が降る

大阪府 野田 栄呼

いつまでも足になじまぬ安い靴  
ちゃんと食べそれが生き抜くための基礎  
移りゆく時の流れに古稀の春

南門市 小原 圭二

玄関に靴が乱れるお正月  
元旦は春の遍路へ地図を繰る  
ぼつぼつと賀状途絶えてゆく縁

堺市 荻野 像山

窓開けて露天気分ひたる父  
埋もれてた玉へ照らしたノーベル賞  
飛べる気へ足が謀反の水溜り

近道をせずこつこつと来て平和  
シルバーマーク張ってゆつくり走ります  
値切らない値切るものなら求めない

倉吉市 前田 喜美子

直走る箱根駅伝雪もえる  
対岸に火の気孕んだ風が吹く  
町名だけ変わらぬ過疎に住む

三重県 南 忠道

年金の十年後見る辻占  
クロインベビー生きてくことは苦しいぞ  
ジンギスカン鍋に親しむヒツジ年

米子市 小塩 智加恵

終章にいうありがとう胸に抱く  
笑うから腹に残らぬおしゃべり会  
孫二十お屠蘇のグラス一つ増え

堺市 河盛 龍三

嫁入りに明治の気骨祝い節  
週末は家族で突つく鍋料理  
相撲して孫の成長確かめる

和歌山県 中村 君枝

トリックの先を読み取るするどい目  
継続は力と農の意地を見せ  
ゴロゴロもぶらぶらも嫌 勤勉家

秋田県 秋野 宏

核心を突くと怪しくなる記憶  
ドン底で強い味方の妻が居る  
買えもせぬ高級売場見て回り

日高市 根岸 方子

注意したつもりが足をさらわれる  
兄弟に上下はいらぬ間柄  
パソコンが兄弟会の主となる

武蔵野市 亀井 円女

歳重ね可愛くボケる名演技  
泣きました娘婿からお年玉  
笑いまひよ恐いお方もええお顔

横浜市 布山 嘉信

山の友賀状に映える去年の山  
自販機の乾いた声でありがとう  
作り手の血と汗滲むダンピンゲ

横浜市 石原 三郎

解らない絵皆ピカソと思ってる  
歳をとり知ったかぶりに目を瞑る  
のら猫の花壇荒らしと知恵競べ

藤沢市 妹尾 安子

押し入れを開けるとドツと来る雪崩  
太陽と泣いて別れる雪ダルマ  
名湯も景色もそつちのけで飲む

新潟県 高野 不二

七十の願い初日へくり返す  
酔えぬだけ割高につく発泡酒  
健康法十円分を徒歩にする

京都市 三宅 満子

頭にも不用なものは溜め込まず  
一年分手紙書いたよ年賀状  
一行の手書きがぬくい年賀状

大阪市 井丸 昌紀

為政者がばらまいている玉手箱  
お目当ての家から猫が顔を出す  
聞き飽きた猫なで声にだまされる

大阪市 平井 露芳

お屠蘇なら許してくれる休肝日  
よく効くが人も死にますええ薬  
大きなうちにもあるよ古時計

大阪市 辻本 登季子

新年に母を尋ねて墓参り  
孫達とお節料理で輪を広げ  
今年こそとしこそはと年迎え

和泉市 千葉 武

詰め込んだ知識春には融けてくる  
耐えられず笑い出したいこの不況  
遠い国だが戦争ごっこ恐ろしい

はずまずに願いの欲が厚すぎる

門真市 矢 阪 英 雄

年始め治療へスタート勇気出す  
ちよつかいを入れられ熱が上昇し

河内長野市 木太久 正 一

よく生きて来たたと妻の手を握り  
勘戻し孫に教えるコマ回し

河内長野市 内 海 綾 乃

いつからかスーパ一覗く散歩道  
もくもくと無心に歩く遍路道

部屋の隅パツと華やぐシクラメン

樹木達雪の重さでしんどそう

岸和田市 坂 口 英 雄

こつそりと親より好きな人見つけ  
寒いから遅れましたと言うバイト

福袋あければ要らぬ物ばかり

岸和田市 堤 檣 代

お腹までしみとおります除夜の鐘  
朝ドラに起されている単細胞

ねばならぬこともなかりしひとりもの

堺 市 奥 時 雄

好きだった子に酌をする同窓会  
海の子も今はプールで歩くだけ

パン作りさすがしゅうとめ場を譲り

こだわりの写れば恐いレントゲン

堺 市 柿 花 和 夫

急ぐまい三途の川は川止めだ  
節分の豆は二合が飲める数

高槻市 大 崎 侑 子

初詣で無神論者も額ずいて  
ほどほどで良いと達観気張らずに

高槻市 安 田 忠 子

歯ざしりをする口惜しさにまだ会わぬ  
顔浮かべ繰返し読む年賀状

お早ようの挨拶をして仲直り

彼岸寺星と祭に魅せられて

寝屋川市 中 川 恵 香  
(恵子改め)

一つ増え一つ忘れる除夜の鐘  
飽食の海に溺れて成人病

福娘頬っぺ角なし笑顔よし

羽曳野市 吉 村 久 仁 雄

樹の中に水音急に腹が減る  
名は体をイヌノフグリが表さず

この国のゆくえ憂える寒立馬

枚方市 大 昇 隆 広

ねばならぬと正義を語る気楽な身  
テクニク長けて見過ごす人の情

今日のミスの弁解探す一人酒

枚方市 莊 司 弘 之

初夢もまだ会社でのことばかり

世話役の苦勞吹っ飛ば笑い顔

定年後分けて楽しむ家事の役

枚方市 小 川 良 吉

年金の傘の中です寒い朝

今日もまた笑えるニュース無い 寝るよ

目の麟落ちる話が聴きたいな

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

ドクターストップ解けて亡夫にしほりたて

百ヶ日過ぎて悲しみフツフツと

娘が嫁ぎ難と交わすは甘い酒

藤井寺市 喜 島 芳 江

持病もち薬を供に旅に出る

初詣で四拾五円で欲をだし

川柳を生き甲斐にして寝不足に

八尾市 笹 倉 ひろし

これで良いプラスマイナスゼロで来た

定年後妻に始めた貢ぎ物

温度差は残るが妻の愚痴を聞く

八尾市 寺 井 はじむ

限定と言われて並ぶアリの列

餅でさえ自己主張する網の上

勝ち負けの決まった将棋孫と指す

大阪府 藤 井 郁 代

紅梅は言い尽せない優しさが

今年こそ心の不況吹き飛ばす

年金で生き甲斐もって夢が湧く

大阪府 大屋敷 婦美子

運命の声を苦悩の底で聞く

早起きで作る二時間わが至福

年始め年々歳々味があり

大阪府 東 文 江

えびさん福をもらいに参ります

娘や孫の帰省うれしく疲れ出る

湯煙に包まれ今日の労いやす

大阪府 高 木 道 子

初詣一年分のたのみ事

北風が傘寿の母をダルマにし

久し振り喋っておれぬ良い天気

大阪府 畑 中 節 子

硝子窓息吹きかけて書く絵文字

小春日もエールを送る熟女達

秋時雨我に読書の昼しずか

大阪府 桑 田 ゆきの

人の口留め金したい時もある

超安値今日の家計簿笑顔して

寂聴の法話に和む座となりぬ

尼崎市 古川 正子

祝箸家族揃って梅茶のむ  
夕茜明日は天気と鳥がとぶ  
梅一輪料理にそえて春をよぶ

三田市 辻 開子

真珠婚夫婦の味が煮つまらず  
お腹から笑い湯けむり三世代  
デザートは別の胃が呼ぶバイキング

姫路市 服部 一典

喜寿の僕四十の亡父と会った夢  
好きと言う言葉が好きでつい好きと  
義理人情可憐な女演歌だけ

兵庫県 岩本 美緒子

日本羊干支へ招いて迎春絵  
水墨の藁屋絵となる雪景色  
転けても笑うほかなし生きている

奈良県 江波 正純

ほめられてすぐ先生になりたがる  
温暖化冬將軍に気迫ない  
仰ぎ見るナースの顔はみな美人

奈良市 成橋 邦造

冬の月財布の中身見透かされ  
あくせくとアツと言う間の除夜の鐘  
商店街なじみの店がまた消えた

和歌山市 橋爪 佐一

大掃除腰の痛みも年を越し  
愛犬が逝って散歩の杖なくし  
新年を祝って浄土近くなり

鳥取市 山口 千代子

合掌の指に煩惱消えてゆく  
雑魚でよい元氣自由に泳ぐ幸  
子の未来親が勝手に夢描く

鳥取県 山下 節子

終点の見えぬ余生を生きている  
捨てきれぬ欲でチャンスを取り逃がす  
ポンコツの知恵袋だが役に立つ

鳥取市 谷岡 清子

神様に先のシナリオ尋ねたい  
飴と鞭知った世間の裏表  
核兵器悲しい地球涙する

鳥取市 西尾 敬之介

測るたび血圧計が定まらぬ  
病床の電灯消してイヤホーン  
病院を去って幸せこみあげる

鳥取市 河田 のり代

掃除せぬ家に新年やって来る  
しぶい顔新年義理の福笑い  
お年玉無いふところを叩き出す

鯛よりは雑魚の栄養高い価値  
休日の朝掃除機に起された  
柿は好き入歯に当たる柿の種

米子市 池尾保子

テレビつけ今日の世界をかいま見る

鳥取県 池澤大鯨

本人が知らない番号ばかり増え  
降る雪や真白き世界だけでなし

鳥取県 松川行男

絵日記も一氣に仕上げ冬休み  
メモだけで秘密をかくす日記帳  
顔色を変えぬ羊は平和です

鳥取県 蔵本悦子

五七五脳が目覚めてありがたい  
不況でも女の夢は捨てません  
パワーパワー羊が四股を踏んでいる

鳥取県 平尾菜美

横糸を紡いでカニのいい出合い  
浮かぶ瀬が波に押されて遠くなる  
ぬれ落葉命吹きこむ庭がある

鳥取県 藤山弘子

初雪へなれぬハンドル肩がこる  
今年こそ羊手本に暮らしたい  
羊年もてはやされて落ちつかぬ

神様は寝て待つ果報許さない  
情報的大海をさまよう木の葉舟  
逆風を独りで耐えるトップの座

鳥取県 鈴木一弘

お正月参拝客のあでやかさ

出雲市 梅ミツエ

花盛り土に感謝で手を合わせ  
我が部屋で静かに指を折っている

出雲市 加藤スズコ

花の市香りあふれて和ませる  
鐘を打つ仏に告げる良い知らせ  
どここいしよ声大にして年明ける

安来市 原煩惱児

安物と見せぬ着こなし身だしなみ  
マタニティー落ち着きはらう市場籠  
鮮やかな墨痕父の候文

鳥根県 持田多輝子

政治家の胸は痛まぬ予算組む  
シャネルの香ほんのり匂う薄化粧  
迫力も気力もほしい老いの日々

鳥根県 毛利幸

から元気出して今年の幕を引く  
昨今の心棒少しずれている  
乞い願う羊に託す好景気

# 第75回 大阪川柳の会

日 時 4月3日(木) 17時開場・18時締切  
会 場 サンケイビル本館322号室  
題と選者 △ヤリくり・八十田洞庵△びつたり・前田咲二  
△スタート・海老池 洋 △夢・磯野いさむ

各題2句 席題なし 会費千円

生き甲斐は自由に翔べる免許もつ  
雑踏の中で見つけた希望の芽  
初詣で一年中の欲願う  
曾孫来る予定が狂う大人たち  
嘘つけぬ鏡に笑顔させられる  
十指みな動かしボケぬ針仕事  
言いたい事胸に納めて家族の和  
笑わせる芸習うのに涙出る  
岸の草焼くなツクシがやけどする  
高知県 近 森 功  
登りつめやつと気付いた妻の杖  
腹割って話す屋台のコップ酒  
五線符を外れた祖母の子守歌  
宜野湾市 杉 谷 一 栄  
沖縄も冬があるよと言う一と日  
書きながら記憶不安になる数字  
不思議だな双子の曾孫見ていると  
府中市 岩 本 雅 代  
香川県 松 村 輝 夫  
香川県 向 山 治 延

## ふあうすと川柳大会

日 時 4月12日(土) 11時開場  
場 所 兵庫県民会館9Fホール  
講 演 「川柳とユーモア」 織田 正吉氏  
宿 題 「遊び」 中井 杏二選  
「近い」 松岡 紀男選  
「ロープ」 土田 欣之選  
「キリン」 白井ミツ子選  
「舌」 山下 繁郎選  
「車」 野崎 輝俊選  
「つなぐ」 前川千津子選  
席 題 なし 欠席投句拝辞  
締 切 12時 各題2句  
会 費 2000円(記念品、発表誌)  
懇親会 大会終了後、当日受付  
紋太句碑詣で(4月11日)・前夜祭・  
宿泊の申込みは3月15日までに下記へ  
連絡先 前川千津子  
〒654-0143 神戸市須磨区菅の台  
2-1-22-103  
TEL 078-791-1062

## 生駒番傘川柳会 創立30周年記念川柳大会 — 合同句集発刊 —

日 時 4月29日(祝)  
10時開場 締切12時  
会 場 三井アーバンホテル  
お 話 「川柳にあらわれた詩について」  
石田 柊馬 選  
有山 城寛 選  
住田英比古 選  
竹森 雀舎 選  
田中 新一 選  
玉利三重子 選  
本庄 東兵衛 選  
中尾 飛鳥 選  
「三 十」 中田たつお 選  
「年」  
「記念」  
事前投句 「城」 「生」 「駒」 「番」 「傘」 「三 十」 「年」 「記念」  
宿 題 (抜講50音順)  
出 句 各題2句、各題に秀句賞 欠席投句拝辞  
事前投句 2句ハガキまたは専用投句ハガキ使用  
3月29日(土)までに下記連絡先へ  
会 費 3000円 軽食、合同句集発表誌  
懇親会 7000円(宿泊は朝食付10000円)  
連絡先 〒630-0247 生駒市光陽台184  
吉川 卓方 大会事務局  
TEL 0743-74-6019

# 麻生路郎物語

(15)

— 同人集散と橋本緑雨 —

東 野 大 八

「みをつくし」の唾人一派の脱退。そこから居残った橋本二柳子（後の緑雨）に『仄』を廃刊して新同人となった塚崎松郎、井上刀三、林田馬行らで川柳雑誌も再スタートを開始した大正も昭和と改元された頃の路郎は、作句に川柳行脚に多忙な毎日を送っていた。

— 俺に似よ俺に似るなと子と思ひ 路郎 —  
の路郎の代表句は、大正十五年七月十一日に開かれた第五回柳談会で生れた。この柳談会は毎月の第一日曜を定例会と定めて、この年からスタートしていた。井上剣花坊が大連の帰途、路郎宅に一泊したり、新興川柳の論客として地力をあらわした田中五呂八の論旨に一矢を報いたり、和歌山の柳陰社を訪れたと思えば、上京して雀郎、〇丸、柳路、千代二、鯛坊（のちの村田周魚）と柳談に花を咲かせたりしていたが、あけて昭和二年三月一日長男ロンドン（九歳）を失った直後、路郎は愛児の死のショックも加わり罹病して阪大

病院に入院した。診断は悪性の腸チブス。

「診察が終わって路郎は病室へ運ばれましたが、名誉教授長崎仙太郎博士（柳号柳秀）のおことばによれば、こんどの路郎の病状は大分悪質とのことを私は暗にきかされました。病室へ見舞にくる人はさまざまでした。心配そうな顔付で来る人、長居をせずに早々に帰る人、病室でビールを飲んで帰る人、大声でばかばかしをして行く人、なかには路郎の病状をきいて帰る人もあったでしょう。医師の言葉では、回復はおほづかないと思うて帰った人もいでしょう。しかし幸か不幸か路郎は奇跡的に死線を越えて退院いたしました」（霞乃書簡）

「松郎・馬行・鶴足（旧号莢豆）・美乃作の連中、路郎の病後ある要求を持ち出し、訣別す」（山南楼メモ）

「私は松郎さんにして、刀三さんにして、馬行さんにして個人的には何んのわだかまり

も持っていない。刀三さんは奥さまの御病気の時、しんみりと私に御相談もあつたし、刀三さんの句は私も好きでしたから好意は持っていた。いやな感じは毛頭持っていない。で、他の方々に対しても同様でございました。それなれば、何故路郎との間に出来たヒビの修理をしないのか、とおっしゃるかもしれませんが、そういう場合、私個人としては許せない嘘を双方に言わねばなりません。私にはそうした芝居は一切うてないのでございます。たとえ強かな接着剤でついでみたとところで、壊れるものには壊れる因縁がすではらんでいるのですから、人間業ではどうしようもないのです。

— 雲雀啼いたとてまぎれましようかね赤椿 —  
の句を作っていた頃の莢豆さん（路郎の友人で写真好き。のち鶴足と改号）は、よく私の家へ遊びにきていました。野口雨情さんが遅日荘を訪ねて来られた日も、莢豆さんは遊びに来ていました。そして中庭で私達の記念写真を撮って下さいました。

その莢豆さんがいつ松郎さんのグループにおはいりになったか、その辺はハッキリしません。後に鶴足を改号なさってから盛んに十二字詩を作っていたられました。その短冊は、今も私の手許に残っています。

駒井美乃作さんは文壇人に多くの知己があり、たしか「土団子」に路郎は「白粉の花咲く家」というのをかいていたと思いますが、

あれは美乃作さんの家なのです。美乃作さんは愛人と私たちの家でお泊りになったこともございます。鳴尾ではじめた柳談会を毎月開いていた頃、ある夏に体験のある怪談はなしをしたことがございます。美乃作さんは自分の体験談をされましたが、実にうまいのでまるで高座の人情話をきいているようで、身の毛のよだつ思いをしました」(霞乃書簡)

『川柳雑誌』にとって橋本緑雨氏は国宝的存在であります。首と胴程の密接な関係のもとに、創刊以来堅忍不拔、全く献身的努力を続けてこられた。そもそもこの緑雨氏(當時二柳子)を見つけたのが路郎氏であります。爾來両者は駿馬と騎手の間柄をもって相信し、相敬しつつ、昔の武士道の「己を知るものために死す」の気魄が双方にみまぎっていた観があります。

路郎先生が、鳴尾に住んでいられた頃、社の用務を帯びた緑雨氏は、大阪築港の自宅から電車を三、四度乗り換えて、月の半ば以上も通われたのであります。それが一月や二月ではなく幾年も続いたとき、僕は暇の裏が熟くなりました。古い『川柳雑誌』をみる毎にそれが先生と緑雨氏の汗と血との賜である事に思わず頭が下るのであります。この緑雨氏の熱に痛く感動されまして、仕事も家事も経済も忘れ、一路川柳の為に路郎先生は闘い抜かれたのであります。

先生は他人の原稿に就いても、穴のあく程

よく眼を通されますが、自分の原稿には一層厳格で、一字一句といえどもおろそかにせず句の選など慎重に慎重を加えていられます。雑誌編集の期日が迫ってもなお先生の選句がすまぬ時など、緑雨氏は大晦日の借金取りみたいな意気込みで催促にでかけます。

でも、先生の選句眼を信じている緑雨氏は二時間でも三時間でも傍でじっと待つ。こうしたことは気の短いものには一カ月間ともたぬ。先生は病気で寝ていられても床の中で、投句の選をされている。その枕元でじっと緑雨氏は坐りつづけている日もありました」(川柳研究・昭和九年六月・福田山雨楼)

「橋本二柳子(後の緑雨)さんの本名はたしか与作と思います。緑雨さんは川柳以交吟社「みおつくし」のメンバーでありましたが皆が川柳を離れて行っても後へ残って、路郎を補佐した唯一一人の人であったのです。

この方は事務的な人物で、公務の傍ら毎日のように運日荘へ足を運んで、路郎の原稿のおくれそうな時はあつちの抽出や、こつちの抽出をあけ、材料を探し回り路郎の前へ置きました。路郎の虫の居所の悪い時は、激しい言葉も出たでしょう、ムツとした顔もせず、実に忍従そのものの姿をみて、私はねばり強い北国の人根性をハッキリと認識いたしました。ひとつには、社を出ていった仲間の人達に代って責任を果たさねば、という面もあつたかとも思います。それにしても川柳

の運営に常に頭を働かせた人でありました。

こうした路郎と緑雨の仲をさくため、時には中傷する人もありましたが、路郎と緑雨はただき流す程度で、二人の仲はなんの疑念もなくにすんだのです。緑雨さんの手紙は電文のよう。お互いの会話もその通りで、單刀直入、味も素気もないので、緑雨さんという人柄を知らぬ人には傲慢にもぶしつけにもみえたことでしょう。だから緑雨さんは初対面の人には口をききません。

緑雨さんは小器用な作家ではありませんが真面目に自然を見、社会状況にも正直なメスを入れました。こうした彼の性格が句に反映して無技巧な技巧を構成することもあるのです。

川柳雑誌社の事務所が杭全町の緑雨さんの自宅にあった頃のことです。発行日前になると編集部員は、彼の家へ寄つてきました。彼は馳けつけてきた柳人へ持前の口調で「君はこれや」と仕事を突きつけ、汗をふく間も、茶をすすする間もありません。それでも誰も文句は言いませんでした。言葉を飾ることを知らない彼を知っていたからです。また事務的に動く彼を知っていたからです。この理解があればこそ、お互いに気まずい思いもせず、編集部は波風もたたずにやってこられたのでございます」(霞乃書簡)

緑雨は昭和四十五年四月十六日七十七歳で

死した。晩年は愛妻と愛嬢の死で川雑からすっかり身をひいた形だが、路郎を追悼し『川柳雑誌』の廃刊を見さだめて他界していった彼の感慨は、さてどのような追想があったことであらうか。

長男ロンドンンの死去、そして路郎も病氣入院、加えて松郎、馬行、刀三らの有力同人との訣別など、そのような鳴尾から昭和二年六月岸の里に移った。そして『川柳雑誌』も、この年八月号から同人制を廃し社友制をとり、賛助員、客員制とした。「合名会社が株式会社になったような形だ」と路郎は編集後記で述べている。

こうして講演に、川柳行脚に、新聞雑誌の柳壇の選に活躍する傍ら、川雑では川柳漫画を毎月とりあげ、その一つの『累卵の遊び』を刊行し、月評を毎月試み、社内漫談会を催しそれをまた『川柳漫談』と題して刊行したりした。この昭和三、四年のころには雑誌刊行の印刷費を捻出すべく『広告売社』(昭和四年・大阪文案社と改称)を興したりしている。そして昭和五年十一月には葎乃の父、河盛彦三郎の死去に遭うのである。

「不朽洞の大掃除が九月四日に行われた。この日から僕は階下の表六畳に移った。親のスネかじり時代、二階借り時代、居候時代は勿論のこと、一家の小さな主となっても階上でなければ落着けなかった僕が、階下に自分の部屋を持つことは、僕の生活様式の上に非

常な革命である」(川雑・S5・10月号・川雑編集後記)

「私が前号で階上生活から階下に移った事を報じたが、わずか一月足らずで再び階上生活へともどることにした。それは葎乃の父芦村翁が十月五日の夜、天下茶屋の某家で卒倒したため、階下の子供室が翁の病室にあてられたからで、僕の部屋が子供室になった関係からである」(同月号)

路郎の句にある

二階を降りてどこへ行く身ぞ

は川柳雑誌第三巻四号に載ったものだが、彼の二階好きは

見上げれば二階に椅子の端が見え

の作品とともにこの頃の彼の心証や気分がよくにじみ出ている。

「昭和五年十一月十四日河盛彦三郎、堺の木綿問屋河内屋の外孫。ほとんど生涯を教育界のために尽す」(山南樓メモ)

「芦村翁の長逝について水府いわく、関西川柳社創設当時奮った人、文字の美しい謹厳な士であつた。半文銭から、僕も寂しい」との悼みの便りがあつた(同)

「路郎はその後(筆者註・S6年路郎44歳)たのまれて堺市民病院の事務長の職についた。当時の院長から「君は川柳の第一線を追いか、それとも事務長をやめるかどちらかハッキリしたらどうか」と膝詰談判を食ったこ

とがあつた。これは路郎が事務長としての手腕をかつての院長の要望だった。元より事務長の職はその頃の院長がむづかしい人であつたので、路郎君ならうまくやつてくれるだろうと、さる人の紹介でなつたのだから、強いとかじりついては文句をいうもよかつたし、何時やめても家庭では文句をいうものもなかつたから「それだったら今日限りやめます」とあつさり答えたので、あての外れた院長は「まあそういうわんで」とよりを戻しにかかつたことのあるのを憶えている。

院長は或日、お供を連れて私の家へ訪ねて来られて私に「こんな家に住まなくても、もつとよい家へ住めばよい」と暗に事務長の職に本腰を入れるなら優遇するぞといわんばかりの色気をほめかして帰られた。私は万事路郎の意志の働く範囲で暮らしているのだから、院長の親切は唯聞き置く程度ですましていた。病院へ帰られた院長は「あの妻君、馬鹿か」とあたりの人に言つていられたそうだが、人間は馬鹿と言われる位気持の楽なことではない。利口に見えるために苦勞したり煩悶したりしている人が世間にどれほど沢山いることか。路郎は生きたがための職業と、川柳とを天秤にかけて常に均衡を保っているが、どちらを選べと言えば、一も二もなく川柳と答えるであらう」(川柳雑誌三六・古稀特集・麻生葎乃)

# 愛染帖

## 波多野五楽庵選

和歌山市 桜井 千秀

現状把握あとと白ける挫折感  
光と影両面背負い生き延びる

ことのついでに言うて抜き差しならぬ羽目

和歌山市 吉村さち子

そして冬 未完の画布に降る氷雨  
たのしみが続いて輪から抜け出せず

富田林市 池 森子

自爆などするなと蟻もテロリスト  
拉致のかたちして花嫁になった

青森県 西谷 大吾

限りなく貧しき村に雪積る  
突き進む吹雪の果てに雪菩薩

大阪市 浦田 綾子

佐保姫が誰何わたしと風花に  
煮こごりにおよそ遠かな悟達妙

和歌山市 木本 朱夏

哲学者の顔する一枚の木の子  
思ふまじ男の胸の広さなど

弘前市 斉藤 姁

逝く友へなんでなでんと冬母

割り切れば風の色まで見えそうで

弘前市 高瀬 霜石

古傷に触れぬ友情ものがたり

指切りの指につけたリトマス紙

東京都 やまぐち珠美

清濁を飲んで眉毛を下げていく

雪にすらなれず温みを残す雨

美祿市 安平次弘道

無為徒食ままよ唄でもうたおうか

言ひ訳にしては話が長すぎる

尼崎市 田辺 鹿太

核心に触れると閉じる仏の眼

振り返るたびに未来が淡くなる

藤井寺市 太田扶美代

他人の死たぶん短い通り雨

命残照 静かな権の音をさく

弘前市 宮崎ヒサ子

プライドをなだめすかして病んでいる

温暖化だらうか微熱下がらない

藤井寺市 高田美代子

猛吹雪 風の死ぬのを待っている

正誤表つけて娘を売りに出す

鳥取市 夏目 一粋

鍵のない個室 海のような娘

鳥取県 樋口 輝夫

吉田孔美子

弘前市 高橋 岳水

平凡も非凡も春の夢を追う

米子市 澤田 千春

湖底から今も聞えるコンサート

和歌山県 福井 桂香

オカリナの穴から宙に呼びかける

八尾市 高杉 千歩

急ぐなと私の影がささやいた

黒石市 相馬 一花

積年の恨みも流すところろ汁

松江市 三島 淞丘

蟹の穴ほどの望みは持っている

鳥取県 西原 艶子

新年へ涙袋は閉じたまま

熊本県 高野 宵草

人形はキチンと座る背を伸ばす

富田林市 片岡智恵子

土壇場にきてへそくりのひといくさ

西宮市 西口いわゑ

千本のばらのテロなら甘んじて

高槻市 乙倉 武史

完璧を求めて苦勞ばかりする

和歌山市 西山 幸

鬼やらいのひとりぼっちの豆を撒く

尼崎市 長浜 澄子

葛藤は面に出さぬ朱い薔薇

和歌山市 武本 碧

校門の自負が甘えを許さない

鳥取市 福田 登美

虚飾捨て素顔の友に恵まれる

冬木立の気つぶに及びそうもない  
森 西

不発弾抱いて女の冬に入る  
奈良県 渡辺 富子

静寂で美しすぎるいくさ跡  
泉佐野市 稲葉 洋

忘れたい過去落丁にしておこう  
高槻市 田中 初恵

ライバルも僕も所詮はあとわずか  
高知県 桑名 孝雄

ポケットがたくさんあって物忘れ  
松江市 津川 紫晃

水仙の化身だろうか好きになる  
堺市 和田つづや

春風を掴んだ影が走り出す  
京都市 都倉 求芽

自画像をナイフで刻む×印  
京都府 丹後屋 肇

ぼたん雪 詩人もときになる私  
枚方市 海老池 洋

輪の中にも出る杭折れる杭  
四条畹市 吉岡 修

急ぐまい夫婦二人の縄電車  
高知市 小川てるみ

ジェラシーをグラスに溶かし一気飲み  
大阪市 三浦千津子

言い訳もあるが沈黙していよう  
横浜市 近藤 道子

三ヶ日終えて時計が回り出す  
大阪市 神夏磯典子

男一匹支える女一匹よ  
竹原市 正畑 半覚

菜の花の便りに浮かれそうになる  
米子市 青戸 田鶴

変身はしても蛙は蛙の子  
岡山市 井上柳五郎

冬眠もしてはおれない雪を掻く  
弘前市 富士 慕情

にんげんを続けています達者です  
大和郡山市 坊農 柳弘

ハチ公の前だも少し待ってみる  
堺市 志田 千代

ちびりちびりと昔話の出るコップ  
倉敷市 井上 富子

ゆく年の空気ですと向かい合う  
西宮市 牧淵富喜子

幸福の形を決めてあがくなり  
東京都 播本 充子

補聴器を外すと空が澄んでくる  
札幌市 三浦 強一

君側の奸を裁いたコップ酒  
唐津市 仁部 四郎

奥底で一喝がきく父の文  
倉吉市 山中 康子

さむざむと思惑はずれ霧の中  
米子市 林 瑞枝

残照の影が織りなすアラベスク  
高槻市 左右田泰雄

母の掌の春へ演技のさくら餅  
弘前市 岡本 花匠

長椅子の端は半身苦行かも  
弘前市 蒔苗 果林

凡人の有の字無の字でまた迷う  
和歌山県 辻内 次根

ご免ねが言えず時どき波が立つ  
大阪市 町田 達子

プライドが傷つきやすい赤いバラ  
鳥取市 岸本 宏章

鮎玉の一つが話題になる入歯  
唐津市 坂本兵八郎

絵に画いた猫にも告げるいい話  
寝屋川市 太田とし子

一本の藁を掴んで生きのびる  
西宮市 門谷たす子

贖罪をこめて主導の大掃除  
横浜市 保田 絹子

妥協する腹で時間は惜しまない  
弘前市 相馬 銀波

大切な絆を畳む春の距離  
和歌山県 松原 寿子

飯の世をきれいに舞うて果てんかな  
岡山県 山本 玉恵

雪しきり幸せはるか亡母はるか  
富田林市 中井 アキ

押し入れにひっそり過去がうずくまる  
米子市 光井 玲子

良い顔の妻で居るのも疲れます  
箕面市 出口セツ子

汚点でしかない画をかいて冬が来る  
交野市 田岡 九好

度忘れの数だけ辞書につく手垢  
松原市 玉置 重人

ふところの広さへついてゆく女  
今治市 塩路よしみ

現実はいきびし夕餉の皿の数  
松原市 小池しげお

男には涙の武器は使えない  
鳥取市 美田 旋風

カロリーの無いのが隅でよく喋る  
鳥取県 武田 帆雀

腹の虫だけが知ってる今日のウツ  
横浜市 田中 笑子

今年こそかけ間違いはせぬボタン  
愛媛県 花岡 順子

家族みな合鍵持ってすれ違い  
大阪市 本間満津子

つんのめるほどの早さで来た傘寿  
唐津市 久保 正剣

手心えが充分あった裏の金  
香川県 松村 輝夫

ポツクリと逝けるカタログ見あたらず  
香川県 松村 輝夫

自己主張すればするほど疎外され  
香川県 松村 輝夫

やんわりと風を躲して円く住む  
和歌山県 中後 清史

知つても知らん顔する処世術  
武蔵野市 亀井 円女

落選を重ね挨拶まめになり  
唐津市 山口 高明

札束を見るとふらつくヤジロペー  
和歌山県 青枝 鉄治

留守番はするめと酒と亭主殿  
出雲市 伊藤 玲子

一豊の妻を気取るが貯らない  
横浜市 秋元 和可

駒子には出会えなかった旅籠  
吹田市 岩屋 美明

よく笑う大から順に売れていく  
倉吉市 牧野 芳光

半歩退く君より少し大人です  
堺市 矢倉 五月

福耳が明るいコント未だ書けず  
和歌山県 楠見 章子

準備した椅子に収まる天下り  
豊中市 櫻谷 郁子

今度こそ今度こそはと裏が立ち  
倉吉市 米田 幸子

若ものの街でてにをはが痒い  
和歌山県 古久保和子

大小のあくびを積んだ終電車  
大阪府 澤田 和重

八十路ゆくまるで延長戦のごと  
香川県 木村あきら

迷わずに生きたらさぞや楽だろう  
大和高田市 鍛原 千里

幸せは少しの金と本がある  
鳥取市 春木圭一郎

肅々と冬来て闇が追ってくる  
尼崎市 春城武庫坊

姉よりも不仕合せだと言いつのる  
尼崎市 春城 年代

弱々しさが何とも言えぬ魅力です  
鳥取県 さえきやえ

福耳が迷惑そうなイヤリング  
藤井寺市 中島 志洋

石の上三年耐えて桃の花  
和歌山県 上地登美代

封印をした思い出が首もたげ  
大阪府 初山 隆盛

熱爛になつてお開きだと気づく  
池田市 栗田 久子

除夜の鐘やっぱり仕舞風呂になる  
唐津市 市丸 晴翠

まだ少し女でいたい雛飾り  
羽曳野市 徳山みつこ

お年始に雪もお世辞もついていく  
八尾市 村上ミツ子

しがらみが追つて来るるまだ六十路  
鳥取県 竹信 昭彦

才能の有無へ咲く華 咲けぬ華  
香芝市 大内 朝子

情報が多過ぎ本質見失なう  
大阪市 板東 倫子

澄んだ目の少女に背筋叩かれる  
愛媛県 中居 善信

助走路の石を拾ってくれた母  
宇部市 平田 実男

# 誹風柳多留二四篇研究 52

橋本 秀信・粕谷 長生  
山田 昭夫・伊吹 和男  
大野 秀二・小栗 清吾

清 博美・佐藤 要人

## 401 品川のげびにハつらがしゃくんでる

橋本 下卑は下劣で卑しいこと。またそのような人。しゃくむは、中央の部分がくぼむ。凹面形になる。しゃくれる。多く顔面にいう。(以上「日国」)

品川の遊女を詠んだ句。品川は東海道最初の宿場で、また吉原(北廓)に対し南里と呼ばれた遊里(岡場所)であった。ここでは、飯盛という名目で、女を二人玄關の杉戸に立たせておき、実、中には何人かの遊女を抱えていた(陰見世)。官許の吉原に劣らないという蟲眞の句もあるが、吉原と比べると歴然と差があるとした句が多い。この句、品川の品な女は、顔がしゃくれて、見られたもの

でないとする蔑視の句。

みめよからざるを杉戸へ立かける 一三四  
がらくたを品川見世へ出して置き

安九仁 4

本宿は杓子を二本見せておき

紫山室二 91

粕谷 賛。「しゃくんでる」に「杓子(顔)」の意は含められないか。

大野 賛。背景に能面の曲見もあるか。

小栗 賛。「中高」の反対。

清・佐藤 賛。

## 402 鰐口へずつともつてく十五日

橋本 鰐口は社殿・仏堂前の軒下に吊す金属製の具。下方に細長い口があり、参詣者は、

布で編んだ綱を振り動かして打ち鳴らす。(「広辞苑」)

十五日にはいろいろな意味があるが、この場合は十一月十五日の七五三の宮参り。

子供を連れて神前で拝むとき、少しでも多く神様のご加護が授かるようにと、その子を差し上げて鰐口へ近付ける光景で、類句3も同じ。特定できないが、子供は三歳(髪置)の初参りであろう。

鰐口ハ物名代に乳母た、き

五一 31

抱ながら乳母鰐口をた、かせる

一二六 22

鰐口に吞せるやうに子をもちやげ

一二六 26

清・佐藤 賛。

## 403 浅めらがふざきあがると遣り手いゝ

橋本 浅黄裏は吉原で招かれざる客。「浅黄めが大勢揚がつて、ふざけていやがる」と、怒っている遣り手の言葉。

清 招かざる客は、磯橋の筆の走り過ぎか、たとえ不粋な浅黄裏でも御客は御客。いい収入源だったはずである。粗野で野暮な浅黄裏は遊女には持てず、遣り手には軽くあしらわれたが……。

佐藤 賛。

404 どちらのかき秋はどつどつ上るなり

橋本 かさは、この場合は嵩で、嵩高、嵩上げなどという、容量、数量のことと思う。

吉原通いにうつつを抜かすどら息子。殊に秋は、七夕（7月7日）、八朔（8月1日）、名月（8月15日）、後の月（9月13日）と紋日も多いので、費用も倍かかる。ゆえに、ドラ殿の出費も急増するのである。

十五両十三両と二度のどら 安四亀一

のきのとうろ二度の月に金がいり

一八二五

いつち貰ひにくいが秋の女郎也

宮二三五

清・佐藤 賛。

405 ふさつてゝをねばをとつてくんや

橋本 臥さるは、①臥す。寢床に入る。寝る。

②うつぶせになる。伏す。おねばは、上野寛永寺、護国院の大黒湯。「毎歳正月三日ハ諸人東叡山護国院の大国天へまうつ。（中略）此日供物の鏡餅を湯にひたして参詣の輩にあたふ。俗是を呼で御福の湯といふ。」（江戸名所図会）

自堕落に寝つ転がつたまま、「大黒湯を取

つてくれ」と言っている、正月三日の情景。谷中いろは茶屋の安女郎だろう。相手は常連の山内の僧か。一般の人は、竹筒に少量を賣

つて帰るのだが、類句3にあるように、宿坊の僧は馴染みなので大量に届けられる。

むこがおきてもづゝとふさつてゐる

安九松3

いろは茶屋大くの湯がやくわんで来

二一七

清・佐藤 賛。

406 不届さ昼寐の顔へ論語当て

清 「論語」は、孔子の理想的道德の意義・政治・教育などの意見が述べられている大立派な本。それを事も有るうに昼寝の顔の明

るさ除けに当てるとは言語間断。雑ツな事論語をかぶり昼寝なり

傍五三〇

という句もある。

橋本 賛。

うた、ねの顔へ一冊やねにふき

五二

の情景。

佐藤 賛。

407 なんの因果に大名に請ヶ出され

清 因果は仏語で原因と結果の意。「なんの因果」は、別に悪いこともしていないのにどうした訳か、或いはどういう巡り合わせか、というほどの意に解せばよからう。

句は、吉原の遊女が望んでもいないのに、どういう巡り合わせか大名に請出されてしま

った、というのである。となれば、仙台侯に請出された高尾の偽らざる心境ということになる。

しほくと請出されたは高尾也

九ス一〇

大門をないて出タの高尾なり

天二八五

佐藤 賛。

408 しづうかな所コで仲条時行なり

清 「時行」は流行ると読む。

産むことのならない嬰兒は秘密裏に処理する。その処理を専門にするのが、仲條流の女

医者。墮す女も秘密裏ならば、女医者も本道ではない。人目を忍んでの商売、これがまた結構忙しく流行るのである。

中条へゆくよりほかの事ぞなき

末四二七

橋本 賛。中条は人目の立たぬ裏通りにあった。

仲条ハは入り勝手を三所あけ

二〇二〇

佐藤 賛。

# 荀香のむ

政岡日枝子選

今ドアを開けねば的を見失う  
ボクにないものを持つてる影法師  
方針を変えて一日花といふ  
少しだけ欠けた茶碗に盛るドラマ  
一点のブラインド凍として薔薇よ  
うしろ姿見ないでおこうお互いに  
無から無の命へ騒ぐことはない  
この彩に老いてみたいな草木染  
一抜けたカゴメの輪から寒い風  
軽い靴今日の運勢など忘れ  
一病をふっと忘れる花が咲く  
癒されて愛の歯車まわり出す  
姿見もそろそろ老いが来たようだ  
異次元の鉛筆だろうEメール  
澄んだ瞳がボチボチ濁ってきて大人  
北風も少しやさしくできないか  
蜘蛛が咲いてあの日を呼び起す  
怪し気な方向いている道しるべ  
鍵穴の向こうは湯気が立っている

和歌山市 武本 碧  
藤井寺市 高田美代子  
西宮市 西口いわゑ  
和歌山市 古久保和子  
富田林市 池 森子  
米子市 青戸 田鶴  
富田林市 中井 アキ  
藤井寺市 太田扶美代  
八尾市 宮崎シマ子  
東京都 播本 充子  
香芝市 大内 朝子  
和歌山市 松原 寿子  
和歌山市 西山 幸  
吹田市 山本希久子  
和歌山市 福井 桂香  
八尾市 村上ミツ子  
西宮市 牧瀬富喜子  
倉吉市 野口 節子  
大阪市 神夏磯典子

ひとすじの道だと決めて終身刑  
ずっと昔昨日のような過去がある  
爪先が痛い背伸びをしすぎたか  
距離おいてみな有難い処世術  
ハードルの高さにしかと眼をあける  
ワツと春 合唱をしてシクラメン  
窓明かり昨日よりまた春近く  
お寺さん少し弾んでいませんか  
暖かく積ってよ雪 亡天ねむる  
屠蘇の和に大も入って平和だな  
病気じやないわそれで自然よ皆そつよ  
マニキュアをするから目立つささくれよ  
よく歩いた頃は無かった万歩計  
織田作の歩いた道だ目刺し焼く  
秒針が開き直った古時計  
カサブランカ夢に見てますバグマン  
駐輪場ちゃんと並んだ三輪車  
ロボットが慣れて人間くさくなる  
少しずつ昔放してかくなる  
まわれ右すればなんとかなる悩み  
押入れにいっぱい溜める不用品  
待つ人のある留守番は温い  
長話やカンの笛に吠えられる  
ドル高でダシもだんだん薄くなる  
七度目の春もう迷わないひとり旅

米子市 白根 ふみ  
大和高田市 鍛原 千里  
西宮市 門谷たず子  
八尾市 高杉 千歩  
米子市 澤田 千春  
羽曳野市 徳山みつこ  
米子市 木村 春枝  
松江市 川本 畔  
豊中市 櫻谷 郁子  
大阪市 鈴木トヨ子  
大阪市 本間満津子  
尼崎市 春城 年代  
富田林市 片岡智恵子  
米子市 林 瑞枝  
寝屋川市 太田とし子  
海南市 堂上 泰子  
大阪市 大川 桃花  
大阪市 川久保睦子  
米子市 中川 ゆき  
和歌山市 上地登美代  
和歌山市 福本 英子  
米子市 木村富美子  
藤沢市 妹尾 安子  
アルゼンチン 松井美稚子  
鳥取県 ささきやえ

福の神いそう笑いの輪に入る

遠い日があるモノクロの風景画

私には非はないという思い込み

燃える絵を火種があればまだ画ける

好きならば距離を置けよとバラの棘

生傷をこよなく愛す百獣よ

恐いもの見たさにメール探つて

知恵の輪がとけたか今日は字が踊る

雪よりも白いところで老いたいね

控え目へはつきりさせておく自信

マフラーをかけてあげたい冬木立

ひもじさも寒さもなけど喜寿孤独

聞こえないふりで抵抗しています

松の内明けてビックリ体脂肪

かまいすぎ親をリストラされました

もう春が来ました路の臺の味噌

楽しみのひとつと迷う試着室

美人ではないがわたしは声美人

あのころはまめに書いたなラブレター

用心して産地見る癖ついちゃった

あせるほど思う壺には吹かぬ風

ドクターに触診される皮下脂肪

大切な相談に夫の声を聴く

甘酒の湯気に思い出包みこむ

ばあちゃんの子育てうける幼稚園

香川県 川崎ひかり

和歌山市 吉村さち子

三田市 久保田千代

大阪市 小泉ひさ乃

奈良県 渡辺 富子

松江市 安食 友子

藤井寺市 鴨谷瑠美子

岡山県 山本 玉恵

今治市 塩路よしみ

和歌山市 桜井 千秀

横浜市 近藤 道子

八尾市 中島 春江

横浜市 芦田 鈴美

横浜市 川島 良子

箕面市 出口セツ子

鳥取市 福永ひかり

鳥取市 岸本 孝子

米子市 池尾 保子

和歌山市 田中 みね

熊本市 岩切 康子

堺市 西村りつえ

鳥取県 土橋 睦子

高槻市 田中 初恵

和歌山市 松尾 和香

倉敷市 撰 喜子

花言葉信じて丸い声になる

何気なく覗き込まれた胸の内

出し惜しむたつた五文字のアリガトウ

反省が箱の中から溢れ出す

中味見て喜怒哀楽のお年玉

任せても見守るだけがまた辛い

イエス・ノー明るい舌で濁らない

散歩道さん花絨毯ふみまじく

お守りとして風邪ぐすり貼りぐすり

一枚の賀状が月日捲き戻す

無為無策独り歩きをする言葉

印象も風紋のごと移ろいぬ

火種困つて北風と対峙する

課外授業千らの素敵な知恵に会う

れんこんの穴からテレビ見てる孫

アリバイのための日記をつけている

碧さんの句ーどんな的だろう。 的の中味は何だろうと想像が膨らむ。作者

のはこ先は何に向けているのだろうと、また想像が膨らむ句である

と思う。美代子さんの句ー影法師と言えば、屈辱をぐつと呑み込んでくれる

袋を持てていると思いがちであるが、視角を変えて影法師を見つめると、

重々しいものではなく明るい笑顔が見えてくる。いわゑさんの句ーこの発

想の転換に自分の時間を作り出した作者に拍手を送ります。方針を変える

という極めて難しい日常の中でのこの風景を大切にしたい。和子さん

の句ー一般の認識から少し深い、欠けた茶碗に迫力と真実感に打たれる。

この句の命と思う茶碗にどのように味付けされたドラマが盛られるか、ド

八尾市 田中トシエ

池田市 栗田 久子

鳥取県 石谷美恵子

米子市 足立由美子

羽曳野市 濱口 フジ

大阪府 小栢こずえ

倉敷市 井上 富子

大阪市 星野きらり

寝屋川市 平松かすみ

尼崎市 長浜 澄子

出雲市 園山多賀子

横浜市 保田 絹子

鳥取県 岩崎みさ江

愛媛県 黒田 茂代

今治市 野村 清美

大阪府 米澤 俣子

# 止める

野下 之男選



別れ道好きと言おうか止めとこか  
孫だけが親父の頑固止めている  
黄信号止まらず走る関西人  
若鮎の夢はどなたも止められぬ  
どこ押せば止められるのか株グラフ  
血糖値グルメの友を遠去ける  
小細工は止めて真つ正面の汗  
負け犬の足天神さまで止まる  
合掌の如くに止める蝶の翅  
繰り言を止めて法話に正す膝  
やりかけてもう止めること考える  
林道を通せんぼした白い魔女  
息止めて取った電話が人違い  
突つ走る駄馬を止めるは母の綱  
努力してやつと射止めた玉の輿  
背のびして生きてくなんてもう止そう  
焼香に順じのない爽やかさ  
近道を選れば工事の行き止まり  
愛された時で止めたくなる時間  
戦いを止めぬヒト科のDNA  
ブライドが言葉止めてる喉仏  
両親の愛は溢れて止まらない

洞 庵 た え (田) 章 子 修 史 清 史 扶 美 代 岳 水 四 郎 ミツ子 みつこ 初 恵 志 華 子 恭 昌 俣 子 松 煙 一 知 セツ子 あずま ゆきの 郁 代

忠実な課長じまりの父でいい  
恋をした娘にブレイキは効かぬ  
饅頭へふと手を止めた血糖値  
駅裏で飲む一合の痛み止め  
自画自賛太鼓打つ手が止まらない  
行き止めの柵を拒んだ青年期  
悲しみを止めてあしたへ指鳴らす  
うろたえる顔が見たくて立ち止まる  
現実が夢のメジャーを止めさせる  
ふたあたりが止まると月も歩を止める  
私で止めた噂を持て余す  
止めたつて無駄さ若さが翔んで行く  
止め金は錆びたが夫婦しています  
ヒソヒソの話を止める通夜の席  
立て札が犬の散歩に意見する  
佳  
虫ピンで止める私というかたち  
口止めの話に尾ひれつく噂  
終章は真っ白にして止めを打つ  
咳止めのアメがご縁となる句会  
大国に口止めされているらしい  
人  
ゲンコツと僕の間に母がいた  
地  
急ぎ足止めて余生はどんぶらこ  
天  
禁酒禁煙誓った穂は弾まない  
軸  
止め男居なくて独り天狗さん

隆 盛 シマ子 善 信 美 明 さち子 邦 昭 玉 恵 (花) 順 子 章 司 哲 男 あずき 徳 三 孝 雄 愛 論 伊 津 志 志 重 正 雄 大 吾 朝 子 保 州 兵 八 郎 慕 情 高 瀬 霜 石

# 極める

羽津川公乃選



道一つ極めて口が重くなる  
究極の選択をした曲り角  
極めたら内助の功が光つてた  
究極の愛の美学が軋みだす  
頂上を極めるリュック置いてある  
青空の果てを夢見て竹とんぼ  
苦しみのはてに輝く匠の名  
繁栄を極めたのれんピンチ来る  
頂上を極め奈落も知る男  
剣の道極めた武蔵どこへ行く  
やりくりの奥義極めた自負がある  
銘柄をびたりと当てている酒仙  
ノーベルが認めてくれた作業服  
カルチャーを極めつくして達者なり  
芸の道極める魔法などは無い  
心技体極め国技の綱を張る  
目を入れる技に極めた筆の先  
究極のうまさに白くにぎりめし  
これでよいのか幸せの極めつけ  
極めても母の笑顔に負けている  
糖漬の味を極める母がいる  
極めた額の羊が歩き出す

春 雄 洋 介 重 人 さち子 みつこ 彩 子 俊 子 雄 々 庸 佑 主 一 郎 尚 士 一 花 勝 視 保 州 雅 城 ひかり さと美 登 千 里 東 吉 典 子

六十の手習い淡々と極める

孔美子

二十年かけて盗んだ水加減  
道を極めて仏の顔にたどり着く

(花)順子

佃煮の味を極める手間の数

伊津志

少年の進路極める滑走路

愛論

てにをはの一字先達軽くふれ

四郎

一流と二流を分ける汗の数

霜石

百歳を極めて神に近くなり

美代子

人間の道を極めて残すものはなし

半覚

道楽を極めて残すものはなし

大鯨

墨壺の糸が極める匠技

柳弘

貧と富の極み地球は一つでも

あずき

一芸を極めて灰汁から抜けたひと

俣子

学問の奥義極めて来た虫だ

たず子

生きざまを極めてさくら潔し

佳

肩書きを極めた人の凡夫ぶり

登美

血の滲む道を極めて来た腕だ

妻子

奥義まで極め大花と向かい合う

照子

日本の四季を生きてる美の極み

朝子

叩かれて極めた釘の打ちどころ

一風

武を極め文を極めて無職たり

正剣

川釣りを極めて鮎にまた戻る

宏章

豆のつる夢を極めるまで伸びる

天

真相を極める拉致に立ち向かう

軸

福士稟情

福士稟情

除く

細川 稚代選



正直を除けばなにも残らない

(5)三郎

熟練の軍手が除く肩りんご

慕情

なにもかも除いて弥陀の掌に帰る

鐘造

癖のある酒を除いて三次会

三喜夫

夾竹桃除けぬ嘆きヒロシマ忌

みね

リストラへ除くに惜しい人もいる

三代子

本筋を通したために除名され

洞庵

除雪車が闇を切り裂く午前二時

一壺

警報解除みんな見上げた青い空

大吾

雪下ろしに試練の風物詩

(備)輝夫

恥をかく場面に利かぬ削除キー

隆盛

トラブルを除くと優しい風動く

次根

結局は除くでなかった年賀状

愛論

末席の光る意見は除かれぬ

悦男

勇退という名で職場除かれる

庸佑

一輪のために刈り込む花鋏

雄々

炎すえて痛み除くという熱さ

倫子

一年の煤を悔海の掌で払う

あずき

わたしから笑くは除けば木偶になる

敏子

名簿から除き哀しさこみ上げる

岳水

名簿から除き哀しさこみ上げる

清史

のけものにされて淋しいちぎれ雲

丹念に小骨を除く離乳食  
雑念を除くと空が澄んでくる

出来不出来除く子のない母の胸

お互いに灰汁を除いた夫婦仲

知らぬまに除かれていた出勤簿

窓きわへ僕の机が移される

やすらぎへ妬心を除く数珠をくる

輪に一人異端者が居て除名する

この世からやがて除かれゆく運命

不安一つ除くと胸が軽くなる

邪心すばり除き静かに肩を抱く

字余りの一字を除く難かしさ

温みある除外規程で返り咲く

母さんを除くと丸い絵が画けぬ

佳

肩書きがとれると味のある男

私を除くのですか但し書き

一本を育てるために間引かれる

歳月が恨みつらみを取り除く

灰汁を除くと善人になるわたし

過去一つ除いて女決意する

人

削除キー再び会えぬ住所録

写経百巻心の傷を取り除く

軸

除かれた理由は誰にも話せない

俣子

尚士

富子

志華子

東雲

千里

重人

朝子

彰雄

荻

玉恵

活恵

鉄治

碧

充子

保州

(志)千代

和重

美代子

人

さち子

地

たず子

天

宮崎シマ子

# 初歩教室

題一 座る

三宅保州

一月号で述べた私の「作句の基本」十カ条のうち、「誤字、脱字をしない——辞典類を活用する」ということは作句に際しての最も基本的で大切なことです。大会や選者によって、誤字、脱字があるのみで佳い句であっても没にされることがあるものです。それだけではなく抜かれても選者、編集者、印刷所等にも迷惑をかけることにもなります。これらの誤りは、何も初心者のみでなくベテランの方でも書き損じなどはよく見かけるものです。作句のときや、推こうのときにもう一度見直したり、辞書で確かめる習慣を身につけることを心がけるようにしましょう。

それから、川柳は平易であるという特徴を守るために、漢字は原則として常用漢字のみを使うことを念頭に置きたいものです。そうは言っても常用漢字にないからひらがなにするとどうしても意味が通じにくいとか、しつ

くりしないとか必然性のある場合はやむを得ませんが、ただ無意味に難しい漢字を使うのは如何なものかと思えます。

特に、よく誤用されている一例をあげると、

「何々の事」というときの事は「何々のこと」

が正しく（事柄、事件など名詞的な熟語は漢字）

「何々の為」というときの為は「何々のため」が、

「何々の迄」の迄は「何々まで」が、

「尚」は「なお」がそれぞれ正しいものです。

辞典では、×印、▲印、△印などが表示されている字は、常用漢字外や常用漢字ではその音訓で読めないものです。

ワープロやパソコンでここに述べた例の文章化を打ち込むと通常は常用漢字を重視した字の、例えば何々のこと、何々のため、何々まで、なおのように表記されるものです。

また、常用漢字と現代かなづかいのお手本としては新聞の記事、教科書、役所の公文書などが参考になります。

要は、思い違いや書き間違いをしないこと、原則として常用漢字を使い、現代かなづかいで平易に作ることを心がけるのが、作句の第一歩だと思えます。

【添削句】（原は作者の作った原句、添は私が添削した句です。）

原 席があくブライド邪魔して座れない こすえ

中八音字はリズムが悪くなります。

添 空席があるのに座らない矜持

原 飲む程に心落ち着き目が座る 稔

目が座るのは心が落ち着くからではないのでは。目が座るは、本来は据わるです。

添 百葉の長も過ぎれば目がすわる

原 座をつめて知恵結集のあせる顔 美恵子

少しわかりにくい。視点を変えてみて。

添 どの席が空くかは拳動からわかる

原 コンビニへ座りこんでる男の子 綾乃

「そうですね」川柳。女の子も座っている。

添 座り込みしているようなジベタリアン

原 座るのは温和な態度落ち着き 郁代

あれもこれも詠み込みぎくしくやく

添 まあ座りなさいとますは落ち着かず

原 主婦の座は磐石として三十年に ゆきの

「三十年」は動く、視点を変えてみては

添 主婦の座も磐石とは限らない

原 主婦の座を降りて豊かに古稀習う 栄呼

「古稀習う」は文法的に無理。

添 主婦の座を明け渡しても趣味がある

原 正座して三つ指突いてよろしくと 文江

そのとおり説明しすぎ。

添 三つ指をついてたころもあつたのに

原 もしもしによく見やり座席間違えた 孝明

ユーモアを生かして視点を変えてみると。

添僕の指定席に美人が座つてゐる

原座る場所ひらめくことあり癖になる 大 鯉

意味がわかりにくいのでは。中八音字。

添行きつけの喫茶に僕の指定席

原座るなり説教つぶて飛んでくる 敬之介

「説教つぶて」という熟語的表現は無理。

添まあ座れと言われ説教長くなる

原シルバー席座るか迷う六十路すぎ 嘉 彦

着想は良いのですが説明しすぎ。

添シルバースーツ何歳からと書いてない

原立ち話庭石そつと腰を呼ぶ 節 子

「そつと腰を呼ぶ」は表現が奇抜過ぎる。

添庭石に座つて友と話し込む

原美人跡座つたぬくみ乗り過ぐす はじむ

あれもこれもと詠み込みすぎ。視点変えて

添私が座ると席を立つた美女

原黒はつけず二時間は座る 和 友

句意がわかりにくいのでは。

添座り続けたしびれに負けて譲歩する

原針仕事で生きた母の座りダコ 満 子

リズムが悪いですね。

添苦勞など見せない母の座りだこ

原高い椅子座ると誰も背を反らす 昌 鼓

添頂点の椅子に座っている背伸び

原怪我も良い座つて指図偉くなり 芳 江

添怪我を口実に座つて指図ばかりする

原大臣の席に座った心地よさ

添大臣の椅子に押しピン置いてある フ ジ

原阿弥陀堂自然と正座してしまふ 弘 之

添御仏の前では端座してしまふ

原足しびれ胡座をかいて聞くお経 邦 造

原正座するしびれに法話も耳の外 ヨシ枝

原しびれてる足を肴めて聞くお経 照 彦

この三句はいわゆる同想句です。この域を超える発想と表現を目指しましょう。

仏壇へすこし崩しいです 小西幹斎

氣に入つた時間しびれるほど座る 広瀬啓子

「少し工夫すれば佳くなる句」

その事実や状態のみを詠むのではなく、それに対して作者はどう思うのか何を訴えたいのか、作者の存在感を示すあと一工夫いたなければ佳句になる句を列挙しました。

原いすの上に胡座をかいて鍋つつく 時 雄

原若者に席を譲られ年を知る 勝 久

原川柳誌開けば猫も来て座る 利 子

原結局は二番手が出て後釜に 九 好

原良い席に座れば前にでかい人 忠 子

原遅刻して上座の一つ空いており 初 恵

添上座の一つが空いている遅刻

原四世代揃つて座る初春の膳 幸

その幸せを単に詠まずアクセントがほしい

原おもちゃ屋の前で買うまで座られる 武

原離婚して帰れば座る場所がない

原控えめな人と同席座が和む 秋 星

原座り方人それぞれの色がある 千 華

原おばあちゃん座ると猫が寄つて来る 輝 夫

【佳句】

語らずに耐えた証の座り胼胝

日だまりに動かぬ祖母の座りだこ

お座りも伏せもできると犬自慢

初曾孫無理に座らす祝い膳

ふるさとに私の座る場所がある

居眠りを怖れて座らない電車

頑なな姑さん椅子に正座する

座るのも苦行と知つた禅修行

座るなら美人の横とまだ思う

人形の顔で座つて小言聞く

正座して弁解してももう遅い

蟻の列ジベタリアンが踏んづける

老人に席を譲つて叱られる

借りてきた猫でまあるく座つてゐる

福の神の座るところは空けてある

【今月の推せん句】

もう一度座り直してからの愚痴

座高ならまだ父さんも負けてない

【私の句】

経あげたあとの座布団好きな猫

座りたいときもあろうに銅像よ

秋 星

弘 子

千 華

輝 夫

敏 子

好

登志子

円 女

栄 子

安 子

像 山

章 司

重 之

清

侑 子

恵 勇

真 一

美弥子

英 旺

准 一

鈴 美

# 秀句鑑賞

同人吟 宮西弥生

12月号から

川柳は絆である。ようやくその不可思議の

意味が理解出来る今日の私にも、紆余曲折の過去がある。長い仕事時代による空白と不振で川柳を志したもののその姿勢が振わず、私を苦しめた。私には陽の当たる場所はない、ならば川柳を止めようか、止めるのは何時でもよい、自分の初志貫徹はウソだったのか、等々の苦悩の闘いが続いた。それでも私には逃げ場所があるではないか、老後のたのしみがあるではないかと、悩みを癒される川柳へ一転、少し気持ちが軽くなった。私には川柳は仕事から逃げるためのものであっても、仕事の句は殆んどない。しかし今日では、天下泰平。自由に川柳と遊び、人の知恵をたべながら育ててもらえた。私にはああ川柳、そして川柳である。

子の居ない夫婦も金は貯らない

相馬 一花

子供の有無は関係がないのです。それだけ今の世は大変な生活です。国民みんなに負担が来るのです。

計算はびつたりなのに錢足らぬ

前田 一枝

家計を預かる主婦の悲鳴が聞えそうです。一円でも安値の店へ走る知恵は、時間と労力は考えずに、ひたすら家族の健康しかないのです。献身愛はきつとどこかで芽吹きがあります。ポケットをもう一度探してみても。

迷わずに歩いてゐるのは白い杖

門脇 晶子

不自由な身体だけに、ご本人は一層まわりに気遣いして、迷惑を避ける事を心掛けています。健全な我々ほもつと謙虚でないといけないと思います。頭の下がる思いです。

横歩き後ろ歩きで見た世相

城 多喜

横歩き、後ろ歩き、とはうまく表現したものです。人生の紆余曲折、作者には何が見えたのでしょうか。時には馬鹿にもなり、くさいものには蓋をして上手に生きていく方に違いないと思います。危険な奈落が多いこの頃です。御注意下さい。

本心が作り笑いの底にある

小野 克枝

素直に心を見せずに、先ず他人の動静を見てから動くというそんな人をよく見ますね。嫌な性格です。そして、作り笑いの底とはよく表現したものです。そこまで私は気付きませんでした。人間とは人の間と書きます。もつと軽く接したいです。

おとなしく終る羊の瞳ではない

藤解 静風

物もひとと甘く見えてはならないという、格言風な句で一瞬びくつとしました。

一見大人しく、そして優しく見える羊ではあるが、どうしてどうして、獐猛さは他者を寄せつけないと記されている。どうかこの一年景気回復と平和な年でありますようにと願わずにはおれません。可愛い眼からとてもそんな風には思えません。

円いから迂かつに折目つけられぬ

神保 坊太郎

人類の平和、これこそ永遠に私たちが希望する丸い地球なのに、あちこちでこづき合いの戦がどうして生れるのだろう。いたずらにも丸さを傷つけるなんて許されぬことです。この句もきつと心から平和を願っている叫びではないだろうか。

一生懸命生きてはるのに値切れない

稲葉冬葉

本当は少しでもお安い方が買つ側の希望で、口までぐいぐいと値切りが出て来ている。やはり欲しい方の負けで、手を打ってしまふのが私達です。それより作者の「一生懸命に生きてはる」という相手の思いやりに脱帽しました。何て優しい方よ。

八起き目を信じ倒れているダルマ

岩佐ダン吉

何度も何度も失敗を繰返しては、人生観もずたずたになるでしょう。

でも天は弱者を見逃しはしない。人間の生きざまを判断し救いの道を開くのです。人生の裏には同じ者達に通じる情と血が通い、そして生きる力を与えられます。苦しみは幸せのかけ橋で、世の中は本当にうまく動くものです。折角生命をいただいたよろこびを無駄にしては御先祖さまに申し訳ありません。

温い人に私も付いて行く

齋藤 さくら

相田みつをさんの詩を思い出した。あなたこそここにただいるだけで、みんなのこころがやすらぐ……云々。人間は弱者です。少しでも癒されるものを求めて、温い人に自分もなりたいたい、ついに行きたくなると。

生きて来たようにしか老い生きられず

片岡 智恵子

日本は世界一の長寿国になりました。命の延びた分青春時代も長くなったわけです。これまで無事に生きて来られた通りに行けばよいのではないですか。

ただ、ゆるんだネジに油を注ぎ、ゆっくりあわてずにテンポを変えられただけでよいのではないですか。老いを恐れずに、私は若い私はきれいと毎日叫ぶとよいと聞きますよ。

末席の意見はただの雑魚でない

奥村 五月

泰然自若と座す末席はきつと大物だろう。意外に目立ちたがりで駄弁家が上座を好むらしい。鋭い作者の視線が句全体をびりつとさせてさすがにうまい。

雑魚でない大物の意見が耳に入つて来そうで、一瞬しゅんとしたその雰囲気が見えるようである。

迷ったら祈る形で立ち止まる

木村 富美子

都会も田舎も最近複雑な町並みと化したものです。要するに目印が少なくなつたように思えます。特に方向音痴たる私はすこいものです。田舎道で迷ふは最悪。折つても、どうしても分りません。

男いっびき枯れても母を泣かさない

黒田 くに子

日本男児のお手本かも知れない。時代が変つてもやはりこうあつて欲しいと思うし、あらねばならないと思う。たとえ大物であつても母には弱く涙を見せる、決して女らしい姿ではない。この涙こそ家族を守り、国を守り、御先祖を守る姿である。

仏に借りて鬼に催促されている

海老池 洋

本当にこの句の通りです。作者はびしつと言い切りました。借りる時の重い足を忘れてしまふのでしょうか、それとも長い月日に忘れるのでしょうか。他人の善意を踏みにじつては人間ではありません。いつもにこにこ現金払いが一番ですね。

人間のゴミになるまい写経する

さえき やえ

崇高なまで清らかな生き方に、拍手を贈りたい。

ただ、五・七・五調でこんな素晴らしい句が生まれるのはさすがに川柳です。改めて見直しました。これからも長寿国日本が続きます。生き恥も結構ですが、粗大ゴミとなつて他人に迷惑をかけずに、きれいな老いの人生を過したいとつくづく思います。

水煙抄

秀句鑑賞

—2月号から—

高橋 岳 水

線香が立ち消える間の走馬灯

清水 英 旺

強い絆で結ばれていた故人に対する時、哀  
楽の過去が去来する。こ冥福を祈るや切

本格派の飲み手だ酒が生きている

桑 名 孝 雄

適量の酒はストレスをはぐしてくるし、  
善玉コレステロールを増やしてくれる。酒は  
たしなむもので、飲まれるものではない。

自分史の余白を埋める墨を擦る

原 賢

生涯現役の気概で生き抜きたいものだ。そ  
れには生きる証となる趣味を持ちたい。

ポランティア大きな愛の包装紙

西 垣 美知子

今日ほど、善意と無償の奉仕活動に期待が  
寄せられる時代は無かったように思う。お互  
いの信頼感を醸成する愛の輪を広げよう。

隠しても鏡はみんな知っている

奥田 保子

表面をいくら飾っても、鏡はその虚勢を見  
抜いてしまう。不善の脚を疎ませてしまう。  
恥をかく度に器がでかくなる

恥をかく度に器がでかくなる

両川 無限

聞くは一時の恥、知らぬは一生の恥。先輩  
や同僚にもまれて人生の旅路を往く。

まだしたいことがあるから呆けられぬ

安達 厚

高齢化社会で、芸術家ほど現役で長生きの  
できる人はない。入魂の仕事があるからか。

根を下ろす決心させた温い土

松葉 君江

草木の種子は弾かれた土地で発芽するが、  
人はその土地の温情に触発されて同化する。

お正月生きたあかしの皺増える

與田 明

笑い皺をまた一つ増やして屠蘇を酌む、そ  
んな余生としたいものだ。

精進を重ね追い風待っている

芦田 鈴美

隠忍自重すれば、やがてチャンスも訪れる。

故郷の山河はなにかも許す

加藤 権悟

故郷は逆境の身も受けいれ、癒してくれる。

母として亡母から学ぶことばかり

田中 美弥子

亡母の歳を越しても、亡母を凌駕できるも  
ののなさに驚く。今更ながら、妻として母と  
して学ばなければと思う。

濡れないで済んだ善意の傘返す

黒田 茂代

善意の寄贈である傘の恩恵に浴する人は、  
たくさん居られるでしょう。予期せぬ驟雨に  
でくわせば、その有難さは一入である。借り  
た人はちゃんと返ししょう。最低の約束事。

コメントが欲しいパソコン年賀状

伊勢田 毅

デジカメから画像を取り入れたり、創意工  
夫された多色刷りの年賀状は、目を楽しませ  
てくれます。しかし表も裏も、差出人の筆跡  
がないのはなんと寂しい。肉筆のコメント  
があれば、もつと想いが膨らむだろう。

迷わずに明日の種を蒔きに行く

三浦 千津子

混沌の世相にあつても、しっかりとした将来  
展望を描いて前進する姿勢に拍手。

てのひらに乗る幸せでガマンする

西村 栄一

幸せは、物質的に恵まれることも大事だが、  
心の安寧にこそあるだろう。

## 落丁の算数

森

茜

五年前のこと、小学一年生であった孫が、算数教室へ通うことになった。この教室の指導方針は、計算を基礎とする学習であった。教室では、テキスト数枚を全問正解まで学習する。そして、宿題の解答は父兄がチェックする親子参加のシステムであった。

場所が遠方であったため送り迎えをし、解答のあと始末も私にお鉢が回ってきた。先ずは、孫婆とも楽しいスタートであった。

三年生になる頃から、彼は一人で通うようになり、私はチェックのみとなった。

ある日のこと、「おばあちゃん、駄目じゃん。おばあちゃんのチェックしたところ間違ってたよ」と言う。それが、時には五問以上も指摘される日もでてくる始末。

「ごめん、ごめん、だから、ばくがしっかり教わってこなくっちゃね」とか何とか言っ

てみたものの、実は、だんだんと量も増えて難かしくなっていた。何を隠そう。私は、悲しい算数嫌い人間であった。

終戦の年、私は小学三年生であった。昭和二十年七月九日、和歌山市内の空襲で被災し、近在の農村へ転校を余儀なくされた。

転校した日、クラスでは、算数の授業中であつた。黒板に立方体と書かれ、それらしき図形が貼られていた記憶がある。しかし、先生のおっしゃることが全く解らなかつた。

折り悪しく、その日、私は丹下左膳ならぬ顔のまん中に、べたんとガーゼを貼っていた。それは、眉間のあたりが虫に刺され化膿していたので治療のためのそれであつたが、おかしい風体であつた。教室中から、ちらちらと侮蔑めいた目が遠巻きに飛んできて、とても恥ずかしく悲しかった。居辛く、困りになじめない日がずっと続いていた。解らないところを質問する勇氣もなく、黙々と机を並べていた。一刻も早く終了の鈴が鳴りますようにと願うところ貧しい生徒であつた。

やがて、中学生となり、教科書は、数学と変つた。春先に、体調を崩して三ヶ月休学した。もはや、私の数学は、山のかなたへ遠去かつて行つた。

高校生になる頃には、恥も外聞もかなぐり捨てて、優秀な友だちに、「何故イコールになるの」、「説明して」と質問攻めにした。ついに、「主のお恵みをー」と慈悲深い友が折つてくれた。

私の頭のなかでは、算数と言う学問は、体積あたりから見事に落丁している。私の算数嫌いは、根柢から算数に心を閉ざしたのだと思う。これは、いささか手前勝手で頭の悪さを棚上げした言い分であらう。

あれから半世紀、現在六年生になった孫が折も折り、「タテ×ヨコ×高さ」体積、ええつと、これは内ノリの容器か、とすると……」と言いながら宿題をしている。

チャンス到来！とばかり、私は、あの落丁の頁をとり戻してみたくなつた。彼の教科書を見せて貰つて、一題一題じっくり頁を追っている。そして、件の算数教室のテキストは、今や彼にチェックされている。やつと、連立方程式に辿りついたところ。

川柳のイメージが湧いてこない時、先ず件のテキストをやってみる。何か句が浮かんでくれることを期待して。そして、私は芯から算数嫌い人間ではなかつたのかも知れないと妙に納得しているこの頃である。



## 弘津柳慶氏を悼む

石川 侃流洞

本年一月五日小野田川柳会の新年会で、私の機関誌「杯水」の編集長から「平成十三年度一杯水大賞の選考原稿は戴けなかったが、柳慶先生との消息は判りましたか」と尋ねられた。然し、文通も途絶えたままで、多分病臥中だろうとしか答えられなかった。

今年も賀状は差し上げたが、一方通行になり心配していたところ、一月九日寒中見舞が届き、昨年十二月二十四日に八十七歳で永眠しましたと御家族からの便りを受け、やっぱり病氣だったんだと、古い句報を開いてありし日を偲び目頭を抑えた。

私と柳慶氏との出会いは昭和二十五年九月頃で、国弘半休門氏から、「専売公社下関支局に、不朽洞会員の弘津柳慶氏がいる。会って見ないか」と電話があり、早速二人で会いに行ったのが始まりで、一見とても気難しい顔の御仁に見えたが、色々話しているうちに、それは私の思い違いだと判った。それで同年

翌という気安さも手伝って、色々支援をお願いしてしまった。初めての句会参加は昭和二十五年十月で、次の句が載っている。

つれづれのままだに留守番果を焼き 柳慶  
焼栗を老母細々商って

金のあるだけの取柄娘はなびき  
樹を売って明るい部屋にただ黙し

社長先ず明るい部屋を独占し  
続いて、昭和二十五年十一月十三日下関駅長公舎をお借りしての句会で、選者と作句指導を担当されている。

この頃は川雑下関支部も最盛期で、会員も約二百、句会の参加者も北九州各柳社・博多・小郡からも名を連ねている。

柳慶氏は、気難しい風貌にもかかわらず、宴席ではアノネのオッサンや桃太郎を演じ、参会者をアツと言わせるかくし芸を持って居られた。

昭和三十一年七月、下関市在住約六年で専

売公社府中支局に栄転になり、七月四日有志で送別の宴を計画していたところ、運悪く同朝、下関鉄道病院院長坂田良坊博士の急逝に遭遇、送別会計画は頓挫した。楽しみにしていたアノネのオッサンと、良坊博士のテル坊主の共演は実現することなく、七月十日府中市へ赴任された。残念の極みである。

その後私も下関を離れて転勤を重ね、停年後も各地の句会に出席できなかったが、五年ほど前、山口県川柳大会で偶然会い、お互いの健康を喜びあった。その際、久しぶりのので一献交わそうと誘ったが、大阪へ今日発つ約束があると言われ、次の機会にしようとして切れ切りになってしまった。

柳慶さんの句で、私の脳裏に焼きついている句は

散骨もいけど墓に妻がいる 柳慶  
である。現在では当時を知る者は総て他界し、私一人になってしまった。

次の句を読んで柳慶さんの人柄を偲び、哀悼の意を捧げます。

老人会懐かしの歌が次々と 柳慶  
旅に出て本場の味をしみじみと  
妻が目で私の発言制せられ  
青年が又々刃物で人をさし  
横文字に弱い大正生れです



## 岩原喬水さん逝く

両川 洋々

川柳ふうもん吟社幹事の岩原喬水さんが、

一月一日午前六時入院先の日赤病院で、再度の脳出血のため永眠された。(享年83歳)

喬水さんは大正十一年八月十一日生れ。鳥取一中から中央大学へ進まりましたが、在学中に学徒出陣により召集され、大竹海兵団に入隊された。人間魚雷の乗員としてくる日もくる日も、猛訓練の連続で多くの同期兵が死んでいったとか。各地を転戦中に運命の八月十五日を迎えられた。呑竜隊々長、岩原堅太郎海軍中尉の終戦である。

戦後は鳥取日産自動車に勤務され、同所長で定年退職。以後は町内会長や自治会会長を長年つとめられたが、世話好きの喬水さんにはピッタリのはまり役ではなかったろうか。

川柳は復員後まもなく鳥取の川柳会に入会され、河村日満、森田客人、大西八歩、森本法泉子等と共に活動された。現在の鳥取県川柳界の基盤はまさに、戦後混乱期のこの時期

に形づくられたと言つて良いだろう。

喬水さんのように五十年を越える柳歴を持つておられる、鳥取における川柳戦後史の生き証人の死は、何としても惜しまれてならない。

最後の句会出席は昨年の十一月二十四日であり、わずかその九日後には死出の旅路へとつづく、日赤への入院ドラマが始まったのである。

あの世へは逝かぬ予定で遊んでる 喬水  
特攻へ死の命令は真つぷらだ

仏の眼慈悲は無言で罪悟す

グッドバイすんなり過去の恋にされ

風化した夫婦接着剤が要る

喬水さんの最終句会の作品を列記してみると、まるで死を予期していたのかと錯覚してしまう。

一月四日の葬儀にはたくさんの川柳人が参列して、喬水さんを寒風の中で見送った。

一月二十六日の川柳ふうもん吟社句会には、急挽「岩原喬水を偲ぶ会」に変更して故人をしのいだ。

喬水の艶つばい句にやかなわなない 圭一郎

元旦が命日となる哀しさよ 保子

喬水の見えぬ句会が沈んだる 裕子

千羽目の鶴迷ったか戻らない 一瑤

あの世でもさつそく恋をしてるかい 美雪

もう何も語らぬ影が傍に在る 一粹

おしゃべりを無口にした計が届く 孝男

軍服も凛々し喬水頼母しい 孝明

あの世でも喬水節が冴えわたり 志げ緒

カラオケの歌詞を見せびらかして逝く 節子

喬水がいつもユーモア提げていた 一京

カラオケの軍歌もどこか色っぽい 金祥

海の歌唄い喬水天に逝く 鍾旭

カラオケの歌詞を闇魔に自慢する 蟹郎

喬水があのに拉致をされました 洋々

偲ぶ川柳作品の中にもカラオケの句がたく

さんあるように、手広い趣味の中でもカラオ

ケと水墨画は玄人はだしの域であった事を付

け加えておきます。

妙法蓮華院海軍日堅信士

(弔吟) 蓮の座の句座喬水の句が光り 洋々  
安らかに眠られよ 合掌



## 畏友・越智一水君を悼む

渡邊 伊津志

速達便で送って下さった事も、忘れられない有難い思い出になってしまいました。葬儀の折、四国郵政局川柳人代表者が弔辞で、毎年全国郵政川柳大会を仕切り、昨年は九州支部まで創り上げた功績を感謝をこめて朗読されるのを聞き、世話好きの一水君を偲びました。

### 一水句抄

昭和三十一年八月の句集から

保険達成万歳の声局舎割る

苦勞する事を美德としての母

勤ける倅セデモの列にあり

親切が過ぎ迷惑な事にふれ

昭和四十九年二月の句集から

日本に切れる間がない黒い霧

じつと手を見るよりデモの列に入る

温室に咲いて思想のない花よ

水音に聞こうさらさら嘘がない

平成十五年の近作（遺句）

新春や嬉しい風よ吹いてくれ

草の根の力となろう老いの春

励ましに行き病人に励まされ

生き延びたいのち東へ向いて立ち

空に生きてる空の青さに聞く悩み

法名・曹洞宗・法水禪慧居士 75歳 合掌

平成十五年一月七日、午後三時頃に八面六臂の美貌で民生委員の夫人トラヨさんが、菓子と新茶を出されたあと一時間ほどして部屋を覗くと、一水君はもう窓に凭れて息絶えていたという。心筋梗塞であった。平安祭典場で娘婿の挨拶に「本人はあつという間に天国へ行きましたが、残された家族にとつてはもう……」とあとは溢れ出る涙で言葉が続かず、参列者一同貰い泣きをしてしまいました。

昭和四年九月二十九日、現住所今治市大新田一三二五で出生。松山通信講習所を卒業してすぐ今治郵便局に入局。私が『川柳雑誌』を講読し始めた昭和二十三年には既に誌友で活躍していました。郵便局の退職を待ちかねたように部落総代を拝命、十余年間最後まで精励されました。山が好きでよく登られましたが、高血圧と糖尿があり登山仲間の川柳人内科医近松徹也にいつも注意されていまし

た。それで霊峰石鎚山（一九八二米）も七合目まで我慢していたようです。私より四つ年下ですが几帳面、誠実を絵に描いたような人で面白い話でも口を閉じて笑う人でした。世に謂う虫が知らせたとしてもいうのでしょ

うか、昨年末に面識のない誌友野村清美宅を突然尋ね、現代川柳、NHKの日曜俳壇等川柳作句のヒントになるからと、懇切丁寧に説明をし帰り際に

葉牡丹は愛を包んだように咲き 一水

秋かたるその人が居て茶がうまい

の短冊をプレゼントされたそうです

もう一人の誌友中村好恵宅でも現代川柳の

あり方について、滔々と一時間近く語られた

そうです。また、昨年末二十四日夜、私宅に

電話があり「五健先生（野球拳の作詩者・愛媛

川柳育ての親）の色紙、短冊で作ったカレンダーを一番大事な人を忘れた」と言っ

## 追悼

# 越智一水さん

和田 宏

新年早々一水さんの訃報が届き、驚きかつ悲しみが胸が詰まった。

思えば四十数年前、前々会長の長野文庫さんから紹介されたのが、一水さんとの初対面であった。私が汐風川柳社に入会して間もない頃であり、「郵便局の一水です」と新人の私に、心安く笑顔で話しかけて下さった日のことが今でも忘れられない。文庫さんからは、戦後まもなく川柳塔（川維）へ入り公務多忙のなか勤務と趣味に忠実に励まれ、郵便川柳にも尽力なさっている方だと伺っていたが、小柄ながらその凛とした姿勢は、謹厳実直で何事にも熱心に取り組まれる方だとの印象を受けた。句会でお会いする機会も増え、職場や川柳塔でのご活躍をお聞きする度に私も幾度となく励まされた。

近年では、路郎・蓼乃先生の句碑建立記念尾道大会やしまなみ川柳松山大会時にお会いしたが、お元気なご様子で今春から汐風の方

にも顔を出させてもらう、とのお返事を頂いた矢先の訃報だっただけに残念でならない。一水さんを語る時忘れてはならないことがある。昭和四十一年の西条川柳大会の日に、文庫さんと宵明さんの句碑建立を提案したのが一水さんであった。この時期に第一線で活躍されていた先達の句碑建立という一大行事が実現したことは、一水さんの力なくして語れない。文庫・宵明の二人一基碑に決まり、昭和四十二年の五月に除幕式を行った。加茂川の青石で立派な句碑が建ち、一水さんと私は力強く握手を交わしたことを今も忘れられない。

やすらかにやすみください

合掌

## 一水句抄

障子張り替えて笑いの声がもれ  
愛人に電話するよう孫にする  
運動だはがき出すにも遠出する  
泥水であろうと蓮の花は咲き  
石ぬれて石と語るも春の雨  
般若心経の心に映える紅葉路  
路郎忘でなくとも路郎の軸を掛け  
体調がよくて仏へ香を忘れ  
六根清浄願いをこめてドッコイショ  
立春の光へきり立ち向う

## バスツアー

西尾葉・橘高薫風  
句碑をめぐり  
全日本川柳香川大会参加

日時 6月14日（土）～15日（日）  
日程 14日＝大阪駅前（10時）↓淡路島南↓みさき荘（昼食）↓白鳥町（句碑見学）↓塩江温泉泊

15日＝ホテル（9時10分）↓川柳大会参加（詳細は本号の裏表紙を参照）↓高松↓瀬戸中央↓第二神明↓阪神高速↓大阪駅前（20時頃の予定）  
費用 二万円（予定）  
一泊二食と14日昼食付  
句会費は別途個人支払

募集人員 40名（先着順）  
申し込み締切 4月15日

（ただし定員に達し次第締切ります）  
申し込み先 川柳塔事務所

企画事業部

# 本社 二月句会

二月七日(金) 午後一時

ア ウ イ ー ナ 大 阪

春のようなやわらかい日射しに恵まれた二月句会には15名の参加者があつた。

はじめに同人弘津柳慶・岩原喬水・越智一水・石原靖巳四氏の計報が告げられ、冥福を祈る黙祷が捧げられた。

お話は相談役の西田柳宏子さん。

名司会者と言われ、清水白柳、麻生路郎に師事した長い柳歴を持つベテランである。

麻生路郎の雑詠選は、その作者らしい句しか抜かないというものであり、巻頭が2句で次が6句であつたこともある。川柳家のあり方、心の通つた川柳観が底流にあつたと言つた。

最近では体力の許す限りの川柳三昧。多くの柳友がいる幸せを噛みしめていると結ぶ。

初出席に小島一輝・小島百恵・山岡富美子・村上直樹・石堂潤子・田岡九好さんを迎える。

月間賞は谷口義さん(東大阪市)に輝く。

(司会 朝子)(記名 月子・玄也)

(受付 保子・セツ子)(清記 義)

## 席題「猫」 渡辺 富子選

猫ですがうちの大事な息子です  
年金の範囲でくらす猫と犬  
土壇場で猫はひらりと身をかわす  
病一つ猫一匹と春を待つ  
老婆の猫なで声に買われる  
孫傭の猫もひと息つく午睡  
八方破れに誰が付けたか猫の鈴  
魔性とはとても思えぬ猫かぶり  
猫のいる場所がわが家の一等地  
猫と人その差はテニヲハひとつぶん  
四面楚歌猫にも背中向けられる  
掃除機の手で寝そべる猫のひげ  
猫の目のようにコロコロブゲーム  
背を向けた人の名前を猫につけ  
月光に黒猫何か起りそう  
自己主張して媚びることしない猫  
年金の暮しを猫に言い聞かす  
びし濡れの仔猫を拾う寒の道  
寄つてくる猫を蹴とばす振られた日  
猫の手も借りたい時の長電話  
野良猫になって自由を取り戻す  
飽食に猫にまできた糖尿病  
黒猫が見てた女のはかりごと  
招き猫も化け猫も居る夜の蝶  
愛猫のテロかも知れぬ爪を研ぐ  
猫嫌ひ社長猫を可愛がり  
歳時記の通りに恋に落ちたタマ

月子 弥生 美代子 理恵 鐘造 正雄 澄子 修 楓 陸子 希久子 富美子 柳弘 千里 みつ子 ルイ子 正雄 美代子 朋月 加津子 鹿太 りつえ 理恵 倫子 睦子 昭 哲男

猫にまで禁煙促す瞳で見られ  
爪の跡口紅つけた猫だらう  
幸せかと聞けばうなずくひざの猫  
去勢した猫といつしよに冬ごもり  
のしの字に猫ねそべって春近し

(久)千代  
いつみ  
昭子  
泰子  
初恵

猫に鈴つけず亭主に付けてある  
野良猫よ私は扶養家族です  
僕よりも猫に優しい妻の声  
大將は妻だと猫は知っている  
化け方を指南している膝の猫

(久)千代  
真理子  
セツ子  
重人  
(志)千代

妻の飼う猫に一目置いている  
食いはぐれないよう猫のそばにいる  
北鮮の猫よ充分食べてるか  
嫁がせて野良猫膝に乗せている

扶美代  
たもつ  
隆盛

兼題「ちくはく」 居谷真理子選

ちくはくな返事で逃げる御縁談  
献立の和洋ちくはく共稼ぎ  
足腰がちくはくになる風邪の熱  
ちくはくな話のはずむ日向ぼこ  
おしゃべりと訥弁妙にうまが合い  
ちくはくな食器が並ぶ子沢山  
ちくはくと見えてはなんのおしゃれさん  
着物着て靴履くようなことを言う

あやめ  
照子  
つづや  
英子  
文  
更紗  
加津子  
比ろ志

東西南北世界が揺れるちぐはぐに  
 二人三脚ちやんと走れたことがない  
 スカートはジーンパン穿いて街を行く  
 チョコレート欲しい人の届かない  
 パーティの穴あきジーンパンよはしゃぐ  
 ちぐはぐな恋の点火で結ばれず  
 ちぐはぐな好みを丸くする幹事  
 茶柱がちぐはぐに浮く冬の恋  
 ちぐはぐにタラップ降りてくる不倫  
 ちぐはぐも有って人生長丁場  
 コンセントはいいところについてない  
 ちぐはぐを深追いせずに生き上手  
 ときめくと左の脳が引きとめる  
 ちぐはぐやけれどこの服まだ着れる  
 朝食のパンと御飯と差向い  
 くいちがい都合良く聞く耳をもち  
 上品な顔してややおら河内弁  
 ちぐはぐに育つ子もよる仏の間  
 植樹祭林を切つて準備中  
 ちぐはぐに友きて三食ちゃんとしたべ  
 ちぐはぐを友も笑わぬ日が怖い  
 ちぐはぐな料理が並ぶ日曜日  
 ちぐはぐな心と体十五歳  
 平服で出て引つ込みのつかぬ席

求芽 美代子 たもつ 富子 章久 隆盛 柳弘 正雄 民 保州 保子 修 九好 かすみ 民 玄也 とし子 哲男 弥生 保子 義 千代 英子 鹿太 ばっは 瑠美子 朝子

ちぐはぐになるよう妻は仕掛けてる  
 ちぐはぐに聞える耳が二つある  
 地 ちぐはぐな夫婦の息を合やす酒  
 天 五十年添ってちぐはぐな夜もある  
 軸 思いこそすれのちぐはぐ父と子の  
 兼題「酔う」 坊農 柳弘選  
 先生は酔うほど口が軽くなる  
 核の持つ魔力に酔っていませんか  
 ほろ酔いの頃は時間を気にしてる  
 卵酒風邪は治るが二日酔い  
 酔っていたという言訳は通らない  
 酔ってない時に聞きたいその科白  
 ひと時を楽しくさせる美女の酒  
 堂々と酔っております妻の酒  
 なかにかに酔わぬ女を持て余す  
 酔うほどに君が美人に見えてくる  
 かみ合わせ愛の行方に酔えぬ酒  
 人情と地酒に酔うた途中下車  
 税金を叱るほろ酔う発泡酒  
 極楽に着いたら思いきり酔おう  
 割勘のメンバーいつも丸く酔い  
 請求書ほどに酔ってはおりません  
 喜怒哀楽その行間に二日酔い  
 大胆に一度酔いたい白いバラ

蕉子 隆盛 理恵 求芽 螢 ダン吉 玄也 章子 千代 寿美 春 扶美代 義 賢子 睦子 富美子 重人 美代子 隆盛 扶美代 森子 朝子

頂点の椅子目指してから酔えぬ  
 自信家ですいつも自分に酔っている  
 たかぶりは不実の愛に酔うてから  
 葬儀委員長俺だわしだと酔うてから  
 お水取り火の粉に酔うてしるび逢う  
 恍惚のムードに揺れるペンライト  
 答弁に酔っているのは総理だけ  
 バブル後の悪酔い未だ醒めやらす  
 竹山の撥にひと時酔いしれる  
 米朝さんの話ゆつくり酔わせてる  
 船に酔いねてばかりの島巡り  
 鬼ごろし酔うて二人は美男美女  
 バラ抱いて真つ赤な嘘に酔う女  
 恋に酔うてんでん手鞠よく弾む

弥生 楓楽 たもつ 富子 重人 鹿太 尚士 ばっは 太 月子 とし子 富子 千代 求芽 民 公誠 光久 直樹 比ろ志 つづや 寿美

兼題「ふわふわ」

玉置 重人選

ふわふわと欲望がわく牡丹雪  
 ふわふわと私を攻めにくる花粉  
 バレンティンふわふわ淡い夢を見る  
 ふわふわの茶髪もやつと市民権  
 ふわふわと舞い上つて春の靴  
 ふわふわした心を覗く昼の月  
 人間をふわふわさせる不況風  
 ふわふわの布団で今日もねむる幸  
 ふわふわとふたりで赤い観覧車  
 ふわふわの改革だから進まない  
 ふわふわの雲はお化けかも知れぬ  
 春はまばろしふわふわと戯画の中  
 春風へふわふわ乗った出来心  
 昇格の内示に足が地につかぬ  
 ふわふわと生きてふわふわ消え行かん  
 雲海の上で昼寝をしてみたし  
 ふわふわと過した付けが待っていた  
 肝心な時ほどふわふわと決める癖  
 綿菓子のような男に用はない  
 ばたん雪神の不安かも知れぬ  
 耕せばふんわり土も生きかえる  
 ふわふわと地獄の橋を渡りかけ  
 良い夢を見るふわふわのぬいぐるみ  
 ふわふわの椅子に背筋がのびきれず  
 ふわふわと飛びつつ時期を待っている  
 ふわふわと頼りないけど手は早い  
 ふわふわと女が泳ぐ花の海

螢 初恵  
 澄子 直樹  
 富美子 たもつ  
 和香 笛生  
 尚士 洋  
 とし子 森子  
 富子 正雄  
 房子 正雄  
 つづや 加津子  
 求芽 鹿太  
 扶美代 たもつ  
 英子 洋  
 英子 洋  
 光久 光久  
 恵勇 恵勇  
 理恵 理恵

薬にも毒にもならず浮いている  
 ウイルスがふわふわ街で遊んでる  
 メールから娘の足が地につかぬ  
 ふわふわと生きて散りぎわ美しい  
 長期入院堅いベッドを所望する

佳

ふわふわと出かけた妻が行ったとき  
 ふわふわの男の空気ぬいてやる  
 ふわふわになるまで搾る悪女だな  
 人魂がふわふわして国境  
 振り向けば過去がふわふわとんでいる

人

ふわふわと見せて合鍵渡さない

地

良心を鈍らすふわふわのソファー

天

ふわふわにさせた指輪が外せない

軸

ふわふわと時計回りについて行く

兼題「におう」

奥田みつ子選

ニュースから戦争におう曲がり角  
 献金にやつぱり匂うものがある  
 古文書のおい先祖の私語を聞く  
 水仙を活けてはんわか江戸切子  
 苦勞したお方は優しくにおう  
 幸せのおい漂う共白髪  
 ばらんこを一人こぐ夜の沈丁花  
 梅の香に平常心を取戻す

美代子 典子  
 英子 弥生  
 天笑 公誠  
 朝子 洞庵  
 朋月 シマ子  
 弥生 弥生  
 扶美代 哲男  
 照子 照子  
 ダン吉 正雄  
 かすみ 光久  
 柳伸 義

ポプリ匂う部屋で還らぬ人をふと  
 梅におう詩人の真似をして歩く  
 新聞の匂いが朝を告げてくる  
 来し方がはんわかにおうお人柄  
 ドアあけたとたん我が家の匂いする  
 八起き目はほんものにおう広い視野  
 絵手紙をみかんのにおう指で書く  
 沈丁花庭の隅から自己主張  
 廃校に子どもの匂いまだ残り  
 あったかいシチューのにおう窓あかり  
 光琳の筆から梅が匂い立つ

佳

におうたと刑事しばらく動かない  
 大根の切干し亡母の匂いする  
 義理チョコの中の一つが匂い出す  
 一姫二太郎のにおいの違う部屋になり  
 少年は無口男のにおいして  
 残り香を抱いて感謝の日を生きる  
 世界地図描くと硝煙においだす  
 みそ汁が匂うしあわせなめざめ  
 裕足に二十歳の初春が匂い立つ  
 テロのたび何処かでおうピンラディン  
 六法のおう範囲で生きている  
 シヤネルよりシャボン匂うきが好き  
 優しさが芯からにおう友を持つ

人間のおうところが嬉しい日  
 一言の奥にプライドにおい出す  
 タキシード着てもエンジニアのにおい  
 泰西名画貴婦人たちが匂い立つ

澄子 篤子  
 昭文 尚士  
 弥生 弥生  
 瑠美子 かりん  
 保州 賢子  
 隆盛 紫香  
 女 扶美代  
 哲男 哲男  
 千代 和香  
 たもつ 順子  
 寿美 楓楽  
 楓楽 潤子  
 ルイ子 潤子  
 美代子 美代子  
 ふりこ 真理子  
 楓楽 楓楽

絵馬の子にきつと受かると梅匂う

修人

人間がにおうと森が身がまえる

重人

スランプを抜けると早春の匂い

扶美代

人間のどつき匂う街が好き

たもつ

幼子に春の匂いが満ち溢れ

天

### 兼題「秘める」

河内 天笑選

秘めことがちよつと有りそうチャイミング

満津子

夢いっぱい不安も秘めてゴジラが目

樹千代

十一桁に秘めてあるのは何だろう

保州

つきつめぬ方が神秘な大宇宙

つづや

通帳の額夫にも黙ってる

シマ子

私のDNAに禿がある

百恵

いい歳だから誰にも言わぬ片想い

一風

秘密主義他人のことは知りたがり

賢義

雄魚一匹熱い闘志を秘めている

みつ子

秘密抱いて美人ますます美しい

求芽

チュウハイが僕の秘密をすぐ喋る

孝一

結婚指輪失くしたなんて言えませ

理恵

善人と言われた人にこの秘密

潤子

秘めているつもりが隠せない色気

吐庵

一言が言えずに春はまだ遠い

森子

聞かれても言わないことがたんとある

泰子

秘めことが重くて遠い旅に出る

弥生

噛み合わせぬ思いを秘めてまだ夫婦

みつ子

墓場まで持つていくには重すぎる

千里

おばあちゃん秘仏のようになりはった

典子

内緒よと聞けば黙って居られない

アキ

秘めことにリボンをかけて花飾る

楓楽

他人には生年月日秘めておこ

かすみ

ボツクリ寺へそつと参つたのは秘密

澄子

あなたにも未だ話せない胸の内

鐘造

秘密だが鬼より怖い妻と居る

弘風

話したら笑われそうでかくしとく

伽羅

秘めことはあの世で妻に打ち明ける

則彦

本当の男母性を秘めている

真理子

秘めことをボロリとこぼす人も好き

保子

ひとさまの秘密はすぐに忘れよう

初恵

秘め事を喋りたくなる春の月

利昭

フロッピー凄く秘密を知っている

扶美代

なにくわん顔して秘密たんと持ち

月子

知らん顔しといてやろかあのことは

章久

しばらくはマル秘にしとくラブゲーム

美代子

この先は秘密笑われそうだから

かりん

秘密などない顔をして差向い

谷口 義

日がわりに秘めごと湧いてくる元気

天 軸

## 第12回朝日中部川柳大会

とき 3月29日(土)

ところ 朝日新聞名古屋本社(地下鉄伏見西)

会費 2000円(新刊句集呈)

事前投句選者 石部 明(岡山) 河内天

笑(堺) 松原未湖(福井) 檜崎進

弘(大阪) 吉田三千子(名古屋)

渡辺和尾(愛知)

投句要領 雑詠5句(自作、新作) 便箋

原稿紙

投句料 5句一組1000円

住所、氏名(フリガナ) 電話明記

締切 3月1日(土) 消印有効

当日課題 「小鳥」 竹内すみこ

堀 恭子

当日席題 2題(当日発表)

宛先 〒450-0003

名古屋市中村区名駅南1-4-12

朝日カルチャーセンター

第12回朝日中部川柳大会係 宛

主催 朝日カルチャーセンター

朝日新聞社・川柳みどり会

# ちやめ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

岸和田川柳会

長谷川呂万報

また注意されたか孫のふくれ面  
 気をつけるいまじきウマイ話無い  
 急かぬ旅だから信号黄で止まる  
 強がりの女も老いには勝てもせず  
 友情の絆いつしか強い愛  
 不調法ですと彼女が斗酒辞せず  
 客帰りに続く喧嘩の顔になる  
 踊いたの数ほど意志も強くなる  
 水溜れの田で雑草の根性  
 好きになれきつと数学強くなる  
 腕すもう力の強さみだり  
 本当の強さ九条なみだろう  
 落葉掃く孫も熊手でお手伝い  
 伝統の文化を守るお手伝い  
 わらべ歌うたえば鬼の目に涙  
 本当の涙知ってる母がいる  
 今泣いた涙誰にも見えぬ母  
 あの世でも被爆語ると涙声  
 大戦の涙忘れてイージス艦

ゆり子 路子 蛙城 俣子 みよ子 笑司 由起子 守 仁緑 野添 けい子 ダン吉 盛之 昭二 洋 英雄 房枝 一脩 東吉

核実験地球にそそぐ涙雨  
 母傘寿家事の手伝い閉る達者  
 慟哭の涙で棺の蓋を閉じ  
 涙まで流した無念もう忘れ  
 泣くやつがあるかと叱る目も涙  
 本気です女の武器と言われないで  
 ああ涙嘘には出ないと言うけれど  
 馬の足涙なみだの初舞台

竹原川柳会

時広

一路報

師の句碑と明日を語ろうではないか  
 明日の灯を信じてからの夫婦坂  
 明日は嬉しや山陰にカニ食べに  
 この窓を開けると明日が見えそうで  
 生かされて幸せの種明日時く  
 明日咲く花はしつかり水を吸う  
 グーチョキパー明日はきつとおもしろい  
 特別な日には子供のままにいる  
 句碑が立つ父の笑顔のある丘よ  
 本を手にとるときめきをどうしよう  
 大行進蟻にも不満あるらしい  
 大海にもまれ流木強くなる  
 大それたことなど言っていないつもり  
 パリで見る大道芸の日本人  
 大吉は売り切れですか神籤買う  
 大きな息で大きく山を呑む峠  
 大仏のお顔に小糠雨しきり  
 世は平和ジャンボカボチャも競い合う  
 臆病が等身大に居る私

穰一 弘子 洞庵 呂万 呂志子 富志子 柳宏子 狸村 幸 蘭美 汎喜 夏喜 節夫 淑子 房子 千枝 史恵 栄恵 笹舟 菩居 民恵 慶子 敬子 不朽 静風 正宏 幸子

大器が一つ落ちていそうな回り道  
 大宇宙私の星をひとつ買う  
 大器かな七十歳の伸び盛り  
 極楽に善行積んで行きたいね  
 石鍾山善人ばかり通る道  
 性が弱から善人を演じてる  
 性善説心に問うたことはある  
 手のひらに拘えるほどの善を積み  
 善人のにぎり飯ならまるかろう  
 老いひとり善意が届く煮ころがし  
 銀河鉄道切符は善人しか買えぬ

東大阪市川柳同好会

森下

愛論報

半覚 厚子 万年 蝸牛 輝恵 笑子 貞枝 寿枝 一一路 弥生 美弥子 太一 猪太郎 ばつは 哲也 とみを 萬的 雅文 秀夫 三重子 柳宏子 シマ子 敏子 湖風

罪一つ不動の瀧に打たれてる  
十字架のてっぺんに吊る罪の彩

### 川柳塔唐津支部

久保

正剣報

額を立てられて支出がまた増える  
活気つく出荷作業の息荒し

兵八郎

武骨でも惚れる一輪やぶ椿  
姑火葬 養子の役はボタン押し

勝視

距離おいて吠える子犬の太い声  
定番は大根おろしに焼き魚

輝夫

行楽の疲れが残る月曜日  
靴下が寺の廊下で泣いている

水笑

以下同文名前はちゃんと呼んでくれ  
片隅できらっと光る星になる

晴翠

靴下が寺の廊下で泣いている  
以下同文名前はちゃんと呼んでくれ

虹汀

靴下が寺の廊下で泣いている  
以下同文名前はちゃんと呼んでくれ

高明

### 川柳大阪

高木

信醉報

人の世に甘辛ありて人の味  
甘い蜜必死で守る道路族

春蘭

塩味がほんのり効いたにぎり飯  
酒の味男のロマン掻き立てる

笑風

お人好しすぐ丸められてる都会の灯  
進め以外言わぬ総理に寒くなる

楽子

文化の日燕尾服着た田中さん  
欲だけはどんどん進み底が無い

柳宏子

体面とやらが前進止めている  
味のある一言さつと苦勞人

ダン吉

ベン先もすらすら進むいい知らせ  
拉致と核これを哲学なんと解く

ひろあ

紅葉の真つ直中の我が人生

章久

喜楽

喜楽

良子

医者通いしても達者と言うておく  
人里へ歩くほかない無人駅

三十四

風鈴に異音見つけた名残秋  
六十歳しがらみも解け進む夢

民子

午後からは少し昼寝のいい時間  
核を持ち貧困国がだをこね

鉄心

不景気の流行なぜか黒っぽい  
現役という幸せで年の暮れ

洛醉

血の巡り悪いダルマでよく転ぶ  
ブライドを捨てたら道がひらけそう

柳弘

ヘソ出しのスタイル次はどう進む  
森繁の味は簡単には出ない

敏

砂漠化が進む緑を増やさねば  
お父さんなんでなんでが成人し

照月

柳弘

柳弘

重人

柳弘

青道

柳弘

金太

柳弘

まつお

柳弘

信醉

柳弘

ちよえ

柳弘

はるみ

柳弘

かつ子

柳弘

聖子

柳弘

恵美子

柳弘

好栄

### わかあゆ川柳会

松本はるみ報

柳弘

白汀

柳弘

清泉

柳弘

民子

柳弘

博利

柳弘

好栄

柳弘

恵美子

柳弘

好栄

### 川柳ささやま

遠山

可住報

来年を語ろう鬼が笑うまで  
紙おむつ誇り忘れぬ老母の顔

恵美

ポーナスが待つ只今へ掌を合わす  
ポーナスが出たらのれんも活気つき

多美子

老いた今母の温みの帽子着る  
ポーナスが家計の夢を組立てる

美智子

過疎守る妻わら帽子の輪が和み  
土を掘る父の帽子に四季はない

かほる

主婦の誇り洗濯白く高く干す  
咲き誇る花に負けじと趣味の道

八重子

富士山を誇りに思う日本一  
目じるしの帽子いつもの粋な人

靖子

ポーナスは無いが花盛る画帖もつ  
個性ある顔だ不足を言うでない

とみ子

生きたるとは難儀な事の繰返し  
本音で酌む酒に銘柄などいらぬ

朝子

家中のクッション役で母も老い  
生きていての今日の目覚めに掌を合わす

君代

結局は自分ひとりの一輪車  
高いからウニは嫌いと言つておく

美紗子

人情に触れると響き出す命  
晩年にやとと帳尻合う二人

美緒子

人徳という株分けをしてみよう

美緒子

### 佳句地十選

(2月号から)

岸本

孝子

個性ある顔だ不足を言うでない

康女

生きたるとは難儀な事の繰返し

孝子

本音で酌む酒に銘柄などいらぬ

孝子

家中のクッション役で母も老い

孝子

生きていての今日の目覚めに掌を合わす

孝子

結局は自分ひとりの一輪車

孝子

高いからウニは嫌いと言つておく

孝子

人情に触れると響き出す命

孝子

晩年にやとと帳尻合う二人

孝子

農作業麦藁帽に勞わられ  
役員の誇り清貧だったのに  
ポーナスの天引き夢よ宝くじ

### 川柳塔みちのく

小寺 花菱報

火種漏れ女無口な貝となる  
サクラサクラカカナデシタ一年生  
遠い日に読んだ武蔵が踊り出る  
勉強家電車の中でも本を読む  
本棚にならべた本が忘れられ  
本籍へ辿り着いても風ばかり  
口止めの内緒話が風に乗る  
根回しの語尾が変わって来る不安  
末席で本音を飛ばす風を待つ  
髪染めて価値に溺れる人臭さ  
変り目の句を味わう夫婦著  
口止めがうつかりもれた酒の席  
少しずつ父の鋳型を剥いでゆく  
図書館を出てから頭軽くなる  
女子プロも内股になる訪問着  
一冊の農書を杖にして生きる  
玉葱の匂いがまじるじゃんけんぼん

### 打吹川柳会

大森 孝惠報

笑い過ぎも笑わないのもボケの初期  
今日もまた笑う幸せみつきたい  
大声で笑って腹の大掃除  
お腹からあははと笑う健康体  
腹芸で笑いこらげた忘年会

富子 哲男 可住 謙一 一光 ヒサ子 てる 隼人 順風 慕情 銀波 ふさゑ 花匠 雅城 井蛙 黙人 花峯 一花 五楽庵 紀美恵

円満に生きて来ました笑いじわ  
全身で笑う孫から福もらう  
五年でも辛抱します他人のえらさ  
口癖のえらいこつたで御輿あげ  
えらいなあ投入堂への鎖坂  
荷車で百五拾貫ひいた足  
味見する舌も老化でへそ曲げる  
名曲にほどよくとけるブランデー  
ふところに未完のままの曲がある  
柩の中で葬送曲を聞いている  
波風の立たぬ曲譜を書いている  
納得が行くまで庭の松曲げる  
星影のワルツ歌ってグッドバイ  
車止めミラーで覗く曲線美  
年の瀬に第九唱って垢を取る  
にんげんだもの根性が曲つとる  
木枯しの効果大根甘くなる  
孫に小言山ほど言っても馬耳東風  
わいろして効果あつたがくさい飯  
三里の灸すえて効果は先ず熱い  
かみさんをほめた効果でもう一本  
みぞおちに炎を溜め効果待っている  
ライバルに効いた薬を飲んでもみる  
モナリザを六十億に配りたい  
一曲と渡したマイク戻らない

### 川柳若葉の会

宮崎シマ子報

春の陽が当れば溶けてゆく仮面  
春になったらなつたらと病母励まして

節子 龍枝 克枝 三津子 久井代 重忠 勝見 博文 季芳 幸子 順子 かつみ 螢 善江 清 石花菜 京子 澄子 友楽 玲子 しろう 雄々 芳光 泰山 孝恵 あずき シマ子

遊びからルール学んだひとりとっ子  
何しても遊び心で実りなし  
停年後遊んでますわ 無為徒食  
胸襟を開いて遊ぶ趣味ひとつ  
遊びましょう二つ返事ですぐ決まる  
故郷で遊んで帰る日の早さ  
遊び疲れ空の財布と昼寝する

### 三幸川柳教室

古久保和子報

別れとは侘しきものの発車ベル  
鳴る腹に負けて挫折のダイエツト  
不況でもジングルベルは鳴って来る  
今日というゴングは誰にでも鳴るが  
着メロに今日も手足を縛られる  
虎落笛鳴って濃くなる冬の彩  
動かすとむりむりと鳴る五十肩  
恙ない暮らしになじむ電子音  
ぬくもりの人情が効く置き薬  
置き時計電池切れたか痴呆症  
辻褄が合わぬと妻は箸を置き  
そろばんを置いて包んでいるし袋  
交差点哀しい花を置いている  
置き手紙愛という字をちりばめて  
雑魚の位置だから素直な絵が描ける  
身の丈に合った置き場が見つからぬ  
カレンダールの余白わたしを置き去りに  
二日置きにいらしてくれのお姑さま  
置物にされると壺に顔ができ  
失業中恋も子供も生まれません

欣史子 加津子 香住 アキ 能子 弘直 正匏 武 准一 保州 町子 碧 正一 純子 昇 マリ子 清史 利治 登美代 桂香 鉄治 義雄 章子 みね さち子 一歩

手を抜いて足りなくなってきた時間  
指名手配の写真似てくる顔見知り  
内視鏡なに見つけて来たらしい  
大変を気力で飛ばす笑い皺

バランスが良すぎシーソー動かない  
バランスを欠いて芸術めいている  
ちよちよはの見栄でバランスとる垣根  
好き勝手しててバランスある家族  
塩梅というバランスが難しい  
紙とコキへ乗せる少年のバランス

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

振る鉄にトリックはない土に生き  
企みは笑みを浮かべた淡い紅  
トリックでもあるのだからか母の膝  
トリックのうまい男で口八丁  
カラクリを気付かなかった契約書  
たくらみも知らない蟻の長い列  
トリックとテロとで揺れるやじろべえ  
トリックを明かしてからのうまい酒  
妻騙すトリック手変え品を変え  
談合の中にトリック見えかくれ  
トリックの拉致にいのちを削る音  
逆風へやっぱり欲しい男傘  
どう化けてみてもやっぱり私です  
おもちゃ箱にやっぱりあった探し物  
初詣で僕はやっぱり日本人  
人柄も人気やっぱりそうだね  
やっぱりね見事に指紋しゃべり出す

次根 千秀 嘉平 幸 キミエ 公子 根世子 栄之進 朱夏 和子 鉄治 優子 佳子 和子 正博 さち子 英子 稚代 佐一 紀久子 利治 佐代子 大輪 和重 射月芳 怜 寿子

君もやっぱり鳥合の衆であつたのか  
やっぱりネ狸寝入りで聞いたこと  
煮こりやがやっぱり好きな帰省の子  
やっぱりと市民領く逮捕劇  
世話好きで見ればやっぱり放つとけぬ  
甘酒の甘さの中におわす亡母  
恵比寿さんの甘酒福が入つてた  
甘酒茶屋でぬくもりもう冬の旅  
甘酒の湯気が待つて寒稽古  
甘酒に酔つた女のひとりごと  
甘酒を誉めれば土産一つ増え  
店頭甘酒初春のセール呼ぶ  
甘酒に冷えた心が温まる

川柳塔おっぱ吟社

木村あきら報

お金では買えない物つて何だろう  
一日のドラマ始まる朝の駅  
拉致家族ワラ一本が見つからぬ  
裏切られ真つ白になる保証人  
老翁の日課狂わす通り雨  
人はみなロマン求めて生き続け  
ドン底でもしもの話ばかりする  
美白にはとっても弱い財布なの  
いやな事忘れ上手で丸く棲む  
木枯らしに木守りの柿揺れている  
七坂を越えて来ましたポロ車  
頭打ち給与明細だけ届き  
形見わけ袖も通さずしま置き  
秀才も阿呆になりたい阿波踊り

幸 克子 順子 和香 美子 輝子 結実 三男 豊太 裕美 泰子 富美子 和 八重子 勝 輝夫 あきら 放任 賢 かおり 治延 吟笑 いさむ 貞月 寿々女 坊太郎

宿の膳ふと氣に掛かる留守の夫  
ローズ川柳会 山崎 君子報  
お前には笑顔が似合うとおだてられ  
ニッコリがニッコリを呼ぶ輪がぬくい  
実南天小鳥の分も置いてある  
信じてもない暦をみて決める  
ノール賞一人くつろぐ当り年  
花丸でスタートしたい初暦  
うっかりの自分を笑う日の多し  
暦見る心ゆさぶる風通る  
わが歳に甘え一年逃げられる  
生命線長いと言われ考える  
青い鳥暦のなかで飼うている  
大笑いピエロの化粧剥け落ちる  
北風に勇気を出せと背を押され

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

たまちゃんが庶民の心なこませる  
拉致に核麻薬を売って平和とは  
医療費が上がって増える頭痛症  
強面の伊良部へ虎は気炎上げ  
拉致事件怒りのうねり津浦に  
ゼロ金利老後の指針狂いだす  
ストープを囲み話題へ夜あけまで  
拉致に耐え二十四年も親の愛  
ノーベル賞決って本人大慌て  
悼まれて若き宮様逝かれしを  
時の人行く手行く手へパパラッチ

よしみ てる みつ子 トミエ 貴代子 まさお 澄子 いわゑ 武庫坊 年代 君子 義一 孝一 雅子 康子 正光 智恵子 和代 豊枝 鈴枝 千代美 公美枝 静江 久子 和子

民飢えて核開発が何んになる

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

雄々

ぬくもりの想いを込めてルミナリエ  
クリスマス色に染まったネオン街  
思い出をそぞろネオンが掻き立てる  
浮かぶ瀬もきつとあるはずネオン花  
鎮魂の光眩しいルミナリエ  
強気でも歳には勝てんほどほどに  
手鏡を磨き女をまだ捨てず  
我武者羅の強気勝利のテープ切る  
やけくそに打った一手で生きかえり  
やけくそと判る手抜ききの晩ごはん  
やけくその背中で悪魔笑ってる  
やけくそになるのも血の気ある間  
どうしても飛べないヤケクソのカラス  
やけくその男の背骨瘦せている  
飯場から飯場へ時効待つ曆  
愛娘嫁にやる日を選ぶ曆  
今日も留守達者な祖母のカレンダー  
私の曆に雨季が長すぎる  
曆の中でうろろろしてる僕の決断  
髭そってイメーヂ変える句読点  
句読点うつて女を取り戻す  
きつぱりと諦めました句読点  
自分史に心は別の句読点  
除夜の鐘僕も寿命を百八つ  
大根の辛さも好きな冬野菜  
影武者に一番大きな握り飯

稲子 泰雄 高栄 百合子 尚士 治三郎 メ女 孝一 義一 茂 秀夫 千枝子 恵美子 比呂志 石舟 武史 庸佑 イク子 スミ子 萬的 満寿蔵 活恵 求芽 無禄 紫香 砂輝守

定年後皆勤賞は縄のれん  
憎いにくい男が妻を焼きに来る  
見え透いたお世辞に乘らぬ胡蝶蘭  
心だけせめて豊かに年の暮れ

城北川柳会

川久保睦子報

旅プラン私を急かす秋日和  
黄金虫ほどのくらして満ち足りる  
得るものを求めて人は旅をする  
爪に火を点して貯めたこの定期  
呆れるほどケチで女に縁がない  
おでんの灯人みな流転の時もてり  
夜釣の灯でつかい獲物待っている  
灯火管制下家族の絆確かめる  
金持ちより少しゆとりが欲しいだけ  
伝統の灯消すなど法善寺  
冬支度つるべ落しの余生なり  
金持ちも六文銭で冥土旅  
呆れますおなじ手口でだまされて  
老いて今過去の栄光思う日々  
この坂はあんたに無理と膝笑う  
湯の宿のチェックアウトにまだ未練  
火の出ない鍋で火をよく通せ言う  
生きたため真つ赤に燃える葉をつける  
金持ちは自然に歩幅早くなる  
あの歳で若い女と蜜の味  
み仏に近づく高い石の段  
金持ちで自信があつて独断で  
呆れてはおられぬ声はピンラディン

五月 晴美 澄子 諷云児 照子 静枝 八重 秀夫 萬的 春蘭 柳一 政子 達子 高栄 とし子 トヨ子 あい子 久留美 あき子 順三 はじめ 一枝 史風 志華子 昭子 綏子

早かった子の軍門に下る朝  
ひたすらに歩くゴールのない絵筆  
金持ちでは無いが子宝持っている  
他愛ないケンカを笑うレモンティー  
秋空の高さへ力む竹とんぼ  
抜けそうな空へ突立つて彼岸花  
確実にゴールを目指す亀の足

川柳塔なら

坊農

柳弘報

君は冷コリ私ホットで四十年  
押し売りで間違えられた寄付集め  
折り紙の母のぬくもり冬が好き  
広島へ行きます折り鶴とともに  
コーヒーマの味が健康バロメーター  
寄進して浄土へ心洗われる  
寺の寄付迷う心の般若経  
リハビリの鶴が段々鶴になる  
裏切りの心を見抜くモカの味  
軽い嘘許して君の風を吸う  
軽量を問われもめる民主党  
誰よりも上手に折れるだまし舟  
珈琲屋でイギリス艦の議論する  
浄財を集めて尊大な覺  
コーヒーマに誘われ雨の散歩道  
笛吹けど音の鳴らない社会鍋  
コーヒーマの渦へ思案が深くなる  
不老長寿の珈琲を探してる  
難民に届くだろうか善意の灯  
口軽い女けしかけ播く噂

あやめ 千歩 典子 重人 求芽 倫子 公一 博一 欣子 敏子 桜竜 ふりこ 登美子 カズ子 佳子 恵美子 春蘭 春雄 理恵 富子 真理子 絹子 章久 朝元 朝紀 國治 和夫

春夏秋冬コーヒー館の飾り窓  
手品なら折り紙つきの父の腕  
火の川の手前で軽くなる他人  
紙コップコロコロ軽い思想だ  
なさやかな音で転がる慈善鍋  
厚化粧落として業を軽くする  
夢だった二人で開くコーヒー店  
臓器移植善意の募金ありがとう  
紙の舟夢をこわさぬよう祈る  
ピアノソロ軽く枯れ葉が舞っている

京都塔の会

都倉 求芽報

蓑虫の糸の長さの良き日和  
よく喋る男 無口にかある  
たずね来てまがきの菊に人住まず  
花に水ボクには酒をくれる妻  
歳末の巷 一色星飾り  
キリストのいない巷のクリスマス  
濡れ衣へ巷の声が高過ぎる  
巷にはぬくい話もそこかしこ  
明るさに飢えた巷に田中さん  
幾百の巷で迷って今日がある  
ふと寄った街で定年まで迎え  
点眼に口も大きくあかんべえ  
花名刺 その気にさしてあかんべえ  
憎めない敵だからこそアツカンベ  
アカンベ言いたい人が多すぎる  
あかんべをして去ってゆく午の年  
優秀な口ポットあかんべなどしない

草 一風 弥生 寿美 道子 隆盛 秋泉 柳弘 秋雄 洋子 武庫坊 春蘭 年代 正坊 良子 欣之 庸佑 ルイ子 輝美 弘之 葉子 静江 高栄 福子 益子 啓子 求芽

好きだからあかんべをしただけなのに  
ゴミ捨て場 鴉アカンベしして逃げる  
木枯らしにあかんべえするつるし柿  
愛子さまのあかんべの顔見てみたい  
用事出来はつとしていいる里帰り  
老いたかな用事用事と日向ぼこ  
一日の用事済ませて日記帳  
長電話切って用件思い出す  
かんじんの用事忘れた長電話  
町内会の用事待って定年後  
パンの耳かじって用事思い出す  
晩年の安らぎ用事もまた楽し  
旅半は用事がよきるのもおんな

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

常緑の松が持つてる力瘤  
相生の松に平和な尉と姥  
老松は過去の辛苦に耐えて立つ  
松竹梅わたしはいつも竹選ぶ  
寝たような姿で青々浜の松  
可能性たつぷり抱いた若い輩  
若さとはあつと言う間に逃げるもの  
若やいで希望に燃えるお正月  
若いっていいなりンゴを丸齧る  
着々と自立目指している双葉  
参観日こども喜ぶ若づくり  
木蓮が行先告げる満天に  
余生です風のまにまに生きましよう  
健康を目指す方針万歩計

柳宏子 英旺 満子 典子 義江 宏子 幸代 芳子 萬的 紫香 メ女 百倉子 哲子 光久 奮水 鹿太 章彦 嘉彦 いわゑ 房子 松煙 義子 澄子 歳子 孝一 高栄

方針など持たずに老いの自然体  
おみくじを見て方針が少し揺れ  
そして朝方針立たぬ靴をはく  
いい笑い重ねて少しづつ老いる  
合鍵を返しきつぱりサウナナラ  
引き際の美学辞表を叩きつけ  
きつぱりと言えないで居る拉致問題  
きつぱりと自分の意見言ってきた  
きつぱりと終止符打てぬから困る  
福袋思いがけない良い品だ  
まだら杓見舞えば帰りは氣をつけて  
ダイエット効果は数に出はじめる  
火を弱めおじや設う鍋奉行  
どうでつしやる無理を承知でえべつさん  
初詣で家族のみくじ吉揃う  
年賀状一度逢いたい人ばかり

堺川柳会

河内

月子報

夾竹桃微熱は今も背に溜る  
熱燗を頬で測ってご返杯  
査察して核の関わり何も出ず  
素うどの葱と七味にある野心  
立ちかけてまた座り込むい話  
魚屋で賢なる歌流れてる  
素うどんで勝負と譲らない暖簾  
出世してグルメになったうどんすき  
コーヒーから素うどんする仲となり  
熱きもの飲んで背信受け止める  
熱いもの熱いですよと言うて出し

たず子 昭三 美代子 哲子 石舟 秀章 江美 千代 能子 トミエ 哲男 いたる 春蘭 求芽 春蘭 求芽 春蘭 求芽 五月 半銭 千代 八千代 梓 冬虹 哲平 惠勇 春蘭

座つたら隣と背丈変りなし  
 素うどんが一番好きなお金持ち  
 いい街だうどんの出しが沁みている  
 目がすわる頃だばちばち逃げだそう  
 熱心に聞いていたのはサクラだけ  
 熱いお茶出されて無理を言ひ出せず  
 ビフテキに飽きて素うどん食べてます  
 悟りにはほど遠いけど座禅組む  
 熱いものはほど遠いけど登る  
 うどんすき囲む野心のない河童  
 天職はこれだ座職の父も老い  
 頑なな母さん椅子に正座する  
 夫婦して湯加減合わず難儀する  
 がまんした握りこぶしが熱を持ち  
 うどん屋でアト重ねるおじいちゃん  
 次出番だんだん熱くなってきた  
 騒がれた駆落ちなのに仲たがい  
 さりげなく交わす言葉に仲の良さ  
 学校の廊下で正座した仲間

川柳塔まつえ吟社

津川

紫晃報

かりん 小 雪 扶美代 朋 月 玄 也 文 文 忠 敬 ア 敬 鐘 造 洞 庵 像 山 時 雄 日 出 舞 夢 伽 羅 なぎさ 篤 子 龍 三 ちえこ 俊 一 宏 宏 宏 秀 子 多 賀 子 邦 代 きみ子

銀婚のプラン旅立ち子がすすめ  
 プランにはなかつたあなたとの出会い  
 羽ばたいてほしい未来へ子のプラン  
 親の敷くレールに乗らぬ子のプラン  
 一条の光待合室で聴く  
 過去だけはみんなきれいに光ってる  
 イミテーションよくたらいす耳に指  
 灯台の光のとどく守備範囲  
 光るまで黙って月と対峙する  
 身の丈で黙って月と対峙する  
 透き通る若水の声しみみてゆく  
 若水で一筆太く新春と書く  
 煩惱を払い若水汲み上げる  
 ちひろ絵に若水そつと置いておく  
 若水やこの平凡を大切に  
 このあたりだった若水汲んだ井戸  
 縄のれんくぐれば気分でかくなり  
 酒の席戯れ言みんな呑んでいる  
 人生の節目を酒は語ります  
 嬉しい時も淋しい時も酒がある  
 人間の弱さ鱗の落ちる酒  
 嫁ぐ娘につがれて酔えぬ父の酒  
 かわはら川柳会  
 上田 俊路報

小 生 玲 子 知恵子 茂 美 正 業 政 子 昭 二 久 枝 小 鹿 房 子 たけし 日出子 螢 叮 紅 幸 子 主 詩 朗 注 湖 静 恵 桂 子 紫 晃 余 史 子

前向きに短い余生花咲かす  
 春を待つ花が短い冬日耐え  
 短いが太くて温い友の文  
 満腹が午後の手元をくるわせる  
 自分史を書く鉛筆が短すぎ  
 川柳塔鹿野みか月 土橋 螢報  
 挨拶のほんのしるしが仇になる  
 生きているそれがしるしのうまい飯  
 改革のしるし見えない闇づく  
 愛されたしるしなまま北帰行  
 徘徊のしるし唇がまつ黒け  
 折り返し地点へ厄というしるし  
 逢ってきた余韻うれしき胸に抱く  
 また一つ歳をとるのかひとり言  
 この時を生きた証を世に残す  
 生き態のしるし恥じないことにする  
 生きたしるし大地に杭を一つ打つ  
 九十年生きたしるしがなにもない  
 万札にしろしがなくてよく遊ぶ  
 何事もなく消えてゆく蒙古斑  
 丸書いて毛を書いて太陽のしるし  
 初詣で家内安全鈴をふる  
 足取りが弾んできます初詣で  
 初詣で済ませ今年の顔になる  
 初詣で微罪を消してくれた雪  
 初詣で二度といくさのないように  
 初釜で七福神と雑煮食う  
 同じ釜囲んだ友は崩れない

雅 予 泰 良 悦 子 俊 路 実 満 菊 乃 茶 子 公 子 富 人 江 幸 枝 武 子 和 子 孔 美 子 彩 子 汲 香 久 枝 盛 桜 石 花 菜 かおる はるお 弘 子 きみ子 野 草 みどり なが子

嫁もろて古い鍋釜納屋の隅  
子狸の爺ちゃん文福茶釜かな  
静けさは釜一口の別れかな  
大釜で蟹アツアツとくらみごと  
五右衛門の最期の顔を考へる  
喜び給え釜にいっぱい飯がある  
総会に出す猪を釜で煮る

# 尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太郎

可も不可もなく今年蕎麦の味  
干支にない猫がねずみを恨んで  
干支聞いて彼の氣質がのめこめた  
ひたすら歩いて捜す春の秘  
吉祥の空に無心のひつじ雲  
おとなしくないのも混じる未年  
凍てる朝山茶花の赤暖かい  
淋しさを紛らすために旅に出る  
猪で走り続けて悔いはない  
角ばった心で和む初日の出  
還暦の赤い甚平で若返り  
あいまいに答えた歳にえと聞かれ  
手から手へ賀状を回し座が弾む  
春早々愛犬の死を報らされる  
日だまりであや取りをする子をみかけ  
ビバルデー待ってましたと春告げる  
文面に文字を踊らす怪気炎  
遣伝子に干支を添えたコウノトリ  
寒梅も膨らみ五感から春に  
ふるさことが好きで一步も出られない

陸子 節子 立亥 みさ子 英夫 芳光 螢 幸子 江美 全彦 義芳 鹿太 王枝 カズ子 よし子 秋子 信子 耕治 まさ 亀与子 イサミ 孝一 満寿蔵 正治 澄子 求芽

春うら花キュービッド忙しい  
春ですいろいろな虫が逢いにくる  
川柳塔きやらぼく 福代 天雀報

柳宏子 紫香

脳きりかえて若い仲間の風にのる  
電飾が師走の町を急ぎたてる  
余生とは生きるよろこび重ねきて  
か弱さを忘れて女強くなり  
木枯らしがふるさとの冬話したす  
雪に見舞われ足元がくるるいだす  
十二ヶ月無事に日送り神詣で  
草も木も新芽を待っているゆとり  
二十四年類のしずくは何時乾く  
師走中欠札ハガキ次々に  
雪椿いちりん庭に灯をともし  
愛の鞭たんと叱られ今日がある  
お化粧の済んだ花から風に舞う  
もう暫く世話になります旅枕  
春に暫くまで何度でも冬祭り  
歪だが好みの壺が手放せぬ  
心放せば絆の切れる音がする

千春 八重子 清人 初枝 やえ ふみ 春枝 蘭 すみえ 天雀 てい子 玲子 瑞枝 なみ 千代 恵子 日枝子 専平 扶美代 一壺 美代子 フジ かつみ

# はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

人類の幸せ核のない世界  
幸せをはかる友の数夢の数  
幸せは待つものでなく作るもの  
幸せな貌を映している鏡  
から元氣びくびく隠し咲阿さる  
リストラの気配漂う窓の席

専平 扶美代 一壺 美代子 フジ かつみ

びくびくとするからいけずしたくなる  
大海を知ってびくびくする蛙  
夫に内緒ダイヤモンドを買いました  
整形をしてびくびくと待つ時効  
子を守る母はびくびくなどしない  
信頼を崩す小さなわだかまり  
静けさを破ってビルを崩す音  
八起き目の女の意地は崩すまい  
アリバイが崩れて今日のトップ記事  
核実験地球を崩すつもりだな  
積みよりも崩す面白さを覚え  
マンネリを崩すスタッフ入れ替える  
さらさらと崩した文字に泣かされる  
煮崩れを氣にして盛った白い皿  
アリバイが崩れ土産が宙に浮く  
山崩す虫何万の命まで  
自主廃業妻もパートに出る師走  
しめ縄も鯛も小振りに年の暮  
善人の財布が軽い年の暮  
万札も崩せば飛んで行く師走  
坊さんがヘルメットかぶり師走かな  
火の車消せずには暮れてゆく  
大晦日大金持ちになれるかも

# はたる川柳同好会

田辺正三郎報

年齢重ね扉はずしたい笑顔  
野良犬もまめな吾が家一族  
狂牛病畑の肉は大丈夫  
ああタマちゃん立派な鬚に成長し

桂子 昭子 重人 泰子 一知 昭平 敦子 吐来 敏 柳宏子 庸佑 みつこ さとみ 耕策 ダン吉 洞庵 章司 志洋 りつえ 真一 満寿蔵 六点 契子 いさむ 信男 柳童

お隣の扉も開いた除夜の鐘

良いことは回転ドアで入れ替る

ああ恋し北の家族思う春

拉致家族重い扉にノブが無い

ああ口惜し最終バスが去ってゆく

ドアチェーンは羊に折るのみ

原爆の国は羊に折るのみ

職安は扉の中が冬の風

目の前でボタンと拒絶する扉

背水の陣から抜けて来た扉

民営化へ聞く扉のきしむ音

嫁がまめ有難いとは思えども

いい湯だなああ極楽と身をのばす

福相と易者もはめてくれたのに

### 熊本川柳会

高野

宵草報

和紙を漉く技が絵になる老夫婦

ちよつぱりと明日の風を信じよう

片意地の底に孤独が見えかくれ

世に拗ねてますます屈む祖母の背な

親と子の世相が合わず貝になる

詫び電話親しみ湧いて和む口

妻という尻尾外れた奴虱

はらはらと散った落ち葉に夫想う

一言があなたに弱いご用心

用心し合つて疑心暗鬼の核を持つ

リストラの父を迎える無人駅

犬だけが吠えて迎える倦怠期

靴下にそつと手をやる穴の上

実

見

長

ヤギ

雪

桂

保

黒

兎

セ

ツ

久

子

祥

風

緑

骨

正

三

郎

勝

百

笏

あ

や

子

大

三

郎

柳

詩

年齢と予算靴下詰め合わせ

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

毎日がスタート花に水をやる

スタートをうまく切りたい年始め

それぞれの場所ですタート年明け

祝箸雑煮に皆の顔揃う

お目出度う皆な言つて箸をとり

山仕事山で作つた箸使う

あらたまの顔が揃つた雑煮箸

生命線眺めて使う長寿箸

舵取りの上手な人というゲリル

まだ無事で生きているかと現況届

ひとときは詩人にかえる冬日和

今年こそ悔いなき歳と雑煮餅

温もりが欲しくて羊群れにいる

ビンゴゲーム後一枚が出てくれぬ

ジャズに乗るコーヒーカーが踊り出す

歳月も人もうたかた除夜の鐘

デジタルで若い会社動き出す

乾杯をワインカラーのマニキュアで

十指またわたしの思い通りなる

はらはらと落ち葉が奪うはくの魂

口笛でアカハタを読む兄がいた

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

洗濯機暇をくれるとやかましい

どうせならパアッとやりましょ戎さん

おしゃべりを一瞬やめて蟹させる

エツ子

和

子

幸

子

里

江

節

子

正

子

昭

三

満

壽

蔵

武

庫

坊

歌

子

し

づ

子

久

子

勝

純

巳

糸

子

百八ツの鐘鳴り渡り新春が来た

おせちにも飽きて宅配ビザをとる

縄のれん気迫を抜いた顔と顔

来る春へ気迫をためている書

一本の旗を守っている気迫

磨崖仏仰げば慈眼ふりそそぐ

師と仰ぐお方まで風呂掃除

仰げば歌つた後に来る未来

天仰き愚痴が出そつな口拭う

盛りだくさんの夢に余命の待つたなし

血気盛んあれから眼鏡曇つてる

百円で山盛りの福願つてる

天も地も人も味方にまつ盛り

盛大にライバル送り出す器量

八起きめで男花道盛り上げる

連風が迷いを連れて天昇る

正月の勝手気ままな腹時計

お正月年玉稼ぎの豆台風

イントロの長さへ正月が乾く

みかん箱すぐ空になるお正月

正月が来ててもなんにも変わらない

川柳藤井寺

高田美代子報

タレントに会えるハワイはラッシュです

真珠湾おもうハワイで遊べない

庶民には羽合温泉良い所

真珠湾悪夢のような戦中派

阿波踊り風も混じったフラダンス

お隣はちよつとゴルフとハワイまで

弘直

とみ

を

弥生

洋

宏

至

シ

マ

子

き

よ

み

幸

肇

民

生

欣

子

欣

子

欣

子

欣

子

欣

子

欣

子

欣

子

腰振ってハワイにいますフルムーン  
フラダンスだけ見て知らぬ真珠湾  
戦争を忘れてない真珠湾  
浜で焼きハワイ帰りの振りをする  
ハワイでも行くかと地図は鳥取県  
面倒見よくて年中無休です  
面倒見よい人だから輪が出来る  
面倒見いい口ポットを待っている  
面倒を避けて味方が減ってくる  
軽い口また面倒な種を播く  
面倒な話は年が明けてから  
うとうとすると検札やつてくる  
いきこむと河内弁出る紳士です  
フライングばかりしたがる僕の靴  
意気込んだ証に眉を強くひく  
いきこみを知ってくれてる僕の靴  
さあ行くぞ盲導犬の第一歩  
清水の舞台で意気がしほみだし  
舞い上る風いきこみを持っている  
意気込んだ日もありました古稀の坂  
いきこんだ介護も愛も長い冬  
戦退いて旅の始まりハワイから  
宿命の絆が重い影法師  
米寿まだ自分のことがちゃんと出来

ふくべむら川柳会

村上

信子報

婦美枝 井竿 悦子 アヤ子 耕策 ヨシ枝 みつこ かつみ 重人 和樹 志洋 美代子 栄一 鐘造 雅枝 桂子 六点 惠勇 昌子 扶美代 喜代子 みよ子 春蘭 昭子 静子 操子 昭恵

有難いまだまだ主婦が出来るから  
きびしき愛の鞭ですありがた  
有難くくりかえす日々丸く生き  
家族みな温さをくれてありがた  
奈良漬にはのり嫁は来たばかり  
漬物の味を育む京の風  
漬物が並ぶ朝市小雪舞う  
びし濡れの子猫に情け深くなる  
伝言板多弁になって雨に濡れ  
寂聴の法話を聞いて胸濡れる  
童謡のところで雨に濡れ  
濡れ縁で昔話が好きな母  
昂りを押さへベストセラーの新刊書  
翔べる日もあろうブツに道さがす  
ブツから貰う私の起爆剤  
勇気ある決断の時聖書読み  
財テクの本を枕に夢心書  
ガイドブツにほほえみのわけ探し出す  
水車小屋奥地の村で米を搗く  
田植時里の小川に水車まい  
藁屋根に水車日本の風物詩  
心豊かななれと水車が回り出す  
たゆまない水車は生きる道しるべ  
一面の雪に水車の風物詩  
葬儀屋の予算で回る水車  
イントロの長さへ乾く水ぐるま  
奥飛騨の思い出水車回ってた

南大阪川柳会

吉川

寿美報

和甫 春恵 寛子 信子 憲太郎 章久 柳伸 朝子 度 東雲 シマ子 蛙 寿美 宏 雅文 千梢 敏幸 珠美 弘泰 叡子 日出子 たもつ 志華子 なぎさ 重人 桃花 三男

ふる里に水車の回る家がある  
からくり人形遊びの客を楽しませ  
スポーツと言っては遊ぶゴルフ場  
外面は遊客密談奥座敷  
介護濡れ雑巾が決意する  
ひとりより二人でぬれる法善寺  
しつとりと濡れて立つてる辻地蔵  
岩美川柳会 石谷美恵子報  
賀状から元氣もらって始まった  
あぐらかく長いお経が始まった  
出る杭よ打たれてからの始まりだ  
山越えておこう情熱あるうちに  
情熱がくしゃみしている木曜日  
情熱に水をさされて燃え上がる  
芸術にモラルが邪魔をして困る  
結び目を解くとささやく声がする  
モラルから食み出た独楽の転びぐせ  
情熱をかけた庭には四季の花  
酒に酔い情熱的な女になる  
家事をする情熱だけはピンク色  
手術をしても情熱がわいてこぬ  
夢ばかり追う情熱に飽きて来る  
トンネルを出たらモラルに縛られる  
親の背でしつかりモラル見て育つ  
入れた歯にたくあん小気味よい音よ  
発音で田舎者だと見抜かれる  
情熱と頑固がわからなくなった  
急がねば情熱の灯が消えそうだ

洞庵 萬の 遠野 柳弘 初太郎 清成 柳宏子 主一郎 蟹郎 完修 完司 雅女 一粋 芳光 公乃 重忠 一夫 きみ子 はるお 睦子 和歌子 裕子 孝男 かつみ 忠良 一瑠



五〇点とつた努力をほめておく  
暮れの街行き交う男影うすい  
失うもの何もないけど生命だけ  
同じ旅装は疲れて寝てしまひ  
ご近所にわんぱく坊や居て温い

## 翠洋会

### 六吹

尚士報

計画の中にかくした玉手箱

一日を炬燵の中ではかりごと

計画は空ぶりばかり夢ばかり

計画の矢先に風邪のバスポート

根まわしをしてから計画をたてる

小大にバラ家の計画いま無残

金がいる計画日本呼び出され

都市計画人のおいしを消していく

米寿まで達者でコロリ逝くつもり

バレンタイン射止めるプラン練っている

計画はどうあらうとも減る福祉

融け始めにこれこして雪だるま

まじまじと見れば仁王も笑つて

にこにこが続かず介護今日も暮れ

思い出し笑い幸せ二度運ぶ

茶柱が立つてにこにこ朝の顔

にこにこ首だけ出した露天風呂

お日さまがニコニコしてるクレヨン画

力まずにふわふわ行こう羊年

やさしい目羊にもある底力

大海に力一杯果立つ孫

茜

一炊

柳宏子

かすみ

千梢

義

志華子

絹子

伽羅

孝一

正雄

真理子

尚士

澄花

桃花

東雲

日の出

希久子

蕉子

蛙

春

正坊

舞夢

恭昌

観子

会美

誰よりも娘力になつてくれ

逆転のパワー全開する男

半世紀会えた握手に力入り

力対力空しい答出る

神のこころ女に命産む力

ガムシヤラな力が欲しい気が欲しい

サークル檸檬

西出

楓葉報

初恋は戦火と共に消えましたが

花八つ手 慎しみ深い恋もあり

恋人の香りをいつもポケットに

初恋の燃えかすをまだ抱えている

恋というこしやくな思ひせず夫婦

ケイタイが取り持っている若い恋

自画像にかりそめの恋秘めてる

水琴窟 恋の奏でるものを聞く

羊より恋をかぞえて眠るべし

過去形の恋が時々喋り出す

実らない恋秘めて咲く水中花

恋に破れ自分さがしの旅に出る

恋をしたあかし携帯通話料

夫には内緒の恋のものがたり

王冠を捨てた世紀の恋もあり

くらぼ川柳会

前坂なお美報

さと美

富子

照子

楓葉

理恵

みつ子

房子

みつ子

光久

遠野

哲夫

あずき

義子

希久子

保子

たもつ

智恵子

澄子

楓葉

千代

正坊

美智子

なお美

小生

ふみ子

踏まれても根強い草は生えてくる

満月が拉致の秘密を知っている

秘密だと言うから喋りたいわたし

法の裏くぐり世の中わたっている

法の目をくぐる知恵者たまにいる

助演賞へ贈ろう古希の春

顔見るとへらへら金魚尻尾ふる

捨てた男の影をそっと踏みつける

へらへらの紙に想いのたけを書く

この話秘密にしても意味がない

法ひとつ情の河に流される

修羅の旅マリあの像を踏んでいる

目玉焼きが秘密をばらすかもしれぬ

たくさんの踏み絵を胸に抱いている

浮いている風船秘密なのかなあ

法よりも神の裁きは恐ろしい

深呼吸秘密一つを吐くように

へらへらと奥の部屋まで入り込む

シンボルを踏み絵に変えたマンホール

濡れ落葉はめてあの世へ送り出す

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

梅の花 坂の途中で咲き競い

ときめきの坂道海に続いている

坂道をいくつも越えてまだ続く

無視されて笑顔を武器に立ち向う

常子

螢

静生

かつみ

和代

帆雀

重忠

みち子

つや子

キヨノ

小鹿

一眸

はるお

一揆

菜美

あらた

久江

遊子

涼子

公弘

紫香

巴子

久太郎

蛙

タミ

春

見清

スマイルの消えたわが子はいじめかも  
目の保養 心にしみる名画展  
愛だけで空いたお腹は養えず  
養護過ぎ大猫までが医者通い  
養つてくれた地球が出す悲鳴  
毎日が休養なのに肩が凝る  
英雄も凡夫も焼けば灰になる  
英雄のもとに倒れた人の数  
英雄が英雄うたうシンフォニー  
落丁がところどころに偉人伝  
英雄の母で目立たぬ場所が好き  
毎日がすることいっぱいある余生  
一・一七忘れられない忘れたい  
三味の糸ブツリと切れて音沙汰なく  
はらはらと流す涙にだまされる  
老いて子に言われて同居することに  
ババママが輝いている子沢山  
言いつきか足りぬか言葉むつかしい  
涙声の訴えだから身構える  
犯人を追う人ごみが邪魔になり  
大寒の夜を粕汁にあたたまる  
旗立てて生きる他なし車椅子

富 柳 会 池 森子報

コスモスの種が減反告げに来る  
万感の想いを告げる掌  
縄のれん仮面を脱いだ顔ばかり  
終りまで一緒いっしょと言うてはる

庸 佑 満寿蔵 英子 玲子 啓生 緑骨 則彦 正坊 千津子 実 萬的 石舟 求芽 郁子 都代子 メ女 慶子 重人 満寿巳 博子 柳宏子 寿美子 つえ子

和子 一慧 昭水 恵勇

悪ガキを育てた広場今はなし  
時どきは狂つて見せる花時計  
告げ口の旨いカラスが社に一羽  
鉛筆が一本あればアーチスト  
母さんの膝は子供の広場です  
子育てに終点はない親の愛  
ドロップの缶から踊り出る明日  
時計屋で残り時間売つて見る  
翺ひ立つて終点あたり乱気流  
寺からのメールお金の要る話  
人間の姿で告げる鬼の慈悲  
真夜中の羊を呼んでいる珈琲  
一日のドラマのあとは熱燗で  
すんなりと許した後の落し穴  
春の街で受胎告知をはにかんで  
ポインセチアの赤と乗り切る答案紙  
夕映えの広場に伸びる君の影  
シワだらけの両手幸せ握りしめ  
学園の広場に拘ねた靴おく  
底辺の太鼓を叩いている斜塔  
交代の計器故障を告げている  
終点は極楽駅と決めている  
仲の好いふたりに逢う終の駅  
牛歩でもいいと終点までの意地  
にんげんの広場に上も下もない  
ブランコの涙を拭いたのはひろば

高知川柳社 川竹 松風報

地方色豊かに開く野菜市

洋介 鐘造 亮幹 深雪 冬虹 和代 アキ 扶美代 夕子 勇 紅紫朗 一夫 誠 文子 初太郎 萩乃 明美 花梢 巳代一 哲史 東雲 宏至 ひろこ 信子 欣之 森子

かよ

孫が住む地方の気象予報聞く  
宅配で届く地方の母ごころ  
久々に土佐訛り聞くUターン  
逸材が埋もれています各地方  
観光に地方の偉人かつぎ出す  
ある予感友は明日を考える  
あまりにも予感通りで怖くなる  
確信に近い予感で逢いに行く  
今逢えばやけぼつくりになる予感  
虚か実か刻がメリット得る落葉  
早足の秋に戸惑い踏む落葉  
フカフカの落葉は虫の防葉衣  
紅葉ロード人の事情で姿消す  
山登り落葉カサコン語りかけ  
三叉路の落葉が踊るつむじ風  
次世代を新芽に譲り散る落葉

川柳ふうもん吟社 杉本 孝男報

不器用な文字で挑戦状が着く  
ファックスが届いています冥土から  
御飯まだおやおやつき食べたでしよ  
凛とした背なは死ぬまで子にさらす  
ボンコツになって大事にされてる  
色っぽい仕掛けにかかりたくもなる  
色っぽい自分らしさに目覚めたよ  
危機争むすき間風とは気付かない  
自分史へ心の旅路膨らみます  
冥土からこちらを向いている刺客  
帆に風を孕みロマンの旅へ出る

幸二 圭二 暖功 佳風 佳子 圭風 美々 哲史 和江 てるみ 成美 京香 松風 良雄 洋々 草風 三津子 良雄 彰夫 修 修 春名 益子 志げ緒 伝平

晒された首にもあつた喉仏

近道をして冥土まで行っちゃった

末席におやおや君も居たのかい

人生の旅路お前と虹を追う

飯の世の罪は冥土で裁かれる

僕のより立派ボンコツ車が並ぶ

母さんのサンタがやけに色っぽい

大漁の風を孕んだ蟹の船

非常口におやおや鍵がかけてある

人生の旅路シナリオなどはない

死に恥を晒す草ぼうぼうの墓

ギャル神輿胸の晒布がまぶしくて

いい旅路だったと終の日に言おう

人間の匂いなくなるまで晒す

札束がおやおや物を言っている

ごみ箱に道のない絵が捨ててある

年賀状おやおや年の暮れにつき

授章まで旅路の終わり封をする

恥と汗かいた旅路を振り返る

### 川柳クラブわたの花 吉村

定年後妻は元気で留守が良い

逃げ込んだどこにもあつた落し穴

煩惱を一つずつ消すお念仏

逃げるしか手のない妻の低気圧

帳尻にはつと息つく小商い

不眠の夜羊と息を合わせてる

さくら咲く老いもピンクの夢を追う

嫁姑上手な嘘で波立たず

茂登子

はつ江

圭一郎

鬼桜

無限

静生

一京

蟹郎

忠良

美恵子

節子

一瑤

はるお

雅女

公弘

毅

宗明

孝男

一風報

宏至

ミツ子

君江

宏

一風

幸枝

隆盛

晴美

カロリーが気になりながら盗み酒

高齢化医者と薬で生きている

ぼんやりと想い出している君の癖

さあ一杯文句はないねこれでチョン

アルコール抜けた身体で天仰ぐ

ユニセフの願いちよつぱり募金する

タレントの仰天発表ソレホント

仰向いた空は私と鳥の界

妻の知恵借りて帳尻やつと合

小兵の気迫が綱を引きよせる

実る穂に御苦労さんと赤とんぼ

大吉を引き当て孫の弾む声

世話をせず血のつながりの遺産わけ

孫帰るちよつぱり淋し今朝の膳

老母に似たわたしの仕草娘もして

馴れ初めを問えばウッフと老いふたり

追伸に心の裏が盛つてあり

帳尻が合わないままの除夜の鐘

せち料理作らんとこか二人やもん

効き具合育毛剤に聞いてみる

飲みながらメルヘン語るへんな奴

### 川柳さんだ 北野

年越して恵比寿に変わる屠蘇を酌む

中東の髭が火種を抱いている

憧れをロマンチックな胸に秘め

笑い顔心豊かにしてくれる

かまくらで子と遊んだ日鬱忘れ

早くとき財政難の雪だるま

俊子

恭一

奈良司

友甫

正純

一純

本たえこ

赤妙子

ますみ

まさこ

いつふみ

義明

春江

順生

知佐子

美代子

民

八寿子

肇

増道子

哲男報

菊子

朋月

歳子

サクラ

真由子

雅司

今年こそ今年こそはと虎へ夢

自慢した豊かな胸が仇となり

親の愛豊かに受けて子は育つ

豊かさの陰で絆が緩みかけ

ゆたかですいつも調子のいい私

あこがれも賞味期限があるらしい

むらくも川柳会

毛利

元氣だと賀状の字まで踊ってる

賑やかに何んだかんだと餅作り

年賀状カラー写真の孫可愛い

年賀状ポストの音に友の筆

一枚の重み伝える年賀状

女二人おせちつまずく年あける

大餅を背負って転ぶ初誕生

くよくよは忘れ川柳道楽し

長柳会

加島

由一報

すんなりと約束できて手をたたき

見送りは誰もなかった始発駅

子の門出出世を願う祝鯛

あまりにもすんなりいって拍子ぬけ

門出の日涙こらえる父の肩

物事をすんなり運ぶ人の徳

いろいろな門出で綴る母の地図

門出した息子の便り待つ不安

すんなりと値上げが決まる酒煙草

長野にも小山田という桃源郷

あらたなる門出を祝い咲くつばき

正和

藤朗

千代

哲男

忠

幸報

信夫

定子

仲男

安男

彰

ふさ

幸

明朗

輝治

由一

武男

英美

敬二

芳野

ひろ

たけし

正一

輝子

幸雄

旅立ちを祝ってくれる初日の出  
床の間に桃一輪の新世帯

義理と見栄すんなり捨てた身の軽さ  
ひと枝の桃で弥生の風となる

二度の戦門出明る靴の音  
すんなりと妻に渡った主導権

娘の門出喉を通らぬ祝膳  
桃割れでにつこり母はセピア色

花嫁の涙にふれた牡丹雪  
振り向けば母の涙を見る門出

すんなりと東大へ行く他人の子  
桃の美に罪を残した指の跡

わけあって田舎暮らしになる門出

### 川柳塔おとしり

原 みを報

着地点見事に決めて余生あり  
オンザロックに見事な嘘が浮いてきた

歎ふるう背中の汗は見事なり  
無名から見事ノーベル賞を受け

生きた歳だけ今年こそ今年こそ  
今年こそ心の扉開け放つ

今年こそ出来ることだけ目標に  
今年こそ百点ママになりきろう

今年こそ命を賭ける詩の道  
健康に赤い下着が良いらしい

老翁に赤鉛筆がよく禿びる  
旅支度白髪に似合う赤を着る

大好きな春を待ってる赤い靴  
赤い糸もつれて秘話が漏れてくる

喜寿迎え命に紅を引き直す  
仲人はまつ赤な嘘をついていた

靖子 マサ 直樹 正子 けい子 和代 三和子 和子 富美子 潤子 正美 一慧 良男

喜寿迎え命に紅を引き直す  
仲人はまつ赤な嘘をついていた  
日の丸の赤は血潮の赤だるう  
青春が赤いグラスの中にある  
献血に備え真っ赤なジュース飲む  
昭和史を真っ赤に染めたらキノコ雲  
ネクタイを赤にきめたら福が来た  
熟れた柿親子カラスがねらつてる  
山鳥が南天はしき顔見せる  
太陽がクシヤミしているクレヨン画

### 川柳エスボ

山本 三郎報

新聞を抱え階段駆け上がる  
新しさ求める中に古さ知る  
新年の初日昇るをビルに見る  
年新た右脳左脳の機嫌とる  
借金を背負った新築ツンと建ち

新しくて心に栄養独居会  
夢に向かい心新たにして励む  
新雪を踏みしめてゆく神々の山  
新聞もポストで朝寝 日曜日  
特効薬いたちごつこの新手術  
贈られた花に決意もまた新たな

新旧の笑顔が揃ったお正月  
心血にじむ新商品のバヒット  
日々新たな視点変えたらラダイス  
新用語覚えられないもどかしさ  
新玉の言葉目出度い響きして

新しい足袋の白さや初句会  
淋しいな今日は新聞休刊日

喜寿迎え命に紅を引き直す  
仲人はまつ赤な嘘をついていた  
日の丸の赤は血潮の赤だるう  
青春が赤いグラスの中にある  
献血に備え真っ赤なジュース飲む  
昭和史を真っ赤に染めたらキノコ雲  
ネクタイを赤にきめたら福が来た  
熟れた柿親子カラスがねらつてる  
山鳥が南天はしき顔見せる  
太陽がクシヤミしているクレヨン画

登美 一弘 宏章 庸雄 彰雄 道子 富貴子 仁子 三郎 昭一郎 政雄 れい子 とし子 はつ子 ルイ子 星花 任有 三峰 文子 文子 団地 ゆき子 高栄 一幸 さち子

## 第3回 春はくるぼこ川柳大会

とき 4月6日(日)午前10時30分開場  
ところ いなば温泉郷・浜村温泉「浜村ビ  
ューホテル」TEL 0857-821-0531  
(JR鳥取駅から米子方面へ5つ目

「浜村駅」下車徒歩5分  
題と選者(各題2句) 出句締切 正午  
欠席投句拝辞

### 当日出句「笑」

「草」 河内 天笑選  
「飛」 天根 夢草選  
「山」 中尾 飛鳥選  
「節」 山本 義子選  
「鬼」 野口 節子選  
「節」 藤原 鬼桜選

### 事前投句

(当日出席者に限る)  
「ベット」 稲村 遊子選  
事前出句先干 689-0342 鳥取県気高町殿  
410-102 稲村遊子あて

### 締切

3月31日(当日消印有効・葉書使用)  
参加費 3000円(昼食・大会誌呈  
最優秀作品賞・優秀作品賞・秀詩賞 各題3句)  
懇親会 2000円 当日会場にて受付  
宿泊申込み先干 689-0343 鳥取県気高町飯里  
84-14 鈴木公弘あて

TEL FAX 0857-84-2886

(主催) くるぼこ川柳会(共催) 公家の会  
(後援) 新日本海新聞社 鳥取県川柳作家連盟

# 柳界展望

●出雲総合芸術祭(11月2日)の本社関係受賞者は次のとおり

〈出雲市教育長賞〉

平凡な大人になっていた

首席 竹治ちかし

〈出雲市川柳連盟賞〉

ずんずんと引つ張るもの

を引き戻す 原 章峰

殿と言う親展文書笑わな

い 川本 晔

●山陰中央新報新年読者文芸

芸川柳の部(1月3日発表)

で、久谷まこと氏が特選を

獲得した

千鈞の重みに命支えられ

●川柳ねやがわでは、平成

14年度最優秀得点者を1月

19日に発表(○内順位)

①角野仁清 ②河井庸佑

③前たもつ

●高槻川柳サークル卯の花

では平成14年度各賞を決定

〈最優秀賞〉 一階八斗醜

〈優秀賞〉○内順位

①川島諷云児 ②山本 磔

③久保田恵美子 ④長浜澄

子 ⑤河井庸佑

●城北川柳会は平成14年度

年間賞を、高橋一枝さんに

決定した。

●西宮北口川柳会では平成

14年度年間賞を次のとおり

決定した。

〈最優秀賞〉 西口いわゑ

〈優秀賞〉○内は順位

①田辺鹿太 ②門谷たず子

③西口いわゑ ④長縄嘉代

子 ⑤河井庸佑

●山本希久子さんは朝日新

聞社募集折り句大会「ひつ

じ」で、8135句の中か

ら7位入賞

ひっそりと仕える妻を自

認する

▼出 版▲

○富田林市が毎月発行する

「広報とんだばやし」の掲

載句を、「川柳とんだばや

し」として選者の池森子さ

んがまとめた。(12月20日

付朝日新聞に紹介) B5判

156ページ。

■小西雄々氏(鳥取県)は、

1月9日付日本海新聞「散

歩道」欄に「川柳に見る今

年の抱負」と題する一文を

発表、柳友の句を紹介した。

▽人 事△

□病気のため休会中であつ

た尼れいじ氏(理事)が復

帰。〒693-0052出雲市松寄下

町619 電話0853-21

4698

□川柳塔きやらばくは新ス

タッフを次のとおり決定し

た。会長一政岡日枝子 副

会長一白根ふみ・福代天雀

顧問一八木千代

□両川洋々氏(理事)が、

11月24日の鳥取市議会議員

選挙で四期目の当選

▼計 報▲

## 新同人紹介

岩崎公誠

一 天笑・月子・玄也推薦

■弘津柳慶氏(参与・柳井

市) 12月24日肺炎のため逝

去。87歳(P96)

■岩原喬水氏(同人・鳥取

市) 1月1日脳出血のため

逝去。83歳(P97)

■越智一水氏(理事・今治

市) 1月7日心筋梗塞のため

逝去。75歳(P98)

■石原靖巳氏(理事・吹田

市) は、間質性肺炎のため

1月26日逝去。葬儀は故人

の遺志により近親者のみで

行われた。73歳

■高須賀金太氏(参与・岸

和田市) は、肝不全のため

2月10日逝去。シティホー

ル岸和田での通夜・告別式

は柳友多数が参列。68歳。

▼訂正とお詫び▲

1月号P54上段20行目、

エンやエンや、エンヤエン

ヤ P152広告右下ツク電話、

〇七三七・〇七二七

2月号P35上段1行目、

河本・川本 P86下段22

行目「生きる音を確かに」

を作者申し出により削除

常任理事会P2月3日、出

席者20名 ①第9回川柳塔

まつりの下検討 ②参与の

提案による二賞表彰規定見

直しの件 ③特別常任理事

会開催日程 ④総務部から

アンケート集計中間報告

⑤同人1名推薦 ⑥その他

次回常任理事会P3月3日

(月)13時 アウイーナ207号

| 句 会 名               | 日 時 と 題                             | 会 場 と 投 句 先                                                        |
|---------------------|-------------------------------------|--------------------------------------------------------------------|
| 城北<br>川柳会           | 15日(土)午後1時から<br>染まる・パワー・策・自由吟       | 中宮老人憩いの家<br>地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分<br>〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子      |
| 岸和田<br>川柳会          | 15日(土)午後1時半から<br>脱ぐ・願う・除く・這う        | 市立福祉総合センター2F<br>南海線岸和田駅東歩3分<br>〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村        |
| 川柳会<br>梨花           | 15日(土)まで<br>雪解け・桃・誠・ゴーギャン<br>雑詠     | 投句先<br>〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205<br>坂田和歌子                         |
| 岬川柳会                | 16日(日)午後1時半から<br>茶の間・主婦・スタイル<br>自由吟 | 岬町 みさき苑ふれあいセンター<br>〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592<br>八十田洞庵               |
| 川柳<br>ねやがわ          | 16日(日)午後1時半から<br>騒ぐ・レンズ・近道・自由吟      | 寝屋川市立総合センター4F<br>京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車<br>〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 |
| もくせい<br>川柳会         | 17日(月)午後1時から<br>トラブル・見事・砕く・自由吟      | 豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分<br>〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊             |
| 高槻川柳<br>サークル<br>卯の花 | 20日(木)正午から<br>訛る・履歴書・ほのぼの・暇<br>自由吟  | 高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分<br>〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児               |
| 東大阪市<br>川柳<br>同好会   | 22日(土)午後6時から<br>近い・ペン・咲く・砂          | 東大阪市立社会教育センター<br>近鉄布施駅北長堂小学校隣<br>〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風       |
| はびきの<br>市民会<br>川柳   | 23日(日)午後1時から<br>歌・相談・パーティ・「鏡」       | 羽曳野市立陵南の森公民館<br>近鉄高鷲駅北東徒歩10分<br>〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏       |
| 川柳<br>ふうもん<br>吟社    | 23日(日)午後1時から<br>点・カード・駄目ですか         | JR鳥取駅構内 シャミネホール<br>〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京                    |
| 京都<br>塔の会           | 24日(月)午後1時から<br>眉・切る・道具             | ハートピア京都<br>地下鉄烏丸線丸太町駅南改札⑤番出口すぐ<br>〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽     |
| 川柳塔<br>みぞくち         | 24日(月)午後7時半から<br>卒業・期待・雑詠           | 溝口五区集会所<br>〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3<br>小西雄々                      |
| 南大阪<br>川柳会          | 26日(水)午後6時から<br>細波・志・すい・節句          | 玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分<br>〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲           |
| 川柳クラブ<br>わたの花       | 28日(金)午前10時から<br>脳・馴れる・貨車・雑詠        | 八尾市生涯学習センター<br>〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風                       |

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

# 3 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

| 句 会 名                 | 日 時 と 題                                    | 会 場 と 投 句 先                                                              |
|-----------------------|--------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------|
| 富 柳 会                 | 1 日(土)午後 1 時から<br>安・重い・雑詠                  | 富田林中央公民館<br>(近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m)<br>〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子        |
| 倉 吉<br>川 柳 会          | 1 日(土)午後 1 時から<br>テロ・時刻表・喜ぶ                | 倉吉市 明倫公民館<br>〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17<br>谷口次男                       |
| 尼 崎<br>いくしま           | 7 日(金)午後 1 時から<br>油断・絵・雑詠(A・B)             | サンシビック尼崎3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分<br>〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代               |
| 川 柳 塔<br>な ら          | 7 日(金)午後 1 時から<br>覗く・節・披露                  | 船橋フロムワン (船橋商店街内)<br>近鉄奈良駅西・JR奈良駅北歩10分<br>〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子 |
| 打 吹<br>川 柳 会          | 8 日(土)午後 1 時から<br>爽快・わくわく・睨む               | 倉吉市上灘町 上灘公民館<br>〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈                                |
| 川 柳 塔<br>ま つ え        | 8 日(土)午後 1 時半から<br>相性・褒める・ときめき             | 松江市雑賀町 雑賀公民館<br>〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島添丘                             |
| 川 柳 塔<br>みちのく         | 8 日(土)午後 4 時から<br>育つ・ガラス・もたもた              | 弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2 階「川柳道場」<br>〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵                |
| 八尾市民<br>川 柳 会         | 9 日(日)午後 1 時から<br>大・騒ぐ・胡座・雑詠               | 山本コミュニティセンター内3F 学習室 (近鉄山本駅)<br>〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子              |
| 川 柳 塔<br>わかやま         | 9 日(日)午後 1 時から<br>人力車・リサイクル<br>それから・「春」    | 近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前<br>〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良                  |
| 西宮北口<br>川 柳 会         | 10日(月)午後 1 時から<br>無名・沖・ピラ・自由吟              | 西宮市立中央公民館<br>阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにののみや<br>〒662-0841 西宮市岡度町2-19-515 山本義子  |
| 川 柳 塔<br>唐津支部         | 10日(月)午後 1 時半から<br>迷う・ジョーク・噂               | 唐津市 栄町公民館<br>〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑                                 |
| ほ た る<br>川 柳<br>同 好 会 | 11日(火)午後 1 時から<br>草・信用・忘れる                 | 豊中市立螢池公民館<br>阪急・モノレール螢池駅西へ150米<br>〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎            |
| 尼 崎<br>尾 浜<br>川 柳 会   | 11日(火)午後 1 時半から<br>毛糸・嫁ぐ・自由吟               | 尼崎市立立花公民館 尾浜分館<br>阪急武庫之荘北口から市バス⑨番尾浜2丁目下車<br>〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺麗太   |
| 堺川柳会                  | 13日(木)午後 1 時から<br>投げる(共選)・年上<br>あ・き・た(折り句) | 堺市民会館4 F 小集会室<br>〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑                             |

## 編集後記

☆地球温暖化が問題になって久しい。このままで行けば地球環境の汚染が進み、人類滅亡に繋がる。そこで世界が団結して温暖化ガスを減らそうと「京都議定書」が作られた(97年)。しかし、最大の排出国であるアメリカが「科学的根拠がない」と離脱してしまい、地球の将来はなほだん心もたない。

☆とは言え、企業や個人各々に危機意識は広がっている。わが国の昨年上半年期の新車売上げは、低公害車が57%を占めたという。また、日用雑貨品でも「地球に優しい」製品が沢山開発されている。

☆わが家でも孫達をまじえて話し合い、電気・ガス・水道など身近なものを節約することにしました。どうして

も真冬は暖房費が嵩む。ということは、その分温暖化ガスを多く出している証拠。

☆実家にあつた古着を再利用したもので、まだ存命だった夫と私の二人分もらつた。その時は「ダサイなあ」と、申し訳なく思いつつしまひ込んでいた。先頃とり出し着てみて、母の思いやりがこもつた真綿の温さにびっくり。これを冬中愛用したお陰でストーブを点ける時間が短縮できた。亡夫の分は中一の孫の勉強用に進呈した。

☆三月はこの半纏が脱げる日が多くなるが、今年の冬は些かでも地球に優しくできたと自負している。(ふ)

## ひとこと

### 錆びとり川柳

頭の使い方が偏つていると、ボケるそうである。使わない所が錆びてくるのであろう。

最近、友人の勧めもあり、川柳を始める事になった。おかげで、錆び付いているところが、少なくとも一ヶ所あることが確認できた。兼題を与えられ、ウンウンと唸つても頭は真つ白のままである。

何とかそれらしきものができたので、恐る恐る投句させて頂いたら、いくつか抜いて頂いた。すわ、隠れた才能が、とのほせ上がったが、その後の成績は芳しくない。今にして思えば、選者の方々の教育方針であつたのであろう。

その後、句会にも出席させていだき、川柳の楽しさを教えて頂いている。しかし、錆が落ちた気配はまだ感じられない。

(今井 弘之)

○新しく出た『ゴルゴ13』を息子が持つて来た。超A級狙撃者のスーパードクター・アクションが謳い文句のコミックである。漫画とはいえない死身のヒーローには何時も惚れ惚れさせられる。自慢じゃないが我が家にはゴルゴは百冊以上あるのだ!

○『ルドルフとイッパイアツテナ』(斎藤 洋著・講談社)シリーズ三冊を読む。黒猫ルドルフと兄貴分のトラ猫イッパイアツテナのと

びきり愉快な、知恵と勇気を息子を持つて来た。超A級狙撃者のスーパードクター・アクションが謳い文句のコミックである。漫画とはいえない死身のヒーローには何時も惚れ惚れさせられる。自慢じゃないが我が家にはゴルゴは百冊以上あるのだ!

○小学中級向きの創作といえ猫大好きの人にもお薦めしたい。かくして我が家の黒猫のアキユキはルドルフ略してルドちゃんと呼ばれることに……。

○昨年末、南フランスを旅した。編集の合間を縫っての駆け足ツアーであつたが、ゴッホゆかりのアルルが予想外に良かった。帰国してからアーヴィング・ストー

# 川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（5月号）

地名

姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



## 作品募集

5月号発表(3月15日締切)

|          |          |
|----------|----------|
| 川柳塔(8句)  | 河内天笑選    |
| 水煙抄(8句)  | 奥田みつ子選   |
| 愛染帖(3句)  | 波多野五楽庵選  |
| 茴香の花(3句) | 政岡日枝子選   |
| 課題吟(3句)  | 「正」村上信子選 |
| 「種」      | 「けれども」   |
| 保田絹子選    | 安達はじめ選   |

初歩教室「休み」(3句) 三宅保州担当

6月号

課題吟「自然」「サイズ」  
「けが」  
初歩教室「チャンス」

## 本社3月句会

とき 3月6日(木) 午後1時・2時半締切  
ところ アイーナ大阪 4階 金剛  
ー開会時間にご注意下さい。  
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441

兼題 「やわらかい」  
「愛」  
「ほいほい」  
「踊る」  
「生む」

松原寿子選  
池森子選  
岩佐ダン吉選  
三宅保州選  
河内天笑選

席題 1題 当日発表(各題2句以内)  
会費 1000円 投句料 500円

## 本社4月句会 4月7日(月)

兼題 「あいまい」「急ぐ」「ひらひら」  
「萌える」「笑う」

## 夜市川柳募集

第10回「草」 天根夢草選  
ハガキに3句 3月末締切  
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3  
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。  
(2)愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限り、ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。  
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。  
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。  
川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料76円)

半年分 五千円(送料共)  
一年分 九千八百円(同)

二〇〇三年(平成十五年)三月一日発行

編集兼 河内権治

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町一〇一六  
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-14番  
振替〇〇九八〇一五―三三三六八番

# 第27回 全日本川柳2003年香川大会

日時 平成十五年六月十五日(日) 午前十時開場  
会場 マツノイ・パレス(クリスタルホール)

〒六二一七五 香川県香川郡香川町川東下一八七八

TEL 〇八七(八七九) 三四一一

交通機関 J R高松駅から車で30分・高松空港より車で5分  
当日送迎バス運行予定

宿題 第一部(事前投句、四月十五日締切)

「橋」田中 新一選 「睡むを」鈴木 国松選

「うどん」奥田みつ子選 「平野」植木 利衛選

ジュニア部門(小・中・高校生)

「橋」松岡恵美子選 「睡むを」定本 広文選

「うどん」石川 三昌選 「平野」若草はじめ選

35×18cmの句箋一枚に一句宛記入・各題二句・無記名・封筒に住所・氏名明記、投句料一、〇〇〇円(定額小為替・現金書留同封して左記宛郵送のこと。ジュニア部門は投句料無料

投句先 〒七五〇〇四 大阪市北区天神橋二丁目北一〇二

ステッピン南森町七〇二

(社)全日本川柳協会 宛

TEL 〇六(六三三)二二二二 FAX 〇六(六三三)二二四三三

郵便振替口座 〇〇九七〇九一三五七五

宿題 第二部(当日投句、十一時二十分締切)

「公園」吉岡 茂緒選 「休む」佐藤 美文選

「宝」福岡 竜雄選

第二次選者 各題二句当日配布の句箋に記入

吉岡 龍城・今川 乱魚・磯野いさむ

竹本瓢太郎・大木 俊秀

会費 四、〇〇〇円(昼食、記念品含む)

表彰(予定) 文部科学大臣奨励賞・参議院議長賞他

\*

(社)全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ  
全日本川柳香川大会実行委員長 吹田 朝児

TEL・FAX 〇八七(八八九) 一一七七

## 〈前夜祭ご案内〉

前夜祭 平成十五年六月十四日(土) 午後六時

会場 マツノイ・パレス(さめぎの間)

〒六二一七五 香川県香川郡香川町川東下一八七八

TEL 〇八七(八七九) 三四一一

会費 八、〇〇〇円(会費・アトラクション)

問い合わせ先(大会・前夜祭、四月十五日締切)

〒六二一八六 香川県高松市仏生山町甲二五二四一

村尾孝峰 方 日川協香川大会事務局 宛

TEL・FAX 〇八七(八八九) 三三八五

送金先 郵便振替口座番号 〇一六七〇〇九一〇二六〇

(会計担当) 谷口 幹男

## 〈宿泊・観光ご案内〉

宿泊 マツノイ・パレス・空港グランドホテル 他

宿泊料金・泊朝食付・税込み 六、〇〇〇〜九、〇〇〇円

(一名一室希望の方はその旨記入して下さい。)

観光 ①屋島コース 屋島・四国村・栗林公園観光

六月十四日(土) 十一時〜十七時十分 六、八〇〇円

②琴平コース うどん学校体験・こんぴらさん参拝

六月十四日(土) 十一時〜十七時十五分 七、五〇〇円

③琴平(泊)コース こんぴらさん・善通寺参拝

六月十五日(日) 六、〇〇〇円

(大会終了後から翌日十四時五十分高松駅着)

その他、小豆島コース(泊)があります。

最小随行人数二〇名とし、それ以下の場合には料金変更があります。

宿泊、観光の申し込み締切は四月十五日必着です。

別紙申込書に内容記入の上、合計金額を直接旅行社へご入金下さい。

送金先 U F J 銀行 千代田支店 普通 5464512

(株)ジェイティービー 高松支店